

# 社会臨床雑誌

2001年6月3日

第9巻第1号

はじめに..... 日本社会臨床学会編集委員会 ..... 1

## 〈学習会報告〉

「少年犯罪」をどう考えるか ..... 佐々木 賢・平井 秀典 ..... 2

## 〈論文〉

「心の教育」・「心のケア」論考 ..... 小沢 牧子 ..... 7

「心の教育」「生きる力」に感わされずに ..... 原内 理恵 ..... 15

心理主義化社会における社会臨床学の課題(上) ..... 井上 芳保 ..... 26

障害者からみた統合教育 ..... 竹嶋 龍雄 ..... 37

最近の知能研究の動向 ..... 山下 恒男 ..... 46

児童相談所から見えてきたこと ..... 瀬川 三枝子・戸恒 香苗 ..... 61

赤子を流すなどカニは泡を吹く ..... 松田 博公 ..... 68

## 〈「映画と本」で考える〉

カウンセリング批判も「幻想と現実」か? ..... 浪川 新子 ..... 71

## 〈“この場所”から〉

小学校1年生とのドタバタな日々 ..... 大垣 智紀 ..... 79

第9回日本社会臨床学会総会のお知らせ ..... 表紙裏

編集後記 ..... 81

『社会臨床雑誌』・『社会臨床ニュース』への投稿のお願い ..... 裏表紙裏

日本社会臨床学会編集

# 日本社会臨床学会第九回総会のお知らせ

## 日本社会臨床学会運営委員会

日本社会臨床学会第九回総会を以下のように開催します。詳細は、「社会臨床ニュース」41号42号をご覧ください。

日程： 二〇〇一年六月二三日十二時～六月二四日十六時

場所： 札幌学院大学

参加費： 2000円(交流会参加費は別途3000円)

### プログラム

六月二三日(土)

12:00 受付開始  
12:30～13:30 定期総会  
14:00～17:00 シンポジウムI

「共に生きる」を検証する～「健常者・障害者」問題を軸に～

発題:林恭裕(北海道社会福祉協議会)・横井寿之(北海道医療大学)・篠原睦治(和光大学)

司会:能登睦美(札幌市立開成小学校)・平井秀典(塩浜福祉園・社会臨床学会運営委員)

18:00～20:00 交流会

場所:札幌学院大学生協「文泉」

六月二四日(日)

10:30～12:00 記念講演  
「静かな大地」の回復～環境・社会・文化～  
講演者:花崎皋平(さっぽろ自由学校「遊」)

13:00～16:00 シンポジウムII

学校はどこへ行くのか～「心の教育」問題を軸に～

発題:伊藤進(北海道教育大学)・原内理恵(小学校教員)・小沢牧子(和光大学)

司会:三輪寿二(茨城大学・社会臨床学会運営委員)

## はじめに

## 日本社会臨床学会編集委員会

社会臨床学会の第9回総会は、2001年6月23日(土)24日(日)に北海道江別市の札幌学院大学で行われます。今年も例年通り4月末の連休に行われるのではないかとされている方も多いと推察しますが、総会はこれから開催されます。6月の北海道はライラックの花が咲き誇り、一年で一番良い季節とのことです。表紙裏の案内をご覧ください、ぜひ札幌学院大での総会にご参加ください。

本号には、その総会にかかわる論文が2本掲載されています。小沢牧子さんの『心の教育』『心のケア』論考」と原内理恵さんの『心の教育』『生きる力』に感わされずに」です。第9回総会では「学校はどこに行くのか～『心の教育』問題を軸に～」というシンポジウムが開催されますが、お二人はそのシンポの発題者となっています。小沢さんは「心の教育」「心のケア」という言葉が登場してくる背景を1980年代に遡って丹念に説明し、その問題点を浮き彫りにします。原内さんはやはり80年代にご自身が経験した生徒とのかかわりを紹介し、その体験を基に、「心の教育」の問題点に迫っていきます。お二人が書かれたものはシンポジウムの発題に直接つながっている内容となっています。どうぞお読みください。なお、当日のシンポジウムでは、8巻3号に文章を寄せていただいた北海道教育大の伊藤進さんも発題者となられています。

本号には他に5本の論文・文章が掲載されています。竹嶋龍雄さんの「障害者からみた統合教育」は、小・中学校時代統合教育をうけ、現在障害児学校に在籍している二人の生徒の作文・日記を紹介し、その文章を通して統合教育の問題にせまっていきます。山下恒男さんの「最近の知能研究の動向」は、最近の知能研究には脳あるいは神経心理学的な裏付けを誇示する傾向があること、生理学に依拠する傾向があることを示します。しかしその生理学的研究もこれまでの知能研究が行っていた社会適応による意味づけを求めており、「生理還元」と「社会適応」は相補的關係にあることを明らかにしています。戸恒香苗さんの「児童相談所から見えてきたこと」は、神奈川県中央児童相談所で児童相談員をしている瀬川三枝子さんに最近の児童相談所の様子についてインタビューし、戸恒さんの職場での思いを混ぜながらまとめられたものです。虐待をめぐるマスコミ報道やADHD(注意欠陥/多動性症候群)という病名の広がりなどが児童相談所にどのような影響を与えているのか、具体的に語られていきます。井上芳保さんの「心理主義化社会における社会臨床学の課題(上)」は、井上さんが第8回総会などで呈示した社会臨床学の可能性について述べたものです。小沢牧子さんとの視点の違いを出しながら、あるいは臨床社会学との違いをまさぐりながら学の可能性を追求していきます。松田博公さんの「赤子を流すなどカニは泡を吹く」は、第8回総会報告(8巻2号)や2000年度社会臨床学会夏の合宿報告(8巻3号)などでの社会臨床をめぐる討論に言及します。社会臨床学会は現在の社会との関係の中で臨床を問いつけていくのか、それとも良き社会臨床を求めていくのか、といった論争なのですが、松田さんは臨床を批判するあまりより良い社会臨床を求める視点を否定するのは「産湯とともに赤子を流してしまう」ことだと指摘します。

本号には2001年1月21日に開かれた学習会『少年犯罪』をどう考えるか』の報告が掲載されています。発題者である佐々木賢さんが当日の報告をもとに論文を書き、平井秀典さんが当日の討論をまとめて報告しています。当学会は今後もこのようなテーマの学習会を開催する予定です。お読みになってご意見などをいただけると幸いです。

<「映画と本」で考える>のコーナーには、浪川新子さんの「カウンセリング批判も『幻想と現実』か?」が掲載されています。浪川さんは『カウンセリング・幻想と現実』の主の上巻のいくつかの文章に触れ、丹念に読みながら鋭い批判・指摘を行っていきます。

<“この場所”から>には、大垣智紀さんが「小学校1年生とのドタバタな日々」を寄せています。小学校1年生と担任の大垣さんとの楽しく、疲れるやりとりがいきいきと描かれています。どうぞお読み下さい。

最後に前号(8巻3号)の訂正をお知らせします。表紙の目次に「<カウンセリング批判>の書」伊東進と記載されていましたが、伊藤進の誤りです。お詫びして訂正いたします。伊藤進さんをはじめ読者の方々には大変ご迷惑をおかけしました。申し訳ありません。

<学習会報告>  
「少年犯罪」をどう考えるか

佐々木賢(日本心理センター)  
平井秀典(江東区塩浜福祉園)

学習会「『少年犯罪』をどう考えるか」は2001年1月21日に文京区勤労福祉会館で開かれました。以下の文章はその報告です。先に佐々木さんが当日の報告をもとに新たに論文を書き、そのあとに平井が討論部分をまとめさせていただきました。(平井)

はじめに

犯罪白書(1999年版)によると、少年の起こした殺人件数は1950年365、1960年438、1970年196、1990年71だが、1998年には117となっている。戦後で最も多い時期は1960年前後の10年間で、1970年半ばから1990年半ばまで2桁代に減少したが、1999年に再び117件と3桁になっている。

また、警察白書(1999年版)では殺人・強盗・放火・強姦の4つを少年凶悪犯罪とみてその合計数は1950年4912、1960年8213、1970年3971、1980年2299、1990年1194となり、やはり1960年前後をピークとして下降の一途を辿ってきたのが、1999年は2381と跳ね上がっている。60年代ほどではないにしても、90年後半の上向き傾向が気になる。

90年代の特徴は社会主義の崩壊を機に新自由主義経済を唱えるグローバリズム資本が一人勝ちしている時期といえる。この背景を考えると、60年代とは位相を異にした90年代の少年犯罪の要因を探らねばならない。と同時に、日本で起こった現象をも世界的視野から検証しなければならない。

というのも、少年犯罪に限らず校内暴力やいじめや不登校、それに幼児虐待や家庭や地域の崩壊は90年以降の世界の共通現象になっているからだ。また日本の引きこもりは欧米の若年ホームレス(西欧で100万人)と同一現象ともいえるし、A・A・L A諸国のスト

リートチルドレン(約3000万人)との関係も調べねばならない。ストリートチルドレンは60年代に増え、さらに90年代にもう一度増え始めたからだ。経済のグローバル化は世界の少年に何をもたらしたか。

日米少年事件の比較

「どうせ俺はゴミカス人間だ。ガキの頃からみんなにバカにされさげすまされて生きてきた。これまでの人生で、生きてきた証はどこにもない。俺はまるで虫けらのように生きてきた。俺を必要とする人間はどこにもいやしない。もはやこの人生に夢も希望も何もない。早く死にたいと思っている。ただし俺は一人では死なない。死ぬときは皆一緒だ。」(2000年5月のバスジャック少年の発言。インターネット「2チャンネル」掲示板)

「僕はいつも一人だ。僕は誰だろう。成れない者に成ろうとしている自分。努力してもこの程度の自分にしか成れないでいる。みんなが僕を嫌っている。みんながぼくを異常だといってる。殺したいヤツが一人いる。僕なんか生まれなければよかった」(1998年5月、米オレゴン州で両親を射殺後、学校で死者2名重傷22名を出した銃乱射事件の少年の手記、1999年、米WGBM制作ビデオ)。

この二人の少年に共通項がある。その第1は疎外感と孤独である。第2はアイデンティティの喪失である。第3は異常視され、精神病院に強制入院させられるか、精神科医師の治療を受けさせられたことだ。

第4は、自殺と他殺への関心である。第5は学校での挫折感。バスジャック少年は地区トップの高校受験に失敗、次のランクの高校に入ったが、その直後不登校になった。銃乱射少年も普通高校に進学したが、姉が有名大学に進学し、それに比べ自分の成績や「無能

さ」をもどかしく思っていた。

第6は、中流家庭出身ということ。バスジャック少年の父母は会社員、銃乱射少年の父母は高校教師で、郊外に一戸建の家をもち、この4人の親は職場や地域の人望も厚く、スポーツや旅行やドライブも楽しみ、息子にパソコンを買い与えている。ともに貧困ではなく、欠損家庭や崩壊家庭でもなかった。

90年以降、アメリカで銃乱射事件が続発したが、犯人少年は全て白人の中流であり、貧困層はいない。日本でも黒磯の女教師刺殺事件や愛知の主婦殺害事件等々の犯人が「普通の少年」といわれた。また90年以降、ポーランド・ドイツ・カナダ・スペインで類似の少年事件があるが、みな中流家庭の出身者である。(『軍縮』2000年12月号、佐々木賢「少年事件とコミュニケーション」参照)。

### 若者中間層の没落

ここでは若者中間層ということばを使いたい。これは家庭が中流というだけでなく、学校の成績は普通の大学に入れる程度、スポーツでは、全国大会には出れないが予選を数回勝ち進むチームに属し、芸能活動では、テレビには出れないが地域では人目を引く才能がある。つまり各分野の落ちこぼれではないが中央のトップにはなれない層なのだ。

この若者中間層の荒れが目立つ。少年犯罪はその氷山の一角とみることができる。これは中流崩壊と関係があるに違いない。グローバリズム資本の影響で少数の莫大な収入を得る層と多数の庶民層に両極分解し、中間層が没落しはじめた。

企業内の潤滑油の役割をもつ中間管理職はITの導入で仕事なくなる。技能職はME化やIT化により、仕事上の裁量権が少なくなり単純下請け作業が多くなる。増えているのは、パートやフリーターの代替可能な無機質労働である。これは一種の産業革命であって、サラリーマン消滅の方向に進んでいる。

商業分野でも大型店舗が小商店を凌駕し、スポーツや芸能分野で、億の桁の収入があるスポーツ選手や芸能人がいる一方、身近にスポーツをする広場がなく、地域の芸能はすたれている。これは若者中間層の身近

な大人モデルがなくなったことを意味する。

格差の拡大は大衆の反感をかう。だが、同一化と自己責任の原則によって、反感が逸らされる。マスコミ情報により大金持ちやスターに自分を同一化するが、実際に成れないときは「自分の責任だ」といわれる。「成れない者に成ろうとしている自分」と嘆いたアメリカの少年、「俺を必要とする人間はどこにもいない」と叫んだ日本の少年、彼らは両極分解したこの社会では、自分の出番がないことを感知していたのではないか。

高度成長期であれば、若者中間層は各分野で出番があり、具体的な大人モデルも見えたが、1990年以降中流崩壊で先が見えなくなった。60年代なら学生運動や社会運動で不満を爆発させたが今はそれがなく、ただ「自分の責任だ」といわれる。若者中間層は若者貧困層と立場を共有するようになった。元々の貧困層は開き直ってしたたかに生きていくが、若者中間層はプライドが邪魔し、したたかに生きる意志の用意がない。

### 教育の形骸化

つまらぬプライドを植えつけたのは教育である。中流家庭は教育熱心だ。幼い時から教育に期待し「大人になるには教育が必要」と思いこんでいる。近代以前では農民の子は農民に商人の子は商人になったが、近代以降、市民という抽象的な目的が示され、次に学校の成績によって職業と地位が配分された。だが今起こりつつある中流崩壊は教育の人材配分機能を解体する方向に進んでいる。

教育の目的も不明瞭になった。読み・書き・算盤の基礎が必要というが、大人たちは本を読まずにテレビをみ、手紙を書かずに電話をし、暗算しないで電卓を使う。教養が必要というが、週刊誌やコンビニ文化は教養を分散させた。技能が必要というが、大工は電動工具で建材をはめ込み、修理工は部品を取り替えるだけ、セールスマンは電子手帳の指示で動いている。規律が必要というが、職場の共同作業は少なくなっている。

だから数十年前に比べ教育の意味が相対的に低くなった。エリートには基礎も教養も必要にみえるが、

エリートでなければフリーターにしか成れないとしたら、普通の若者は学習意欲は減退する。彼らはエリートの引き立て役に過ぎないと思えてくる。

### フリーターの増加

日本では1980年代末の高卒求人が約150万だったが、1990年代末には30万と8割も減っている(労働省職業安定局雇用政策課2000年発表)。今フリーターは190万人を突破。労働経済学の玄田有史氏は「フリーターは自由な選択の産物かのように見える。しかし一方でやりがいを感じられる仕事に出会える一部の若者と、そうでない大多数の若者への2重構造化が進みつつある。若者の潜在的な不満がそのうち爆発する」と予言した(毎日新聞2000年7月17日)。

この説はノーマ・フィールド(シカゴ大学・比較文化論)が「少年犯罪はサブ・ポリティカル・アクションだ」とのべたのと一致する(週刊読書人2000年8月25日号)。彼女は日米少年事件の共通背景に「敵の所在が分からぬヌエ資本主義(グローバル化した投機的資本)」があるとのべている。

20世紀後半は世界的規模で教育改革が流行した。世界中の大人たちは、社会の構造変化に目をやらず教育を変えればことが済むと思っている。今必要なのは教育改革ではない。専門の教師がいて、カリキュラムを決め、学習させ、結果を評価し、評価に基づいて社会に人材配分する教育システムを見直す必要がある。これはパラダイムの問題だ。近代以降一定の役割を果たした教育システムは、今、鼎の軽重を問われている。

### 少年犯罪と教育心性

大人の考え方に教育がこびりつき、子どもは形骸化された教育システムの中に置かれている。その仕組みを疑わない大人は子どもに教育心性でしか接しなくなる。教育心性とは「出来る・出来ない」という基準で人を見、他者と比較し、相手を自分の理念に従い変えようとし、最後に点数で評価する、こうした営みを当たり前とする考え方である。

中流家庭の多くの親は、子どもを愛している。だが

その愛を「どの子もいい所があるはずで、それを伸ばしてやるのが親の務めだ」と教育心性で示そうとする。親は教育が愛だと錯覚している。

銃乱射事件の少年の親は少年の成績が悪くなると、自身で読書や語学を教えている。それが出来ないとスポーツをやらせている。野原で回転倒立をさせビデオで撮影している。ビデオには姉が見事にやってみせるのに、少年が無様に転がるシーンが映っている。

少年は非行化し始めた。その時父親は「エネルギーを正しい方向に向けなさい」と叫んでいる。エネルギーの発散に「正しい」方向があると思っている。これが教育心性だ。少年は銃と火薬の情報をパソコンで得た。銃は「出来る・出来ない」という基準を簡単にクリアする「能力拡大の道具」だったのだ。

大人の好む教育心性に心の治療がある。カウンセラーや精神科の治療に委ねることだ。「心が治療できる」とする点で教育的だ。教育に囚われた大人に、教育忌避の少年たちはイライラする。それをみて親はオロオロしわが子を強制的に隔離する。その時子どもたちは「捨てられた」と感じる。

こういう大人が世界中に広がっている。千葉で長男を殺害した両親はいつも「いい所を伸ばしてやろう」と語り合い、少年が荒れだすと精神病院に入れた。バスジャック少年の親も入院先の精神科の医師に「うちの子の心の奥にあるものを引き出して下さい」と懇願している。神戸の連続殺害事件の少年の親も「異常に気付くのが遅かった、脳に損傷があるのでは」と語っている。特に90年以降の少年犯罪の影に教育心性ありといえる。

とはいうものの、殺人をゲームのように楽しむ「快楽殺人」は古今東西にある。アメリカの快楽殺人者ジェフリー・ダーマーの父親の手記を翻訳した小林宏明は、この本を読んでも「どうして彼らが育つのか、決定的な答えは得られなかった」といっている(朝日新聞1999年4月24日)。

「快楽殺人」をブラックボックスとみなしたとしても、その要素が外に出るのを防ぐのはコミュニケーションである。犯罪少年に係わった多くの警察官や調査官や鑑別所教官は「少年たちは驚くほど大人と話を

していなかった」と語っている。豊かなコミュニケーションがあれば「快樂殺人」の素質が表に出にくいのではないか。だが、コミュニケーションと一口にいうが、その内容が問題だ。

今必要なのは対等な立場で相互に交わすコミュニケーションだが、それが機能しなくなっている。一方性の強いメディアコミュニケーション(テレビ・マンガ・ゲーム・コンビニ情報等)や教育コミュニケーションが圧倒しているからだ。小沢牧子はコミュニケーションを「地」と「図」の関係でとらえる。相互コミュニケーションを「地」とすれば、教育やメディアコミュニケーションは「図」であり、「図」があまりに肥大化したために人々の目に「地」が見えなくなっている。

今必要なのは教育に囚われない大人の意識だ。日常的に相互に話し合うゆったりとした時があり、無条件に愛する他者がいて「自分を必要とする人がいる」と子どもや若者が感じとれる場を作ることだ。13歳になればもう子どもでなく、体力も知力もあり、恋愛もすれば、犯罪も侵す(村瀬学著『13歳論』洋泉社)。いつまでも子ども扱いして教育の対象としか見ない社会にこそ問題がある。

さらに子どもや若者に出番を用意することが必要だ。サラリーマンの消滅に向かう時、これまで機能してきた教育システムは形骸化しつつある。経済の自由な競争の結果、社会構造ピラミッドの頂点が鋭角化し、若者底辺層と中間層の社会への出口を塞いでいる。だから集権化した社会を変えねばならない。

社会構造を変えるのは至難のワザだが、今の社会でも出番を創ることはできる。イギリスのブレア首相はNPO団体とのコンパクト協定で、若年失業者に自然保護区域の管理を任せると約束をした。アメリカの高校ニューカウントリ・スクールに、州政府が公害の水質汚染調査を依頼した。新潟の黒川村は地ビール工場建設のために、村の若者にヨーロッパに自費で留学してくれと頼んだ。

これらの例は、我々の社会で現実困っていることを、若者に解決してくれと大人が頼んでいるのだ。これが出番を用意するということで、ボランティアでわざわざ「体験させる」ものではない。子どもや若者に

とって体験は必要だが、体験教育は必要ない。

## 討論まとめ

佐々木さんの当日のお話はB4のレジュメ4枚にぎっしり字が埋まっているものをもとになされ、とても予定の時間では入りきらない内容でした。レジュメの中には様々な国の少年犯罪の動向、学校の荒れの状況、それぞれの遠因などが、統計資料、キーワードなどがふんだんに盛り込まれていました。

その資料をもとに話されたのですが、話は尽きない感じで、すると討論に当てられる時間は当然短くなり、今回は論点を出し合ったという程度で終わりました。当日もお話ししましたが、今後も本学会では「少年犯罪」について様々な視点から学習会を行っていきたいと考えておりますので、論文の投稿、学習会へのご意見、ご参加よろしく願います。

当日は佐々木さんは論点を5つにまとめ話されたので、それに対応した形で質疑応答をまとめていきたいと思えます。

その5つとは…

1. 世界的傾向である
  2. 90年以降に起きている
  3. 「中流の」「普通の」少年である
  4. 少年は「教育」そのものを嫌っており、若者の出番を奪っている
  5. コミュニケーションが変容している
- で、上の5つに入りきらないものを「6. その他」としました。(と言っても1と4と6しか便宜上、分類しませんでした)

### 1. 世界的傾向であること

教育的コミュニケーションで子供たちは犯罪に追い込まれているというが、その国の経済的、社会的事情を考えなくてはいけないのではないかと、という、世界的広がりとその個別の文化で解釈しなけれならぬのではという提起がありました。それに対して佐々木さんは、今は各国の特殊事情を考えるよりも、これだけ蔓延しているのだから共通の原因を考えるときでは

ないのか、と答えました。

個々の文化を越えたところで優性思想がつくづく蔓延した、障害者の別口化<sup>べつぐち</sup>が浸透したのではないか、という原因分析もありました。

#### 4. 少年は「教育」そのものを嫌っており、若者の出番を奪っている

昔だったらさほど万引きを問題にしなかったが、今の社会は犯罪を顕在化させるシステムができてきているのではないか。地域社会の人間関係が希薄になり、顔見知りがいなくなっているという意味で、犯罪を抑止する仕組みがなくなっている中で「教育」だけ強調されているのではないか。

「少年犯罪」という言葉に興味をあおっている社会があるのではないか。そこに「教育的関心」を持ってしまおう私たち(マスコミに大きく影響を受けているのだが)もいるという問題も絡んできている。

教育そのものがいきいきとした生き方を阻害するものであるが、そのあとに見返りがあるから我慢しているのが現実。その我慢の代償がなくなっている。

このような分析があったあとに、第3世界では教育を受けられる子供も少なく教育熱が高い、そういう地域でも教育は悪いのだとっていいのだろうか、一括りに教育と言うのではなくもう少し細かく見ていく必要があるのでは、との意見もありました。が、子供たちが求めているのは教育ではなく豊かな生活であるとの反論がありました。

#### 6. その他

犯罪を個々人の自己責任に押しつけるのではなく、その革命性とか階級的意味を考えていきたいという意見と、あまり、革命的、問題提起的であると意味づけない方がいいのではないかという意見や、革命というより自己責任のなれの果てで、自爆しているように見えるという考えが出されました。

マスコミでの犯罪報道のあり方を問う意見では、家族病理、精神病理の中で犯罪を解釈している問題性が指摘され、犯罪は弾みとか偶然という側面もあるので、あまり原因を追及しなくてもと病理学的解釈を忌避する感覚も出されました。

また、マスコミ上に上った滅多に起こらない事件を

取り上げ、それと普段起こる事件とつなげて論じてしまう危険性を指摘する意見が出されましたが、資料を例示しながら、「滅多に起きない」で片付けられないほど一般化している、と佐々木さんは答えました。個別化してこの問題を考えると臨床主義、心理主義になるがちだが、一般化と個別化の間でもう少し考えていきたい、個別状況を肥大化していくとワイドショーになるのではという意見もありました。

また、子供はこういうものだという見方が大人にあり、そこにマスコミがこういうのだと少年犯罪を報道すると大人はおいしく受け取ってしまうという構造があるのでは、それは教育という視点で子供を見ていくのと同じである、と大人が持っている「子供」観の問題性を指摘する意見も出されました。

## 「心の教育」・「心のケア」論考 — 何が問題か —

小沢牧子(和光大学)

### はじめに

「心の教育」と「心のケア」というふたつの言葉が世の中に広がりをはじめ7年ほどが経つ。前者も後者ともに、1995年にマスコミにひろく登場した。ただし直接の契機はそれぞれ別のものである。

前者は同年4月に開始された文部省のスクール・カウンセラー活用調査研究委託事業によって小・中学校にカウンセラーが配置されはじめたことをきっかけとしており、後者はやはり95年1月に起きた阪神淡路大震災をきっかけとしてマスコミを介して世の中に広められるところとなった。したがって、ふたつの言葉・概念の普及は、偶然の一致のように見える。しかしその背後には共通の状況が存在していた。それは「心の時代」と名づけられた時代背景である。本稿はこの背景を視野に入れながら、実体のとらえにくいこれらふたつの言葉・概念を分析し、内包される問題性について論じたい。

### 1. 「心のケア」の一方性

#### (1) 「えひめ丸」の沈没事件報道から

まず「心のケア」の問題から論じはじめたい。今年2001年に入って報道された事件にかかわってこの言葉が登場したのは、2月10日にハワイ沖で、宇和島水産高校の実習船が急浮上したアメリカ海軍の原子力潜水艦に衝突されて沈没し、高校生4人をふくむ9人が行方不明になったときのことであった。2月21日の朝日新聞は『「心の支援」領事館断る——米側のカウンセラー派遣提案——えひめ丸不明者の家族、疲労極限』という見出しで、米国家運輸安全委員会が米国赤十字に要請して8名の日本語の話せるカウンセラーを

派遣しようとしたところ、日本領事館から「必要ない」と断られたことを大きく報道している。日本総領事館は申し出を受け入れない理由として、医務官がいっしょにいること、日本ではこうした場合第三者が支援にかかわる例がほとんどなく判断が難しい、の二点をあげている。

ここに起こっているのは、「心のケア」をめぐる日米の考え方のズレである。カウンセリングへの依存度の高い文化をもつアメリカ側は、おそらくこう考えている。「肉親を失うという悲劇にみまわれた家族の苦しみを和らげ心の傷を癒すために、カウンセラーを派遣することが人道的かつ必要な行為である」。一方、人と人の直接的な関係を自然なものと感じる日本側の被害家族またはその立場に立つ人たちは、こう考えたのではないだろうか。「自分たちが求めるのはまず、この悲劇を起こしたアメリカ側の謝罪の表明をふくめた誠意ある対応である。その肝心の行為を抜きにした『心の支援』など見当違いであり無責任である」。さらに推測すれば「ばかにしないでほしい」という気分すら抱くかもしれない。実際わたしがたまたま目にしたTV画面では、家族のひとりの父親が、この「心の支援」問題に直接かかわってのことではなかったが、つぎのように発言していた。「アメリカがわれわれ家族に対してとっている対応は、まるで泣いている赤子を押入れに隠して泣き止むのを待つようなやりかただ」と。過失からにせよ、帰らないひとたちを出してしまったことが明らかである以上、親や配偶者に対してまず詫びかつ誠実に対応する考えを表明することが、同じ人間として当たり前の行為のはずであるという思いがそこに表れていたし、それはもっともな心情であろう。事実、のちに別の父親は、ある場面で「憎しみの厚い壁のなかにポコンッと穴があいたんです」と

語ったと報道されているが、その場面とは、潜水艦艦長が家族にむかって最敬礼で謝罪した折り、父親が「あなたにもすばらしい家族がいる。どうか家族を大切にしてください」と語りかけると、艦長の目から大粒の涙がポタポタと床にこぼれたのを目にしたときだという(1)。人と人の直接の関係が持つ力である。憎しみや悲しみの強い感情が宥められ変化するのは、このような直接の関係のなかにおいてであるという事実を伝える場面である。

専門家が「心の支援」をするという。しかし謝罪がないことに憤る家族の側にたつて、その思いをアメリカ側の関係者に伝えるという「支援」をするために、カウンセラーが派遣されるはずもない。家族の思いを知りたいのであれば、関係者と直接の話し合いをする場を設ければすむことだからである。カウンセラーの役割は、別のところにある。「悲しみ、怒りを和らげ、ダメージをあとに残さない」というような。この対応は、家族に対してなすべきことの的をはずしている。「あなたのために」というおこがましさがある。

さきの新聞報道にもどろう。報道の姿勢はどちらかといえば「心の支援」の必要性を理解しない日本側(おそらく家族もふくめて)の「意識の遅れ」を指摘するトーンを持っていた。紙面にはアメリカ側のカウンセラーを含む関係者の談話と、日本の「被害者支援都民センター」の相談担当者の談話が掲載され、いずれの談話も「心の支援」の必要性を強調している。「深刻な事故に際しては専門家がきちんとかわり、家族が感情を面に出せる場が必要。第三者を通して悲しみと向き合うという感覚は、日本人にはなじみがないのだろうか」、「日本総領事館は、被害者への支援の必要性を理解していないのではないか。こうした事故では、発生直後からどれだけよいサポートが受けられるかが重要。精神科医、カウンセラーなどの支援を受けながら、被害者同士が怒り、悲しみといった感情を語り合うことも必要」などである。

しかし被害者のひとびとがおたがいの気持ちを語り合えていないとは限らない。そして専門家が適切と考えることが、当事者のひとびとにとって適切であるかどうかも分からない。報道の姿勢には、家族のひとび

とがほんとうは何を望んでいるのかを問いなおしてみよう。謙虚な視点がない。マスコミはいま、「心の時代」という流行にとりこまれて、「心の専門家」の宣伝機関となっている。

さらに、ここに見られるのは、怒り悲しむ当事者を無能視する態度である。怒りや悲しみ、それも明確な原因のもとに生じた感情が、本人たちの手には負えないものとみなされ、「心の専門家」によって「適切に」取り扱われるべきものとして切り取られている。専門家のよいサポートがなければ本人たちは救われないかのように。そこに、被害をこうむった人を上から救済するという思い上がりを見ないわけにはいかない。家族たちはおそらく、悲しみや衝撃に耐えながら、おたがいに支え合っているのだろう。もし本人たちが、被害を引き起こした相手にたいして闘おうとした場合、そのことを「支援」する視点は「心の専門家」からはおそらく出てこない。その怒りを鎮めようとすることはあっても。

「心の専門家」の関心は、そこに起こっている事態ではなく、生じている感情のありように向けられているからである。感情を手なづけ、怒りや悲しみを無難に収める役割を期待され、それを仕事としているからである。家族たちは、自分たちの感情を切り出し取り扱おうとする専門家を、自分たちの味方として信頼することができるのだろうか。構図の不自然な傲慢さを被害当事者・関係者たちが直観し、「心の専門家」の派遣を断ったとすれば、それはむしろ自然なことである。「意識が遅れている」というとらえかたは見当違いなきめつけであると言わざるを得ない。

カウンセリングは慰めな技法だが、本人のものである感情を専門家が本人から取りだし怒りの原因となる状況を切り離して「辛い感情を適切に処理してあげよう」とする発想は、僭越なものである。さらにそこには、専門家と専門家を擁する体制の側の都合が含まれている。それは怒りの感情は危険なので、その感情を鎮めることが体制にとって安全であるという都合である。この背景を専門家は意識しない一面的な構造があるのだが。

一方、本人・当事者の側からは、不当な事態にたい

して聞える当面の手段は、じつは怒りだけである。怒りは状況を変えるための、もっとも大きな力を持つ。相手に思いをどうしても伝えようとするからこそ、怒るのだ。関係や状況を変えようとして、ところが「心の専門家」は、怒りを収める巧妙な技法を持っている。「本人のため」と信じて、その技法を使う。鎮静剤注射とあまり変わらない。そして怒りが収められた先には、諦めがもたらす平穏が待っている。もっとも人と人との生きた関係であるから、すべての場面を一概に語ることはできない。ここでは構図を明らかにしようとしているのである。

「いろいろな感情がわき起こる場面だから、家族へのサポートが必要」(上記新聞記事)という。専門家による感情管理である。「被害者のために」というが、ほんとうにそれだけか、誰のための感情管理なのかを見極めなくてはならない。「心のケア」概念は当事者不在で美化されたまま、それが何のことかほとんど誰も問おうとしないままに、世の中に広がっていく。当事者は考えるゆとりのないまま、また当事者以外のひとびとは、マスコミをふくめて、人ごととして無責任なままに。

## (2)阪神淡路大震災と「心のケア」

1995年1月の大災害の場合には、どうだったであろうか。

あれから6年余が過ぎた。移り気で上滑りな報道しにくいマスコミは、被災地のその後には無関心であるように見える。しかし被災地には、依然として苦闘が続いていることを、神戸の被災者からの報告によって知ることができる。兵庫県被災者連絡会会長の河村宗次郎は、震災直後と現在の被災者救済・救援、生活再建支援の問題性を、次のように記している<sup>(2)</sup>。

まず、震災直後からの問題をめぐっての記述を見よう。

「・・・避難所についてであるが、行政に『避難生活を多少とも安全に落ちついて』という構えは、まったくといっていいほどなかった。(略)とりわけ最後まで『雑魚寝』を知らぬ顔で放置したことは許せることではない」。「加えて、神戸市の8月20日の『災

害援助法適用打ち切り』による『避難所閉鎖』であり『救援物資提供打ち切り』である。200余力所の避難所に1万人を越える避難者がいるなかでの強行であった。『早く避難所を出ないと仮設住宅が当たらない』と避難者に急ぎたて慌てさせる。避難所の役割・有り様など、考えようとしなかったと断ぜざるを得ない。「仮設住宅についても同様である。(被災者連絡会は住宅を)元の生活圏か、限りなく近いところに建設するよう要求した。しかし行政は一顧だにせず、その大半を遠隔地や不便なところに建設した。しかも必要数以下の個数を。(略)避難所の維持運営と同じく仮設住宅も、生活再建を図るための、安心して次に向かうためのものではなかったのである。四畳半と六畳と台所に風呂、便所、この2Kの仮設住宅に6~7人の家族が、1Kの仮設に大人3人世帯が暮らす。その状況を想像してみたい。身体と心を休め、再起に向かう時を過ごすのに適するものかどうかを」。

河村の上の文は、震災後の混乱のなか、被災したひとびとが行政の対応にいかにかにいらだちを強めていたかを伝えている。このとき被災者たちが切実に必要としたのは、河村の言葉を今一度引くなら、まず「身体と心を休め、再起に向かう時を過ごす」ことのできる住まいの条件だったのである。それはあまりにも当然のことである。ところがこの時期に新聞をはじめマスコミを賑わせていたものに、「被災者の心の支援、心のケア」というテーマがあったことは、見過ごせない。精神科医や臨床心理士の巡回活動、大野光彦のいうカウンセリングの「訪問販売」<sup>(3)</sup>活動が、しきりに取り上げられた。この「心のケア」活動なるものが、当の被災者の求める「ケア」といかにズレていたかは、河村の文によるまでもなく自明である。これは前項で述べた「えひめ丸」が沈没させられた事件への対応と共通する問題である。

当時、精神科医の野田正彰も震災半年後の被災地を視察して、「心のケア」の宣伝がいかにかに被災者の状況とズレていたかを指摘している。「・・・『心のケア』の掛け声は、行政や一般社会が作りだす負荷を黙認し、すべてのストレスを震災に起因するものにぼかしてし

まった。その時点で何が起きているのか、実証的に被災社会を見ようとはしてこなかった<sup>(4)</sup>。野田の指摘する通り、「心のケア」概念は事実・実態をぼかしてしまう作用をもっている。それはつまり、責任をぼかしてしまうということだ<sup>(5)</sup>。

しかし阪神淡路大震災の折りの「心のケア」キャンペーンが社会にもたらした影響は、実に大きかったと私は感じている。なぜ影響が大きかったと考えるかといえば、あれ以来、「ふだんの生活ではカウンセリングはそれほど必要がないかもしれないが、大きな災害に会ったりしたときには、カウンセラーが必要なものなのだ」と、災害に出会ったことのない人々が信じ、そう言うのを聞くようになったからである。まさに、マスコミによって作られた意識ということができよう。「心の専門家」キャンペーンは、マスコミ加担のもとに成功している。

「心のケア」を一方向的に押しつける前に、生活のきちんとした支援と将来への展望がいくらかでも持てるための実際的施策こそが必須であることは明らかだ。生活が不安であるのにカウンセリングで安定感が得られるわけはなく、もし得られたとしたら「不満の口封じ」に「心のケア」が結果として用いられたのではないかと感じざるを得ない。

大震災以来6年余の現在はどうであろうか。今も被災者たちの苦闘は続いているのを知ることができる。河村は次のように述べる。

「大震災後一月半たったところから、『自立』という言葉が被災地を駆けめぐった。この言葉が被災者をいかほど焦らすかを知らぬ気に。昨年(筆者注2000年)初めごろから『自律』と言葉が替わっているが、している作業は同じことである。弱いものいじめ、被災者いじめが続いている。『住まい、仕事、お金』の三大案件は依然として続いているどころか、その厳しさを一段と増してきている。6年2カ月の歳月が、被災者の身体を弱らせ気力を萎えさせたからにはほかならない。

復興住宅の家賃軽減および民間住宅の家賃補助の打ち切り期限や、貸付金の返済問題が迫るなか、被災者連絡会は行政への申し入れを続け、「被災地しごと開

発事業」での就労者組合の立ち上げに向けてとりくんでいる。「心のケア」という虚構とは無縁の地点で。被災地の現実をリアルに知ることから、必要な「援助」とは何かをあらためて認識したい。そのとき、「心のケア」概念がいかに事実を曇らせるかが見えてくる。それはこと災害に限らず、高齢者や子どもの問題などに対する「心のケア」にも共通する事態であろう。

## 2. 「心の教育」をどうとらえるか

### (1) スクールカウンセラー導入の経緯

「心」という言葉が昨今氾濫している場のひとつに、学校がある。ここではどのような事態が起きているかを、経緯をふくめて次に見てゆきたい。

本論の冒頭に述べたように、「心の教育」的な視点が学校に広がりはじめたのは、1995年にスクールカウンセラーが学校に導入されはじめたことをきっかけとしている。さらにきっかけが生ずる以前に、カウンセラーに関して「心の専門家」を名乗る臨床心理士団体・学会からの働きかけという形での準備期間があった。この準備期間をさかのぼると、中曽根首相の意向のもとに臨時教育審議会(以下臨教審)が発足した1984年の翌1985年あたりになる。「心の専門家」集団の牽引役である河合単雄が、新聞紙上に『心の専門家』の必要性』という長文を二日にわたって執筆しているのがこの年であり、おそらくこれが「心」ブームの始まりに位置している<sup>(6)</sup>。ちなみにこの記事のサブタイトルは「いじめ、登校拒否は薬では治らぬ」、「国家が資格認定し、規準の確立が必要」であり、内容は、学校をめぐる子どもたちの「問題」は医療でも学校教育でも解決できない、いま「心の専門家」の出番であるとのアピールとなっている。

河合のマスコミ上の動きと臨教審の活動は、おそらく関連している。河合は1985年に臨教審のヒアリングにおいて、今後は家庭を対象としても専門家・カウンセラーの制度的検討が必要であると述べ、この内容は臨教審第二次答申(1986年)に盛り込まれており、この提言はその後かなり経ってから「家庭教育カウンセラー活用調査研究委託事業」として予算化も見えてい

る。(1998年度)。

また下村哲夫は、臨教審が初等中等教育を審議した際に、手垢のついた「道徳」に替えて「心の教育」が一時候補に上がったという、と述べ、答申では従来の「知・徳・体」の順序を替え「徳・知・体」を提唱して、徳育重視を打ち出したと指摘している(7)。このように「心の教育」は85年ごろに、臨床心理学専門家グループの影響も含みながら、教育政策に登場したと考えられる。

1988年に河合を会長とする日本臨床心理士資格認定協会が設立され、資格の発行を開始して、学校へのカウンセラー派遣の準備が専門家側から整っていた。これが「心の専門家」学校導入の準備状態であったといえる。直接のきっかけは1994年1月に起こった。愛知県で男子中学生の「いじめ自死」事件が発生し、当時の文部省は「いじめ問題」に対応するとして、翌95年度からスクールカウンセラーの派遣を予算化した。初年度の予算は3億6千万円(154校)であったが、96年度11億円、97年度21億7千万円という具合に急速に増え、今年2001年度は40億円を計上して、以降5年間で全公立中学校(3学級以上の約1万校)に非常勤で配置したいとしている。その理由として、子どもたちが内面にストレスや不満をかかえこみ、抑制ができずに衝動的に問題行動を起こすため、その未然防止や早期発見・早期解決をめざして心の相談に当たるという。ここでひとこと異議を述べておこなら、子どもたちのストレスや不満がなぜ増していくのかを率直にとらえようとするところこそが重要なのではないか。ところが政策は「心の教育」という名の、カウンセリングによるガス抜き装置の「充実」になっているのではないか。「心の専門家」の大量投入にもかかわらず、いじめ、登校拒否、校内暴力などの「問題」が減少せず子どもたちの「荒れ」が鎮まらないのは、肝心の課題を避けているからではないか、と指摘しておきたい。ここで起きている問題は、さきに述べた「えひめ丸」沈没の事件や、震災被災者への対応にかかわる問題と共通している。

## (2)「心の教育」と家庭への介入

新しい教育政策は、つねにあらかじめ用意され出番を待機し、きっかけを待って登場する。その例をすでに、上記のスクールカウンセラー学校配置に見た。その2年後の1997年7月に「心の教育」ということばが浮上する。臨教審ですでにこのことばが出ていたとするなら、再浮上ということになる。

今回のきっかけは神戸市須磨区で起こった小学生連続殺傷事件で、14歳の少年が逮捕されたことであった。当時の橋本首相および小杉文相は、少年逮捕後ただちに「心の教育」の重要性に言及して、第16期中教審に「幼児期からの心の教育の在り方」を諮問した(97年8月4日)。諮問内容は、①子どもの心の成長をめぐる状況と今後重視すべき心の教育の視点、②幼児期からの発達段階を踏まえた心の教育の在り方、③家庭、地域社会、学校、関係機関が連携・協力して取り組む心の教育の在り方、の3点であった。この緊急諮問への答申は、一年後の98年6月に出された。答申には『新しい時代を拓く心を育てるために——次世代を育てる心を失う危機——』とのタイトルが付されている。サブタイトルの意味が分かりにくい、内容を見ると「親たちの心の危機」という意味であるらしいことが分かる。家庭のなかに、国の「心の教育」が入りはじめたのである。

上の中教審答申の内容について、紙数の関係で家庭教育にかかわるおもなキーワードを並べてみる。およその中身が伝わるであろう。

「生きる力、正義感、倫理観、思いやりの心、家庭の見直し、円満な家庭、夫婦協力、家族の絆、一緒に食事、父親の影響、悪いことを正す、自分の行いに責任、非行サインを見逃すな、祖父母を大切に、個性を大切に、順位にとらわれるな、未来への夢、家庭のルールを、家事の分担、あいさつと礼儀、我慢を教える、家庭内の行事を、子ども部屋を閉ざすな、テレビ、ゲームの制限、地域に力を、親の相談体制づくり、家庭教育カウンセラーの配置、子育て支援、家庭教育の学習機会を、家族に優しい社会へ」など。

これらの内容から伝わるように、「心の教育」とはここではほとんど「道徳教育」と同義であって、この中教

審答申は、家庭に向けて子どもの生活にかかわる注文を特集したものであることが見えてくる。もちろん学校教育について述べていないわけではなく最終章の第4章がそれに当てられているが、分量は家庭編に比して少なく、構成順序も家庭、地域、学校となっており、家庭に焦点が置かれていることが分かる。しかも学校が生み出している問題の責任を家庭に転嫁している箇所がある。たとえば「幼児期から子どもの平均値や相対的な順位にとらわれることをやめよう」とあるが、「子どもを比べ並べたことをやめよう」というこの課題こそ、学校が緊急に取り組むべきものなのである。しかしこの内容は学校編には見当たらない。成績順位へのとらわれを家庭の問題とするこの姿勢には、本末転倒ということばこそがふさわしい。

そもそも国が、家庭や地域の教育に介入すること自体に問題がある。それは「父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し」という教育勅語の世界になっていく。家庭への指導に走る前に、学校のありかたの転換能力こそが問われているのである。しかし上記の中教審答申以後も、家庭への言及傾向は強まっている。2000年森内閣のもとでの「教育改革国民会議」答申を経て今年2001年1月に出された「21世紀教育新生プラン」(文部科学省)は、上の姿勢の具現化をめざしている。冒頭の項目は「人間性豊かな日本人を育成する」であり、その項は「教育の原点は家庭であることを自覚する」という政策課題で始まる。具体的には、家庭教育力の充実の為の「社会教育法」改正が日程にのぼり、家庭における「しつけ3原則」の普及をめざす家庭教育手帳・ノートの配布などが主要施策として並ぶ。「心の教育」というつかみどころのない表現は、ここでは問題解決の自己責任と家庭の責任を強調するという中身に行きついているのである。

### (3)「心の教室」の開設

98年夏に神戸市須磨区でおきた「小学生殺傷事件」をきっかけとして設置された中教審の小委員会について前項に述べたが、これと同時に開始されたもうひとつの事業についても触れておく必要がある。それは同年9月に、補正予算対応で338億円をかけ急ぎ開設

された「心の教室」(カウンセリングルーム)である。この予算には教室改造などの設備費が大きくふくまれる。開設趣旨は、「生徒が悩みなどを気軽に話すことができ、ストレスを和らげることのできる第三者を配置し、生徒が心のゆとりを持てるような場を整備する」とある。

初年度は2000中学校、3年間で全公立中学校の半分に設置するプランで始まった。「冷房の利いた部屋で心の悩みを伺います、お茶も飲めます、気軽にどうぞ。中学生の不安やストレスを減らすためこんな空間が登場する」と毎日新聞は報道している(98年7月24日)。先に述べたスクールカウンセラーと「心の教室相談員」は、制度的予算的に別立てである。両者の違いは、前者が臨床心理士を中心とする「専門家集団」であるのに対して、後者は地域の教育経験者や青少年団体指導者などから募集すると定めていて、退職校長、主婦、大学院生などが選ばれ、専門家より気軽な話し相手として位置づけられていることが分かる。待遇(時給)にも数倍の差があり、おそらく「困難な問題」はカウンセラーへ、という仕分けや、両者の指導する一されるなどの上下関係構造がふまえられているのであろう。もちろん予算の軽減や親しみやすさを作るなど、その意図は多様であるだろうが。

ところで前掲の新聞報道には、臨床心理学者国分康孝の談話が掲載されている。「・・・教育の担い手の中心は教員なのだから、教員に集団対象のカウンセリングを身につけてもらうほうがいい。ふれあいは確実に深まる。教員の出番をもっとつくるのが大切だ」。生徒とふれあうのにカウンセリング技術など使うのは気持ちのわるいことだと筆者は考えるが、ここでその議論はさておいて、「心の専門家」のなかにもさまざまな考え方や立場があるようだということが分かる。

ともあれ、スクールカウンセラー、心の教室相談員、そして心を育てる家庭教育と、学校という場にはいま、「心」というつかみどころのない言葉や概念が氾濫しているのが現状である。最後に「心の教育」の実体を、筆者の視点で整理しておきたい。

### (4)「心の教育」は治療から道徳まで

「心の教育」が登場した経緯を上に見てきたが、この言葉はつまるところ、国が子どもを望む姿に作ろうとするための大きな枠組みを指しているに過ぎないことが分かる。国・大人の意向に従順に、登校拒否をせず学校に通い、しかも事を起こさず、望まれる徳目を身につけさせる。そのためのあらゆる手段を包括できる新しい入れ物が「心の教育」という新語であろう。いわば何でも包める大きな風呂敷のことである。大きな風呂敷ほど便利なものはない。

従来この入れ物は「道徳」や「生活指導」という名で呼ばれてきた。しかしすでに述べたように、臨床心理学者が学校という大きなマーケットに参入したとき、新しい装いの入れ物が必要となった。登校拒否やいじめとよばれる現象が広がるにつれて、これまでの「道徳」では中身がはみだしてしまう上に、古臭いイメージも取り払おうとした。そこで「治療」や「適応」という心理学概念も納まるように入れ物を拡大し、何でも入る「心の教育」が登場したと考えると分かりやすい。筆者が「心の教育」を他稿で「ニューモデルの道徳教育」と名づけた由縁である(8)。別例をあげれば『心の教育』というタイトルをもつ教師向けの単行本にも、その内容は、道徳、カウンセリング、家庭、地域、環境、国際交流、福祉、ボランティア、人権、伝統文化、学校行事・・・とあらゆるものが雑多に収められている(9)。

このように「心の教育」とは、治療から道徳教育までを入れる茫漠とした概念なのだから、分かりにくいのは当然のことで、中教審の集中審議の開始に際して、新聞記事が『「心の教育」って何?』との大見出しを掲げたというのは無理もない。さらにまた「心の教育」は、90年代以降の教育政策「生きる力」とセットになっている。「我々が取り組まなければならない最も重要な課題の一つは、『生きる力』の礎ともいえるべき、生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、美しいものや自然に感動する心などの、豊かな人間性の育成を目指し、『心の教育』の充実を図っていくことであります」(97年8月4日、中教審に「幼児期からの心の教育の在り方」を緊急諮問した際の小杉文相の説明、下線筆者)。

「生きる力」もまた、「心の教育」に劣らず分かりにく

い茫漠たる概念である。これらの漠然とした美しい言葉が氾濫するときにはとりわけ、それらに足をとられることなく、自分たちの生活現実のほうに確信をもち、そこに悠々と足を据えていくことが肝心である。そして一方、「日の丸・君が代」や愛国心教育、皇国史観教育などの動きもまた「心の教育」という大きな風呂敷のなかに包まれているであろうことを、きちんと認識しておくことである。

## おわりに

80年代半ば、臨教審は「個性化」「自由化」「国際化」の新局面を学校に向けて打ち出した。15年を経て現在を見ると、この方向が社会と子どもの階層化の問題と大きく結びついていることが見える。「個性化」は能力主義の強化を、「自由化」は競争の激化を、「国際化」はグローバル化のなかの選別を意味していた。社会の不平等や階層化、ひとびとの不公平感を指摘しこれを論ずる出版物も増えている昨今である。学校における子どもたちの「問題」が、この事態と関わっていないはずはない。

「心」の強調が、臨教審の新局面と時を同じくして起こっていることは、注目すべきである。社会の階層化の進行は、下層に置かれた人びとの怨念(ルサンチマン)を蓄積する。そして心理療法・カウンセリングは、井上芳保の表現を借りれば、「ルサンチマン処理」の装置なのである(10)。「心のケア」が、震災被害への対応責任をあいまいにぼかしたように、「心の教育」の導入と展開は、学校に進行する選別激化の構図にペールをかけようとする意図と関連するものではないだろうか。カウンセリング技法も道徳教育もともに、問題状況を捨象した「心がけ」のテーマと深く関わっているからである。

今年度からあらたに、全中学生に向けて「心のノート」(仮称)の配布が国家予算に組みこまれた。東京都は「心の東京革命」なる道徳教育プランを進めている。「心」の強調が続いていく。いま、「心」ではなく日常の確かな現実立ち、人と人の直接の関係に依拠して暮らす力量が、ますます問われている。

〈引用文献〉

- (1)「謝罪の研究」『AERA』 2001年4月16日号
- (2)河村宗次郎「一方通行の行政が被害を大きくした」  
『まなぶ』No515 2001年4月号
- (3)大野光彦「阪神淡路大震災／PTSD／心のケア」  
日本社会臨床学会編『カウンセリング・幻想と現実』  
下巻 現代書館 2000年
- (4)野田正彰「『心のケア』論が見落とす震災後の社会  
が生む負荷」『毎日新聞』夕刊 1995年7月14日
- (5)清水誠一(神戸市職労長田支部長)は、長田区役所  
職員の立場から、次のように語っている。「神戸新  
聞で連載されている震災5年の特集の見出しを見ると、  
『きずな』とか『心の問題』『人の和』というような  
抽象的なものが多い。これは人々の暮らしの内実が  
復旧に到っていないということの裏返しではないか  
なと思いますね」『震災から5年。再び神戸で』  
全日本自治団体労働組合 2000年6月
- (6)河合隼雄「『心の専門家』の必要性」『毎日新聞』夕  
刊 1985年12月9日・10日
- (7)下村哲夫「『心の教育』の条件整備」『悠』 1997年  
12月号
- (8)小沢牧子「ニューモデルの“道徳教育”」『ひとり』  
ニューアル第3号 2000年1月
- (9)押谷由夫・七条正典編『“実践に学ぶ”特色ある学  
校づくり「心の教育」編』教育開発研究所 1999年
- (10)井上芳保「ルサンチマン処理装置としての心理療  
法」『臨床心理学研究』27巻1号 1989年

## 「心の教育」「生きる力」に惑わされずに — 北海道の小学校の現場から —

原内理恵(札幌市立小学校教員)

### はじめに

最近、地下鉄通勤を始めた。自宅から30分ほど歩いて、やっとの思いで電車に駆け込むと、そこには、吊り革や椅子にぐったりともたれかかった人、人、人……。清々しい北海道の初春の朝だというのに、電車の中は、どんよりと重たい空気が漂っている。昨日、深夜まで働いたのか。それとも、遊び疲れなのか。寝るためだけに家に帰り、眠い目をこすりながら電車に飛び乗ったのではないかと思われる精気のない顔、顔、顔……。人は、いつからこんな顔で朝を迎えるようになったのだろう。

そういえば、学校で暮らす大人も子どもも、この頃どうも元気がない。子どもについて言えば、不登校、引きこもり、高校中退、校内暴力、非行、「学級崩壊」、いじめ、児童虐待、子どもの自殺、凶悪という言葉でひとくくりにはできない心が引き裂かれるような少年犯罪……。子どもを取り巻く悲しい話題は枚挙にいとまがないが、そういう象徴的な事象を抜きに考えても、子どもが集う場に必ずあるはずの生命力のオーラが、学校から消えてきているように感じる。なぜなのだろう。私の教職員仲間の間では、最近特にそんなことがささやかれるようになった。

政府・文部科学省は、この学校の現状を「教育の危機」ととらえ、「『個人の尊重』を強調する余り『公』を軽視する傾向」や「行き過ぎた平等主義による教育の画一化や過度の知識の詰め込み」があるとして、その原因と責任を教職員や子ども・保護者に押しつけている。そして、「教育改革国民会議」の提言を受け、今年1月、「学校が良くなる、教育が変わる」ための具体的な施策やタイムスケジュールを明らかにした「21世紀教育新生プラン」を掲げて、学校・家庭・地域の新生をはかろうと国家あげての「大改革」にとりかかった。

これは、従来から提案していた教育制度や教育内容の改革をタイムスケジュールにのせたという点と、子ども・教職員・保護者を含めた日本人全体の「心を育てる教育」を提唱し、「個」より「公」を重視する中で、教育基本法の見直しまで視野に入れた実際のプランをつくったという点で、非常に重大な意味を持つ。「心の教育」が、「奉仕活動」「勤労体験学習」「家庭教育ノート」の配付」「スクールカウンセラーの導入」「『日の丸・君が代』の強制」等々で行われつつも、まだまだ徹底されていない状況の中で、厳罰化した少年法を楯にして、いよいよ国民全体に本格的に行われることになったということだ。

一方、「下」からの教育改革を唱える教職員や学者たちは、教職員が自ら地域のコミュニティづくりの先頭に立ち、地域の人々とつながって教育力を回復させようという試みを始めた。研究校では、地域の人たちとのカリキュラムづくりの打ち合わせ、地域行事への参加、「総合的な学習の時間」の「体験学習」などの授業準備に追われ、超多忙な毎日だという。

私は、「上」からの国家主義的な「心の教育」の動きに対してはもちろんだが、「下」からのこうした教育改革の動きについても、どうも腑に落ちない。「教職員がそこまでしなければ、学校は立ち行かないの?」「矛盾を生み出すシステムをつくったのはお偉いさん方なのになんで教職員や子ども、保護者にばかり改善を求めるの?」「私たちは、決していいかげんだったわけではないのに……」と思ってしまう。

「モノとカネ」が支配し、ますます弱肉強食が強まる経済や社会の変化や、経済効率優先の教育政策の中で、学校は、次々に現れてくる子どもをめぐる「問題」に喘いできた。でも、そんな中であつても学校は、子どもの集まる場所として、放っておくと確実にバラバ

ラになっていく地域の子どもや保護者の関係を必死に紡いできたのではなかったかと。私は、現場で苦しむ子どもたちや教職員・保護者の切なる叫びを代弁したい。そして、大人も子どももあたりまえのことをあたりまえに感じ、互いに本音を言い合える学校づくりにとりくみ、なんとしても学校に生命力のオーラを取り戻したいと思う。

小学校の現場から見た私なりの精一杯の現状分析と、その解決策を考えてみたい。現場の直観は、案外、的を得ていることが多いものだと自分に言い聞かせながら・・・。

## 1. 政府・文部省の「毒入りの処方箋」

政府・文部省は、社会の変化によって顕在化してきた学校におけるさまざまな「問題」を解決しようと臨教審や中教審を設置し、次々と「教育改革」を実行してきた。しかし、学校をめぐる子どもの現状は良くなるどころか悪化の一途を辿ってきた。それは、その処方箋がまったく意味をなさず、逆に、学校現場をじわりじわりと弱らせる「毒入りの処方箋」であったことを意味している。

この「毒入りの処方箋」は、子どもたちの苦しみを緩和し改善する処方箋ではなく、社会や経済の変化に対応しながら、企業がさらに多くの利潤を得るための処方箋だった。なりふりかまわない金儲けの世の中であって、子どもを国家や企業にとって都合のよい人間に育てようとする動きの中で、この「毒入りの薬」は、教職員組合や保護者・市民の出方を見ながら、しかし着実に処方されてきた。

## 2. 孤立していく子どもたち

そうした政府・文部省の「毒の処方箋」に対して、子どもたちは反逆を試みる。70年代から80年代にかけての「校内暴力」は、偏差値による子どもの序列化によって人間の尊厳を傷つけられた子どもたちによる反乱だった。しかし、それは、徹底した管理と脅しによって鎮圧された。力で押さえつけられている子どもたちの鬱屈した思いは、次に自分自身や弱いものに対する攻撃へと向かっていった。不登校、自殺、いじ

め、薬物の乱用などである。

こうした子どもたちの内向きの反乱は、この10年で、ますます深刻なものになってきた。その一方で、子どもたちの鬱屈した思いは、逃避的・自虐的な行動から、「ムカツキ」や「苛立ち」を抑えられず、時に直接的な行動として現れるようになってきた。

この数年で「学級崩壊」状態になっているクラスが急速に増加した。「授業中、立ち歩く」「担任の話をまるで聞かない」等はまだかわいいもので、私の友人のAさんは、5年生を担任していた時、子どもが彼女の目の前で自殺をほめかして、4階から飛び下りようとしていたり、理科の実験道具を壊したり、彫刻刀を振り回したりすることにも悩まされた。1度など、彼女の引出しの中に水を入れたり、教科書が水浸しになったこともあった。そんな経験は、彼女の20年ほどの教員生活の中で初めてだという。

もはや子どもたちの反乱は、「校内暴力」の時代とは違って、非行傾向のある一部の子によるものではなく、「フツーの子」の突発的な行動として現れる。そして、その行動の根底にあるのは、強い人間不信だ。

「学級崩壊」というわけではないが、私も、一昨年6年生を受け持って、思春期の入口にいる子どもたちの気持ちをつかめず大変苦労した。子どもたちは他人がどう思うかばかり気にして、自分の思いをみんなに語ろうとしない。友だちとの優しいつながりを信じることができず、教室では陰口が横行していた。私は、昔受け持った6年生に比べて、子どもたちがあまりに虚無的で、一人ひとりの心が孤独なことに驚き苦しんだ。

6年生を持つ友人Bさんは、「うちのクラスに『障害』をもつ子がいるんだけど、修学旅行のグループ決めの時、誰もその子を自分のグループに入れようとしなかったんだよ。こんなの初めてだ。5年生の時から、一生懸命育ててきたのに」と肩を落とした。共生・共学が叫ばれている中で、当の子どもたち自身は自分のことに精一杯で、友だちのことを考える余裕をなくしている。

### 3. 子どもたちの余裕のなさの原因

#### 1) 90年代に入ってからの先の見えない時代に育った子どもたち

今、教員たちは、「今まで出会ったことのない子」「自分の心の内を見せない子」「自分も人も好きになれない子」に苦しんでいる。

核家族化・少子化の進行、低年齢化する受験競争、テレビゲーム、ビデオ、コンピューターによるバーチャルな暮らしによって、子どもたちに人間同士の生身の関係づくりに自信がもてなくなっているせいだ。開発によって彼らのお気に入りの遊び場とそこに住む人々の豊かな関係が消えてゆき、子どもたちがむれをなして遊ぶ姿が見られなくなったからか……。人のつながりが切れてしまった地域の中で、親たちは孤立し子育てに自信を失い、時に児童虐待に陥ってしまうことさえある。

子どもの余裕のなさは、大人の余裕のなさの現れでもある。バブルが崩壊し、厳しい経済情勢の中で、企業はなりふりかまわない生き残り策に出た。この10年、労働者は高度経済成長の中で得た既得権を次々に失っていった。今の小学生たちは、90年代に入ってからの先の見えない社会の中で生まれている。私は、彼らの重たい気分の原因は、生まれた時から、大人の不安感やあきらめのムードの中で育てられてきたせいではないかと思うことがある。

しかし、こうした社会の世相に原因があるだけではない。これは明らかに、この10年間の政府・文部省の経済効率優先・日本経済を救うフロンティア養成の「毒の処方箋」による副作用である。「学級崩壊」をはじめとする子どもたちの「問題」は、もしかしたら、「毒」を処方しつづけるシステムの中であって、それを支える自分たちの役割に気づかず、子どもたちの思いをわかろうとしない教員たちに対する本能的な嫌悪・憎悪かもしれない。

#### 2) 学校隔週5日制の中で、さらに忙しくなっている学校現場

この10年で、学校現場は非常に忙しくなると、教職員たちは言う。それは、子どもにゆとりを取り戻すために待望されていた完全学校5日制が、実は「時

間短縮合理化」になってしまっているからだ。教育内容や仕事量が変わらずに休みが増えたため、教職員の労働密度が異常に高められている。走り回って仕事をしても、持ちかえりの仕事は以前よりずっと増えた。毎日120%限界まで働き、休みの日は死んだように寝ている。

しかし、体はくたくただが、隔週休みになる前に比べるとずっと効率良くたくさん仕事をこなせるようになり、今まで5人で行っていた仕事が4人で済むようになってきた。日本中、休みが増えたのに「過労死」は減らず、失業が増大しているのは、この「時間短縮」という名を借りた合理化のせいだ。学校に民間経営のノウハウが取り入れられ、効率の悪い部分がどんどん切り落とされていっている。今、教職員も子どもたちも課業日の過密なスケジュールに必死に耐えている。しかし、そのスピードについていけなくなった者は、次々と学校からはじきだされてきた。

2002年度からの完全学校5日制は、学習内容を3割削減する上での実施だが、小学校では6時間目の授業が増えるなど課業日のスケジュールはびっしりだ。人の体は、週単位でも月単位でもなく、1日単位でできている。まして子どもはなおさらだ。私は、90年代に入って、増加の一途を辿っている子どもの「心の荒れ」にかかわる問題は、学校現場の多忙化にも大きな誘因があると思っている。経済効率が優先された週休2日制は、大人にとっても子どもにとっても、何らゆとりにはつながらない。

#### 3) 「学習指導要領」で追い詰められる子どもたち

わたしたち教員は、大量生産と欧米模倣のための詰め込み教育の「学習指導要領」に縛られながらも、その弊害から子どもたちを守ろうと必死に努力してきた。これではわかるわけがないと自主教材をつくったり、子どもの負担になると知りつつ「落ちこぼれ」をつくるまいと放課後残して教えたり、宿題を持たせたりもした。また、学習内容に軽重をつけたり、合科したりして何とか生み出した時間は、受験競争や差別・選別の学校制度の中で孤立していく子どもたちの心をつなぎ合わせるためのさまざまなくみに振り向けられた。クラスのお楽しみ会、係活動、児童会活動、修学

旅行・運動会・学習発表会などの行事のとりくみ、時に授業をつぶしての喧嘩の仲裁・・・できるだけ話し合いに時間をかけ、子どもの自主性を育てる中で、子どもたちが互いのことを知り合い、思いや感動を共有できる時間をつくろうと努力した。

教科では、世の中をありのままに見つめ調べる中で、自分の置かれている現状を知り、子どもなりにどう生きるか考える授業をめざした。また、一人ひとりとしじゅうりとかかわる中で、子どもたちの内面を引き出したり、仲間と過ごすことの楽しさを伝える音楽・美術・体育などにも力を入れた。

今回の「教育改革」はそうした教員たちの地道な努力を真っ向から否定する。

90年代に入って、厳しい経済情勢の中、日本経済を救うフロンティアの養成が急務になった。政府・文部省は、今まで小出しにしていた「毒入りの処方箋」を一気に乱発しはじめる。「学校制度の複線化」「通学区域の弾力化」「教科選択制の拡大」「能力別学級編成」「飛び入学」「特色ある学校づくり」・・・。一部のエリートを育てるための対策でありながら、言葉の上では「一人ひとりの子どもの思いを大事にしなが、個性を伸ばす教育をめざす」として、「自由な選択を基調とする教育の多様化、個性化」が進められた。しかし、そのことによって、学びを支え合うクラスメートや子育てを支え合う地域の保護者・住民がますますバラバラになり、孤立化している。中教審の夢のような地域づくりの提案とはまったく逆の現実を招いているのだ。そして、それは、行政のスリム化、学校教育の商品化、公教育の再編・解体の流れの中で、さらに深刻さを増していこう。

「新学習指導要領」は、子どもたちを学習内容の面からも孤立させる。なぜなら3割削減は、教科の系統性を踏まえたものになっていないので、子どもにとっては非常にわかりにくい内容になっているからだ。時間も内容も削減され、学ぶ意味や楽しさを見い出せない授業の中で、子どもの学ぶ意欲の低下や落ちこぼれを増大させることは目に見えている。毎年の学力テストの実施は、テストという脅迫によって子どもと教職員を「学習指導要領」にある基礎基本の学習に駆り立て

る。「興味・関心・意欲」の評価による態度の善し悪しの輪切りと学力テストの点数による輪切りによって、子どもたちは心と学力の両方から管理・選別され、ますます本当の学びから阻害されていく。

「新学習指導要領」の目玉である「総合的な学習の時間」では、経済優先の「教育改革」のねらいである「生きる力」を育てる時間だといわれている。文部省は当初、教員の創意工夫が生かせる時間であるとして、学校の独自性を大事にすると言っていたが、目に見えない縛りの中で、「奉仕活動」「リサイクル」などの道徳の実践の場や自分たちのことは自分たちで律することのできる安上がりな地域づくりの時間、「コンピューター」や「英会話」など日本企業の海外進出を支える時間など、結局全国似たような内容になっている。

今の「学習指導要領」の教育観は、それぞれの興味関心にもとづく課題を選ばせ、自分なりに解決させていく活動を重視する。そのこと自体は重要なことだが、官制研では、「何を」考えるかよりどんな方法を使って考えるか、「何を」伝えるかというよりどんな方法で伝えるかということばかりを問題にする。それは、子どもの中に現実をリアルに捉え考えることによって沸き上がってくる思いを育み、その思いをどう人に訴えていくかということを教えるものではない。物事の本質・何を」を問題にし考え合わない授業は、うすっぺらで感動がないものだ。そんな授業で、子どもたちが仲間と学びを共有し、互いの思いを知ることで友情を深め、賢い主権者として育つことはできないと思う。

また、「新学習指導要領」では、一つの目的に向かって協力し合いながらつくり上げていこうとする自治的活動は重視しない。根底に「フロンティア」育成があるので、「一人ひとりの個性の重視」と言いながら、「できない子」には「できないのも個性」とし、その子の個性を伸ばす最大限の努力を放棄する傾向がある。そして、一部の「できる子」の国や経済界に役立つ部分だけをのぼすような学習になりがちだ。それでは、「できない子」にとっても「できる子」にとっても、楽しい授業にはならないのははっきりしている。

日本の「教育改革」は、「共生」「連帯」「主権者として

の共通教養」を育てようという世界の流れに、まったく逆行するものになっている。

### 3)管理される教職員や子どもたち

そんな「毒の処方箋」を乱発しておきながら、文部科学省は、教育をめぐる荒れの原因と責任を保護者や教職員に押しつけている。国が家庭のしつけにまで口を出してくる中で、社会の矛盾のあおりを受け、さまざまな弱さに苦しむ家庭の子どもたちや保護者は、世間の冷たい視線を浴び、ますます孤立している。教員に対しては、「指導不足教員」に対する研修や肩たたき、人事評価制度による教員の能力・実績にもとづく賃金の在り方の検討が行われ、教職員もまた厳しい管理・統制の中で孤立感を強めている。

そんな中で管理職は、口では「一人で抱え込まないように」と言いながら、学級で起きるすべてのことを担任の能力のせいにするようになってきた。以前は、子どもとの関係がうまくいかなかったり、問題を抱えた子のいるクラスの担任を、みんなで励まし合いながら支えたものだ。今は、みな自分のクラスの問題を隠そうとする。だから、事態はもっと深刻になる。この頃は、難しいクラスや、難しい子どもを受け持とうと手をあげてくれる人が本当に少なくなったように思う。

そうした職員室のつながりが希薄になっていった背景には、価値観の多様化や教職員同士を分断し競争させる教育政策によって、教職員組合の力が弱まっていったことが上げられる。強いと言われる北海道教職員組合(北教組)の分会の中にも、悩みを出し合い、職場をより良くしていくための分会会議や校長交渉をほとんど行えないところが出てきた。

しかし、多くの北教組の分会は、厳しい情勢の中であって、本音が話せる職場を守ろうと必死に頑張っている。それを支えてきたのは、30年前に交わされた労使協定である「協定書」(46協定)だ。この協定は、北教組の憲法と呼ばれ、北教組-北海道教育委員会(道教委)、支部-教育局、支会-地方教育委員会、分会-校長といった各級段階における労使交渉を保障してきた。北教組の組合員は、この「協定書」にもとづい

て、権力に対してもの言える学校職場をつくり、自主編成運動にもとづく民主教育や教職員の命と権利を守ってきた。政府・文部省による「毒の処方箋」の影響を最小限に食い止めようしてきたのだ。

その「協定書」を諸悪の根源と憎む政府・文部科学省や自民党は、道教委に執拗に圧力をかけてきた。今年3月20日、その圧力に屈した道教委は、一方的な「協定書」の一部削除の通告を北教組に行ってきた。

「日の丸・君が代」の強制を通して、もの言わない・もの言えない教職員・国民づくりも始まった。昨年9月、札幌市教委は、「日の丸・君が代」の強制のために校長に職務命令を出し、一方で、職員会議の形骸化や校長権限の強化をもくろむ学校管理規則の改悪が行われた。それによって札幌市の小・中学校では、教職員の激しい抵抗にもかかわらず、中学校で政令指定都市の中で最低の13%だった「君が代」の実施率を99%に、小学校で40%が100%にされてしまった。

今、管理職の中に、「日の丸・君が代」をはじめとして、学校の教育内容や運営にかかわるすべてを自分の思いどおりにしたいという欲求が高まってきている。まるで民間企業の社長の様な気分で職員に鞭をとばし、校長自ら職員向けの通信を発行し、文部省の政策をいち早く伝えたり、参観日の懇談会等の持ち方や保護者・子どもへの対応について細かく指導するという人も出てきた。職員会議の最中、「上司の命令が聞けないのか」と怒り出す管理職もいるという。私の友人は、「いくら議論しても、最終的には校長が決めるのだから、意見を出す意味がない」と学校運営の反省のためのアンケートを白紙で出した。教職員の中に、無力感が広がってきている。

「日の丸・君が代」は、自分の良心に反することも黙って行う教職員をつくる。その一方で、反対するものをあぶり出し、平和を願い人間らしく生きたいもの言う教職員を「偏向教師」「非国民」として排除する働きをしている。

また、「日の丸・君が代」の卒・入学式への導入は、子どもの心を深く傷つける。立った子も座った子も、歌った子も歌わなかった子も、自分が信頼しているまわりの大人たちの思いの狭間で苦しむ。歴史の真実を

知り、「日の丸・君が代」に対する純粋で率直な感想を持った子どもたちは、「強制」によって自分の疑問や思いを押し殺さなければならないことになる。

「思想信条の自由」を侵されるのは、子どもだけではない。息子の中学の入学式で、「全員お立ち下さい」という呼びかけに、自分の良心に国家が土足で踏み込んできたような不快感を持ったのは、私だけなのだろうか。式場に「君が代」のテープが流れる間、保護者の間から、歌声はほとんど聞こえなかった。

今、学校現場は、人の心をますます大事にできなくなっている。そして、教職員も子どもものびのびと本音が言えない暮らしの中で、現代社会が一番求めている「自主性」「創造性」「人間の内面的な価値」を共に追求していくことが逆にとても難しくなっているように思う。

そして、学校から「本音」とともに「生命力のオーラ」がどんどん消えている。

#### 4. 2年4組の子どもたちとの暮らし

そんな生命力をなくした学校現場を再生するためには、学校・家庭・地域に深くしみ込んだ毒をなんとかしても取り除いていかなければならない。その毒抜きヒントを、私は自分の20年前のクラスのささやかな実践に見いだした。

ここに2年生の作文がある。

「スポーツクラブ」

2年4組 H

うちのクラスは、なんどドッチボールをしても、まけてばかりでした。そこで、みんなで考えました。そうだったじゃあ、スポーツクラブを作ることになりました。

さっそく学校から帰ると、クラブへ行きました。クラスの20人ぐらいがあつまりました。いろいろサッカー、やきゅう、おにごっこかをしました。いろいろできるだけのことをしました。

ところが、それが3日ぐらいつづくと、Mさんとぼくしかきませんでした。そこでぼくとMくんのみなをよびにいくというめいあんを思いつきまし

た。

「そうだ、じてん車でみんなをよびにいこう。」

まず、Dくんをよびにいったら、

「今、ごはんを食べているから、食べ終わったらいくから。」

といったから、つぎは、Eくんの家に行くとおばあさんが出てきて、

「Eはやきゅうにいったよ。」

といたので、いろいろさがしてみると、近くの野原にいたから、ぼくが、

「E、こい！」

といったら、とつぜんまわりにいた高学年の人からおかけられました。

そして、グラウンドににげていくと、DくんとRくんがきていて、ゴールのないサッカーをやりました。5時になるとかいさんしました。

つぎの日のクラブには、10人ぐらいきましたが、Yくんがきませんでした。ぼくは、なんとかYくんをこさせようとして、ほかのみんなをよびました。15人ぐらいになると、みんなでYくんをさがしました。そして、やっとYくんをさがし出しました。きてくれないのがくやしくて、くやしくて、とうとう5かいぐらいYくんをぼくの手でぶんなぐってしまいました。ぼくは、Yくんに、

「グラウンド百しゅうすれ。」

といいました。ともだちがしんぱいして、しょくいんしつの先生のところにいいにいきました。そして、先生に、

「Yくんをどれいにしてはいけないよ。」

とおこられました。

ぼくは、つぎの日、学びゆう会でみんなにせめられました。ぼくは、その時、わがままなところがわかりました。そして、友だちってなにかって、自分がこまっているとき、きょうりよくしてくれる人だと思いました。それをどれいあつかいしてはいけないだと思えます。

そのことをお母さんにだまっていた、あとから、お母さんの耳に入って、Yくんのうちにあやまりにいきました。Yくんのお父さんは、かんかんだった

そうです。でも先生が、  
「Yくんのお父さんは、そういう元気な子どもが大  
すきだっていったよ。」

というのを聞いてあんしんしました。

ぼくは、いまでもYくんにわるいと思っていま  
す。これからも、いっしょうけんめいクラブをやっ  
ていこうね。Yくん。ぼくも、もうぼうりよくはふ  
るわないよ。

そんなじけんがあったあと、クラブはますますた  
のしいものになりました。トレーニングのせいか、  
2年4組のみんなは、スポーツがとくいになってき  
ました。でも、ドッチボールのしあいでは、1組や  
2組にはかっても、3組には1度もかったことがあ  
りませんでした。

そして、いよいよ2学期さいごの土よう日の体い  
くの時間です。1組の先生が、  
「4組と3組、2組と1組。」

といました。ぼくは、3組をたおす大チャンスだ  
と思いました。ぼくは、ナイヤ人です。2組の先生  
がふえをピーッとならしました。

いよいよ3組とのたいけつがはじまりました。4  
組はいつもまけてばかりにされていたので、みんな  
教室でがんばるとやくそくしてきたので、力いっば  
いです。ナイヤ人とガイヤ人は、ひとりひとりあて  
ていこうときめました。そうしたら、だれかが、一  
番つよいGくんをやっつけました。あとはこっちの  
ものです。

どんどんあてていくと、さいごの5人だけになり  
ました。こっからがあてづらいところです。みんな  
の目はしんけんな目をして、みんなの顔はしんけん  
な顔をしていました。このドッチボールは、当てら  
れたらもうナイヤにいけないドッチボールです。で  
すから、こっちのナイヤは20人ぐらいいましたから、  
どんどんあてていくと4人になりました。みんな  
の声は、「ヤッター！」とすごい大きい声でした。  
それからちょうしが出てきて、3分間で3人もあて  
ました。あと一人はかるくやって、0人になってか  
ちました。

みんなならんであいさつをしたあと、ぼくはしぜ

んになみだが出てくるのがわかりました。なんだか  
はずかしくて、顔を上げられませんでした。みんな  
が、ぼくの顔を見て、ニコニコわらいました。Mく  
んもなっていました。

ぼくは、今までクラブをつづけてきて、ほんとう  
によかったと思います。これもみんなのきょうりよ  
くで、できたことです。これからもなかよくやって  
いこうね。3年生もがんばります。

作文にあるスポーツクラブは、試合に負けてばかり  
の子どもたちが、体育館から帰ってきて、どうすれば  
強くなるかを話し合い、放課後みんなで集まって練習  
しようよということになって結成された。何人集まれ  
るか、塾や歯医者のある人はどうするか、グラウンドか  
ら遠い人はどうするか、集まる時間帯はいつにする  
か・・・けんけんがくがく話し合っているのをほほえ  
ましく横で見ていた自分を思い出す。

スポーツクラブが始まってまもなく、朝、教室に行  
くと、何やらものものしい雰囲気子どもたちが話し  
合っていた。毎日やってるこのクラブに誰も集まって  
こないで、リーダーたちが腹をたててみんなに話し  
ている最中だった。

「どうして、みんな集まってくれないの。みんなで  
決めたスポーツクラブなのに。」

半分涙ぐみながら訴える。

「やりたいけど、塾があるもの。」

「友だちと遊んだっていいじゃない。」

「留守番だってしなきゃならないんだよ。」

「リーダーは、来ない人を悪者扱いするけど、自  
由でもんがあっていいはずだ。」

リーダーは負けずに言い返す。

「そんなことはわかってるさ。だから、用事のある  
子は、その日か次の日にでもぼくたちに言ってほし  
いって言うてるだろ。別に自由を認めてないわけ  
じゃないさ。」

「何のためのスポーツクラブなんだ。クラスが仲良  
くなるため、体育の時間、負けてばかりいるから、  
強くなるためにみんなで決めたことじゃないか。」  
と、えんえんと話し合いがつづいた。スポーツクラブ

を続けることの弊害が次々と私の脳裏をかすめた。でも、今、彼らにとって大事なことを大切にしたいと思った。大人の論理で考えた簡単な道を押しつけないと思った。

彼らは、大人だってうまくいかない「組織運営」や「仲間づくり」に真正面にぶつかってとりくもうとしているのだ。私は学級通信に、「受験競争、乱塾時代といわれ、子どもの遊ぶ時間が少なくなっている社会の中で、一人ひとりがバラバラにさせられている状況があります。そうした状況を子どもたちは、子どもたちなりに感じ取り、抵抗しようとしているのではないのでしょうか。この話し合いで、子どもたちがやめると言い出せば別ですが大きな弊害がない限り、担任としては見守ってやりたいなあと思っています。」と書いている。

話し合いで、何人かの子が泣きながら、

「次はきつと行くから続けよう。」

と言った。そして、全員が暇な時は参加することを誓い合った。リーダーたちが、

「ぼくたちの気持ちをわかってくれたことがすごくうれしいよ。」

と言った。

こうしたやりとりは、学級通信でおうちのの人に伝えた。おうちの人や子どもからは、おしゃべりノート(日記)を通して、さまざまの思いが私に伝えられ、通信に書いて、みんなで交流し合った。学校のグラウンドや校区の公園では、うちのクラスの子どもたちがいつも20人ほどむれをなして遊んでいる姿が見られ、その様子をほほえましく見守るおうちの人がいた。

子どもたちは、私がまだ教室にくる前に朝の会をはじめていた。ドアを開けると、昨日のクラブでのけんかの仲裁をしていたりする。子どもたちはのびのびと自分のことを話すので、私にも子どもたちの放課後の暮らしぶりがよくわかった。

熱血漢のHくんは、目標に向かってまっしぐらに頑張れる力がある。一方で、強引なところや相手の気持ちを考えずに行動してしまうところがあった。Hくんは、社会性はあるが学習面で遅れのあるYくんに対して、Yくんが自分の思いどおりにならない時、暴力を

ふるうこともあった。私は、Hくんからいじめをうけているということをお母さんから相談されていたが、二人の関係を变えることがなかなかできないでいた。だが、スポーツクラブがはじまって、放課後も含めた子ども同士の生身の交流が行われるようになると、HくんとYくんの関係は自然に対等なものへと育っていった。

子どもたちのスポーツクラブは、ドッチボールの試合に勝った後も続けられ、他の学年やクラスの子も参加した集団遊びへと発展していった。子どもたちの放課後の交流も活発になり、一人っ子のNちゃんやAちゃんは、誕生日パーティーにクラス全員の友だちを呼んだ。お菓子を配り、近くの公園で遊ぶ程度のものであったが、子どもたちは大いに満足した。

そんな子どもたちの交流は、おうちの人たちの間に、本音を出し合いながらみんなでよってたかって子育てをしようというムードを広げていった。畑がつぶされ、次々と新しい住宅が立ち並ぶ新興住宅街の中で、学校は、子育てを通して人と人をつなぎ合わせていく役割を担っていた。

中学校の校内暴力が深刻な状況になり、詰め込み教育、落ちこぼれも社会問題化していたが、20年前のまだファミコンが家庭に普及する前の(ファミコンは1983年発売)子どもが外で遊ぶことが当然だった時代、そして、教室の実践が自然な形で地域とつながっていた時代だった。学校で育てた自治の力が、子どもたちの放課後の暮らしに生かされ、地域の中で子どもを豊かに育む力につながっていた。

7 養護学校義務化の2年後だった。まだ、私の学校には特殊学級がなく、障害のある子も迷わず普通学級で学んでいた。その頃のクラス定員は45人。私のクラスは転校生が来て46名のすし詰め学級だった。学力差が大きく、手のかかる子が数名いた。新米教師の私が手におえる人数ではなかったが、私は、子どもたち一人ひとりの「おしゃべりノート」に毎日目を通して、返事を書き、子どもやおうちの人々の声を知ろうと努力をした。振り返るとそこまでまひまかける必要があったのかと思うが、その時は、子どもやおうちの人々の思いを知りたくて夢中だった。今と違って、放課

後、自分の学級のことに集中できる時間があったからできた仕事だ。

若い私の指導技術の未熟さは、子どもたちにずいぶん助けられた。今思えば乱暴な話だが、自習は国語の物語教材の読み取りをさせた。あの子たちは、教員の手を借りず自分たちの力で国語の教科書を一行一行読み合わせながら、登場人物の心情を読み取るなんていうことをやってのけた。子どもたちの自治の力は、授業にも反映された。

かつてのB小は新設校ということもあって、教育委員会の影響を強く受けていたため、組合活動に対しては決して熱心だとは言えない分会だった。しかし、この頃のB小は、新設後数年たち、職員も入れ替わって、官主導の学校から自分たちの学校に変えようというムードが高まっていた。

中教審にもとづく教育への国家権力の介入が本格化し、管理強化のための主任制度が全国に導入されたのは、この数年前のことだ。北教組組合員は、職場に上意下達の重層構造をつくるものであると反発し、主任は職場に存在しないとして、5000円余りの主任手当を毎月当局に返還した。その一方で北教組は、実質的に主任が機能することを防ぐために、一人一係制を提案した。B小も重層構造の校務分掌を変えようと職員会議で話し合いを重ねた頃である。

教職員は、子どもに直接関わる教育内容に関することは自分たちに責任があるという誇りをもっており、仲間同士は、妥協を許さず互いに切磋琢磨しあう関係にあった。校長は管理面は自分の仕事だが、子どもに直接関わる事は教職員集団に任せてくれた。その一方で、仕事の先輩として若い教職員の悩みを聞いてくれたり、私たちの教員としての才能や努力を認め、励ましてくれた。たまに上意下達を強いてくる校長もいたが、教職員集団にそれを跳ね返すだけの誇りとパワーがあった。職員会議では、子どもを育てている平等な立場で、子どもを真ん中においた自由闊達な論議が行われてきた。中でも「日の丸・君が代」問題は、教職員の生きざまをぶつけ合う討論になり、B小も新設以来、歌われてきた「君が代」は、ひとりひとりの思想信条に触れる問題になるとして、卒・入学式では扱わな

いことにした。

今はもう全国の学校から消えつつある風景、自分たちの失敗や悩みを語り、一人の子どもをめくって相談し合う職員室、笑いや励ましのある職員室が、まだあちこちの学校にあった。そして、北海道には、「日の丸・君が代」の強制や学校管理規則の改悪による校長権限の強化、「協定書」の削除通告が行われるつい最近まで、そんな学校がたくさんあった。

私は、そうした環境の中で、民間会社に勤め出張がちな夫と結婚し、3人の息子を次々に出産した。子どもが小さい間は、家と保育園と病院と学校の往復といった暮らしだったが、職場の仲間やおうちの人、そして何といてもクラスの子どもたちに支えられながら、何とか「問題教師」にならずに日々の仕事を切り抜けていった。

歌と友だちが大好きだった2年生も、高学年になると斜に構えて、どこでも歌ったりすることはなくなった。中学に行くと、授業中、お客さんになってしまうYくんやAちゃんがいじめられているといううわさを聞いた。2年4組の仲間たちが心配して、そのことを私に教えにきてくれた。

中3の12月、Aちゃんのお母さんから、「こんなに真面目に暮らしている子が、できないという理由だけで高校生になれないなんて悔しい」と電話がかかってきた。お母さんは、Aちゃんをなんとか高校生にたくて、受け入れてくれる高校を必死に探した。そして、やっとAちゃんの学びたい気持ちをわかってくれる高校が見つかった。Aちゃんは、高校生になれたのが嬉しくて、1日も休まず学校に通った。勉強はよくわからなかったが、友だちがたくさんできた。

時々、息子のベビーシッターを引き受けてくれたNちゃんは、高校でいじめられて拒食症になり、1か月で10キロ痩せた。3年になると学校に行けなくなった。大学に行きたかったNちゃんは、進学をあきらめてパン屋に勤めた。あれだけ悩まされた拒食症は、高校卒業と同時に治り、店のおばさんたちにおこられながらも、パン屋は無遅刻無欠勤で勤めることができた。

この子たちが20歳になった時、ススキノでクラス会をやった。小学2年生のクラス会なんて珍しいが、放課後、群れをなして遊んだ仲間たちのことは、子どもたちも懐かしいらしい。先生と対等に飲めることが嬉しくて、わざと大人びたことを言うてくる。みんなあの頃のことを実によく覚えていて、その時は言葉にできなかった思いを私に語ってくれた。子どもは皆大人になって、その頃の気持ちを思い起こし、そして、考える。

Yくんは中学を卒業すると工事現場の作業員になった。私は、無口でいつも自信なげだった彼が、こんなに饒舌だったかと驚いた。Hくんは、変わらず元気いっぱい的大学生になっていた。20歳になるまでの13年間は楽しい暮らしばかりではなかったようだが、みんな美しく、たくましい若者に育っていた。

最近、Yくんから時々電話がかかってくる。それが、「サラ金の保証人になってほしい」「作業員の仕事を首になった」「彼女と別れた」「先生の声がかかかった」・・・などちょっと危ない電話だ。私は、あぶない話の度に「お母さんに言いつけるよ」と脅す。すると、口ごもって、しばらく電話はこない。でも、私は、つなわりをしながらも、地域の中で必死に生きている彼の声を聞くとほっとする。

20年たって、様々な指導法を学び、たくさんの子子どもたちに出会い実践を積んだが、私の実践は、あのクラスをなかなか越えることができないでいる。誰もが、自分の頭で考え、悩み、互いにつながりあおうと必死だったからできた実践だった。

## 5. 学校に生命力のオーラを取り戻すために

教員なら、何度か経験したことのある昔話だ。「時代が違う！ 子どもが違う！」という人もいるだろう。しかし、学校に生命力のオーラを取り戻すために、私はあえてこの昔話を語りたい。なぜならいくら世の中が変わっても、長い人間の歴史の中のほんの20年やそこらで、子どもが簡単に変わってしまうことはないと思うからだ。子どもは、大人にお膳立てされなくても自ら考え自ら学ぶ。子どもは、人と連携し組織する力がある。何より子どもは、人間が大好きな

生き物だ。「生きる力」をわざわざ教えてもらわなきゃならないようなヤワな生き物ではないと信じる。

確かにスポーツクラブをつくるきっかけは、競争に勝つための特訓だったかも知れないが、地域での集団遊びの経験のなかった子どもたちが、自らの働きかけによって、仲間と集い、自然の中で遊ぶことの楽しさを知ることができた。そうした活動を通して、クラスの中だけでなく保護者・地域の中に確かなつながりをつくっていった。

私は2年4組の仲間たちとの暮らしの中で、大人の押しつけではなく、子ども自身が必要感を感じ、本当にやりたいことをおもいきりやってみることが、自らの暮らしに「生きて働く力」や教室での「学びを支え合う仲間」を育てていくということを知った。生命力をなくした子どもたちを救うのは、政府・文部科学省の言う「心の教育」でも「生きる力」でもない。

また、私は、子どもの放課後や休みの豊かな暮らしは、学校に子どもたち自身がのびのびと考え、表現し、行動できる場・自治の機会をつくることと密接な関係があることを知った。子どもたちに自治の力を育て、地域に帰してやるのだ。完全学校5日制の意義を生かすも殺すも学校次第だ。一部の余裕のある保護者や地域住民の手を借りた子ども不在の地域コミュニティづくりでは、学校も地域も子どもも変わらない。

私たち教職員が今一番しなければならないことは、人間不信に陥っている子どもとの関係を回復することだ。できる限り仕事を精選・取捨選択し、子どもとゆっくりつきあう時間をもつ。あせらず、無理せず、共に考え、子どもたちの一番身近な応援団としてかわりたい。一昨年の子どもの卒業文集に、「跳び箱ができなかったけれど、先生が放課後残って教えてくれたので、跳べるようになった。自分の力をあきらめないで良かった」と書いてくれた子がいた。子どもたちは、自分の力を信じ、できるようになりたいと思っている。そんな子どもの素直な思いに、放課後残したりしないでつきあえる教員になりたい。それには、管理主義・効率主義の「学習指導要領」にとらわれず、目の前の子どもたちに一番必要な教育課程を自主

編成することが不可欠だ。

政府・文部科学省・公権力は教育基本法・憲法の「改正」などさらに強力な「毒の処方箋」を用意している。今年4月には「つくる会」の中学校「歴史」「公民」教科書が教科書検定を通った。「戦争のできる国」日本とそれを支える「お国のために自己犠牲をいとわない」国民づくりが着々と進行している。この動きは、草の根右翼のしたたかな活動も手伝って、あっという間に押し切られてしまいそうな勢いだ。

なのにそのことを問題にするのは、ほんの一部の人たちだ。多くの人々は、知ってか知らずか無関心を装い、辛い現実の不満はそのままにして、気のおけない友人や家族に自分の心の居場所を求める。職員会議の後、言えなかった思いをのせたEメールが職員室を飛び交う学校がある。「日の丸・君が代」や「校長権限」には目をつぶり、表面だけ仲良しの楽しい職場をつくろうとする動きがある。負けてばかりの組合に期待を失い、やめていく仲間もいる。今こそ声を上げ手を結び合わなければならないはずなのに、私たちの中には、あきらめや決めつけ、反目が蔓延している。それを見て、ほくそえんでいるのは誰だろう。

そんなことを考える時、私は、2年4組の子どもたちのスポーツクラブづくりのやりとりを思い出す。子どもたちは、人を信じ、受け入れ、どの子ともつながり合おうと一生懸命だった。それができるのが人間なんだと・・・。

もう一度原点に戻ってみよう。向こうが「公」のために、教育のシステムや教育内容を大改造し、カウンセラーまで使って「タテ」社会を強要し「私」をつぶしてくるのなら、私たちは、徹底して「ヨコ」のつながりと「私」で対抗するしかない。子どもも大人も本音を語り、自分を語り、本当は何が大切で自分たちは何をしたいのかを仲間と一生懸命考え合うのだ。そのささやきは、最初は小さなものかもしれないが、日本中あちこちでみんなが必死にささやけば、きっと世の中を動かす力になると信じる。

でも、子どもたちと違って「タテ」社会の価値観にどっぷり浸った私たちが、「ヨコ」のつながりをつくるのは本当に難しい。「先生と生徒」「先生と保護者」「主

任と一般教員」はたまた「親と子」「主人と家内」「男と女」「障害の有無」「民族・人種・国籍の違い」・・・そうした身近なところにある差別的な「タテ」を一つ一つ克服する中で、対等な「ヨコ」のつながりへと変えていくことが必要だ。それが民主主義の原則であり、民主主義は、差別や上意下達の人々の関係を友情と連帯に変えていくものだと思ふ。

そして今、「タテ」社会に対抗するためには、どうしても「タテ」になりがちな組合運動の在り方も考え直さなければならない時にきている。そうでなければ、ささやきを吸い上げるポンプの役割を果たせないからだ。組合がささやきを大きな声へと束ね、「あきらめや決めつけ、反目」を友情と連帯に変えることができた時、権力にとってこれほど恐ろしいことはないだろう。なぜなら、何と言っても現場の人間が自らの役割に気づき、変革していこうとすることが一番力になるからだ。

私は、人々の生命力のオーラを取り戻すために、職員室・教室・地域に「しぶとく、やさしく、決して変節しない」人のつながりを辛抱強くつくっていきたいと思っている。

## 心理主義化社会における社会臨床学の課題(上)

井上芳保(札幌学院大学)

はじめに

1. 小沢講演会を聴いて考えたこと
    - (1) 誰のための臨床哲学か
    - (2) よく聴くことの先にある関係性とは何か
    - (3) 家族への強い関心の意味するもの
    - (4) 非対称的であることの評価をめぐって
  2. 臨床社会学の面白さとは何か
    - (1) 見慣れたものを見慣れないものに
    - (2) 臨床審「心の教育」路線の受容基盤
    - (3) いじめ現象をめぐる集団力学
    - (4) 「キレル」という現象の知識社会学的分析  
(以上本号)
  3. 「癒し」の比較社会学から見えてくるもの
    - (1) 心理主義化社会としての現代
    - (2) 捏造される「心のケア」の需要と「こころ」系産業
    - (3) セルフヘルプグループという居場所
    - (4) カウンセリングという方法の歴史的起源
    - (5) アイデンティティ不確定性の時代の両義性
  4. 臨床社会学より面白い社会臨床学はいかにして可能か
    - (1) 知識社会学的アプローチの有効限界
    - (2) 普遍化のまなざしと個別化のまなざし
    - (3) 親密性の変容の楽しみ方についての学
    - (4) 非対称性の活用としてのエロティシズム
    - (5) 新しい社会臨床空間の広がりの中で
- おわりに(1)

試論である。このように書くのと直ちに会員から異論が出ることも予想される。本学会は必ずしも社会臨床学なるものを樹立しようとはしていないはずであるし、むしろそうした志向を批判してきたはずではないかと。むろん一つの学問分野としての体系性を志向すること自体に含まれる落とし穴については十分に注意深くあらねばならないだろう(2)。ことによると体系性を安易に志向しない点にこの学会の魅力があるのかもしれない。しかしながら外部の人の眼にはどう映っているのだろうか。「社会臨床学会」を名乗っている以上は「社会臨床学」なるものに関心を寄せる人々の一つの学会であり、何らかの意味で学問的営為をしている人々の集まりであると考えるのが普通である。昨夏の伊豆での合宿時に或る方が述べていたようにさしあたり現代社会の歪みを批判すること自体に主眼をおいた学問であるというのならそれでもよかろう。その場合でも歪みの批判としてどんな課題があり、どんなことをしようとしているのかを或る程度、明示しておかねばならないのではなからうか。ここで「社会臨床学の課題」というのはその程度の意味である。

ところで、この3月16日に札幌で社会臨床学会運営委員の小沢牧子さんの講演会が行われた。私はその司会を担当していたのだが、その場において会場からの質疑応答も含めて気づいたことは少なくなかった。自分がこれまで取り組んできていながらよく整理のついていなかった問題を解く糸口についても刺激を得たような気がする。1. ではそのことを項目別に分けて記す。また2. では社会学の最近の動向に注目してみる。昨今は社会学の中にも臨床社会学という分野が出現し、さまざまな自己主張を始めている。それらには興味深い成果も含まれている。ここでは「心の教育」路線こそがいじめの深化に寄与しているのではないかと

はじめに

本稿は社会臨床学というものが仮にあるとすれば、どのようなものとして可能かの模索のために書かれる

論じているもの、「キレル」という現象について知識社会学的分析を試みているものについて紹介する。社会学という学問の魅力をつるに示すこうした先行業績は社会臨床学のイメージを構想する場合に参考となると思われる。3. では、現代社会が心理主義化社会と呼ぶべきものとなっている事実について確認した後、「癒し」の現状についていくつかの側面から言及する。自己啓発セミナーやセルフヘルプグループなども含めて「心のケア」を志向するものを総称して私はセラピー文化と呼称しているが、それらには否定できない要素も含まれていると思われる。以上の作業を経て4. では臨床社会学より面白い社会臨床学(会)の課題とは何かについて展望する。

## 1. 小沢講演会を聴いて考えたこと

### (1) 誰のための臨床哲学か

3月16日に札幌市女性センターを会場にさっぽろ自由学校「遊」主催、日本社会臨床学会協賛で小沢牧子さんの講演会が行われた。演題は「いま、なぜ『心のケア』を問うのか」。聴衆は約80人。小沢さんは日本社会臨床学会の沿革について簡単に紹介した後、いくつかの観点から「心のケア」への疑問点を提示した。小沢さんが「心のケア」という言葉に対して感ずる違和感として大きいのはそのわざとらしさ、生活との乖離という点であるという。「ケア」という語に含まれる「する-される」関係、「してあげる」というニュアンスのいやらしさについての言及があった。例えば、「被災者、末期患者、高齢者、犯罪加害者・被害者、被虐待児などを対象に専門家、行政が「心のケア」を使うが、「かわいそうな人」が一方的に想定され、本人の思いと生活性、現実性が無視されていないか(配布レジュメ)と問う。また93歳の義母と共に暮らしている」という現在のご自身の生活も話題にした。小沢さんからみると、高齢者の介護も子どもの世話も「してほしいことを手伝う」ような家事の一つに過ぎない。傍にいる家族同士の配慮し合う関係として当然のことである。それを「心のケア」などと言った途端にそうした関係性が歪んでしまうのだという。

小沢さんははっきり名前を出すのを控えたが、この

文脈で厳しく批判の矛先が向けられた「臨床哲学を志向しているAさん」が鷺田清一氏であることは明らかだ。ひもといってみるとその著『聴く』こと力：臨床哲学試論』の第八章「ホモ・パティエンス」中に小沢さんがまさしく言及したエピソードが載っている。「夏にお寺さんが盆のお参りに来てくださったときに、母がさっと後に回ってうちわでお寺さんを扇いでいた。そのうちわが小さいので妻が大きいのを探してきて母に渡した。それをちらっと確認して、ぼくは眼を仏壇に戻した。そのなかの仏さんはいま、お寺さんに拝んでもらっている。まさにケアの輪でしたね。」(221-2頁)という部分である。

小沢さんは家事とはみんなで分担してするはずのものなのに「母」や「妻」つまり女たちだけが当たり前のこととして気配りをするよう期待されていること、「ぼく」(鷺田氏)が観察者としてその場にいることがまずおかしいという。そして日常的にやっていることに「ケアの輪」という名を与えて取って取り出すこともまたおかしいという。日常生活の一部が学問の対象として切り取られる。何のためにかということ、臨床哲学なる学問の樹立のためにである。これこそは学問による日常生活の収奪ではないかということである。この話題の時、会場全体に共感の笑いが起きて空気が緩んだ。特に女性たちに頷いている人が多かったように司会席からは感じられた。家事において女たちだけに気配りの実践が要求され、男たちは傍観しているという構図が批判の対象とされたことへの共感の裏には主婦たちの日常からの怒りや怨念が隠されているのであろうと思われる。

ジェンダー論的な問題への目配りのなさは鷺田さんの臨床哲学の限界を暗示するものかもしれない。しかしそのことはさておくとしてもしこの場に鷺田さんがいたら何と言り返すのだろうかと思像した。臨床哲学なるものが学問の都合のために捏造されている、それは日常生活の収奪ではないのかというのが小沢さんの疑問だが、この点についてはそもそも学問とは何かを考えねばならない。或る分野が新しく学問として確立していくにはそれなりの必然性がなければならないはずである。それだけの必然性を臨床哲学は有していな

いのであろうか。また臨床哲学と似たような批判を臨床社会学や或いはケア学<sup>(3)</sup>なども浴びることになるのであろうか。この点は後で検討してみたい。生活の収奪とはならない学問のあり方とはどういうものなのだろうかと考えた方が生産的ではなからうか。

## (2) よく聴くことの先にある関係性とは何か

講演の後半では「心のケア」が登場してきた時代背景とカウンセリングの果たす機能についての考察がなされた。カウンセリングの機能について小沢さんは相手の話をじっくり傾聴することの先に何があるかでコミュニケーションとして二つのタイプが分かれるのだという。一つは「感情(特に怒り)を鎮静化させ、内面に還元させる方向性」であり、今一つは「感情(例えば怒り)を共有化して必要な行動を共にすることで状況を変革していく方向性」である。小沢さんはカウンセリングがもたらすのは専ら前者ではないかという。怒りからしか生まれえないもの、変わっていかないものがあるのに、カウンセリングはそうした契機を人間関係の場面からすっかり奪ってしまうというのである。

このように小沢さんは『カウンセリング・幻想と現実』の巻頭論文「カウンセリングの歴史と原理」でも展開していたカウンセリング批判の論旨をここでも繰り返した。それは原則的にロジャーズ派の非指示的なカウンセリングを想定している。例えば、小沢論文に載っていたスクールカウンセラーがいわゆる問題児との間で交わすコミュニケーションのケースがこれである。「○○先生って許せないよ」と子供が叫んだなら「どうしたの。何があったの」と聴くのが日常会話における普通の対応だが、カウンセリングにおいては「○○先生に怒っているんだね。許せないんだね」となる。対等なコミュニケーションのパートナーとして相手との関係を作らないのが「よいカウンセリング」とされるわけである。フェミニストカウンセリングの場合を想像してみてもよからう。そこでは確かにクライアントは鎮静化へと導かれる。例えば、理不尽なことをした夫や姑への激しい怒りは殺ぎ落とされ、問題の本質は解決されないままになりがちであろう。まさしく麻薬のような効果をカウンセリングはもたらすのであ

る。

しかし基本的には全く小沢さんの指摘の通りだと感じつつ取って異を唱えるのだが、例えば、妻の態度変更が日常的な関係性そのものに何らかの変化をもたらす可能性はないのだろうか。また全ての心理療法やセラピーが状況の変革ではなく鎮静化の方向へと人を誘うと言い切れるのであろうか。それらの中にはストレートな感情(例えば怒り)を共有化して必要な行動を共にすることで状況を変革していく方向性を作り出すことに寄与するものもあるのではないだろうか。意図せざる結果という問題はあなどれない。自己啓発セミナーのプログラムの実体験者としてはこの疑問を払拭できないのである。

相手の話を傾聴するのは大事なことだ。一般に現代人はよく聴くことが下手になっていると思う。日常生活が忙し過ぎることも一因だろう。上の例でいえば家族の中で専業主婦の妻が孤立していて自分の話をよく聴いてくれる人を切実に求めている場合が想像される。大都市に住んでいて地域社会との関係性もあまりなく、友達も少ないという場合などはどうすればよいのだろう。もちろん根本的治療方法は日常的人間関係を再構築していくことだろうが、対症療法や応急措置としてはフェミニストカウンセリングの場も一定有効なではなからうか。「よく聴くことの先にある関係性とは何か」についても熟知した注意深いカウンセラーがその妻の話をよく聴く役割にひとまず徹することによって妻の状態、妻のその後の対人コミュニケーションのありようが変わり、そのことが一つの引き金となって彼女の生活環境が好転することもありうるのではないだろうか。フェミニストカウンセリングに関しての以上の想像は、会場から最後に或る女性から出された質問についてその趣旨をくみとって私流に補足してのものだ。講演後に私のところに個人的に話しにいらした方のお話などから察するに小沢さんの説明だけでは納得しなかった人も会場にはいたように私には感じられたのである。

たださらに付言しておく、私がかつて調べたエホバの証人やアムウェイの勧誘の現場ではしばしばこうした状態の妻が格好のターゲットになっている。彼ら

は相手の話を実によく聴く。そして共感の輪を作り上げる。その結果、まさしく「ストレートな感情(例えば怒り)を共有化して必要な行動を共にすること」になりかねない。信仰の共有体験を通して、アムウェイの商品を販売していくことを通して友人のネットワークが広がっていくことの喜びは小さくない。だからどちらの場合も見事にはまってしまう主婦が現実にかなりいる。「ストレートな感情(例えば怒り)を共有化して必要な行動を共にすること」になれば自明に善だともいえなくなる。そうだとすると、フェミニストカウンセリングとこれらの現象とを比較してどちらが「よりよい」のかを考える視点も必要になるのではないだろうかとも思う。

### (3) 家族への強い関心の意味するもの

ところで、会場からの質疑応答については「何でも構いません」と言ったせいもあって、小沢さんの講演内容そのものからはかなりはずれた私的な感想や体験談のようなものが多く出てしまった。本当は好ましくないことだが、それはそれでよかったのではないかと考えている。少なくともこの日、小沢さんの講演を聴きにやって来た人たちの多くにとって関心ある事柄とは何かをしっかりと見届けることができたように思う。ではいったい何が出されたのか。自分の家族関係、とくに親との関係を話題にする人が多かった。親とどう関わったらいいのだろうかという形式の質問群としてそれらは整理できる。伝播作用もあったのだろうが、カウントしてみると5つほどもそうした種類の発言が続いた。或るセルフヘルプグループに属して活動している人からは自分の日常的対人関係の悩みも語られたがその人もまた親からの自立という問題にこだわっていた。

家族や親子関係についての話題がかくも多かったこと自体を私は一つのデータとして受け止めた。自分のことが親にわかってもらえない悩みを切々と語る人にとってはそのように語ることで自分が一種の「癒し」になっているのかもしれないと感じつつも、私はなぜ親との関係にばかりそんなに強く関心が向くのだろうかということをも考えながらそれらの発言を聞いてい

た。現在の社会で家族という人間集団に特に強く何か期待されている、その何かの正体は。またそのような事態の発生は全体社会の動きとしては何を意味しているのかについて客観的に考えてみなければならない。

伝統的家族はさまざまな機能を有していた。かつても今も農村などでは家族総出で働く。自営業の場合も同様である。つまりそうした家族は生産機能をも担っているのである。それが大都市のサラリーマン家庭は消費機能だけになっている。もちろん伝統的家族が有していたのは生産機能と消費機能ばかりではない。教育、保護、娯楽、地位付与、愛情などの機能なども担っていた。これに対して近代家族は機能が限定されてくる。教育も保護も娯楽も地位付与も次第に家族以外の人間集団や組織が担うようになる。パーソンズなどは家族の機能は最終的に大人のパーソナリティの安定化と子どもの養育の二つだけに絞られるだろうと早くから述べていた。

家族という人間集団に期待される機能が情緒的関係の安定化に特化しつつある状況を押さえておくべきだと思う。別の言い方をすると、家族はますます情緒的であらねばなくなっているのである。それは家族は愛情によって満たされているべきものという意識の高まりを伴っているものであり、人々は絶えず愛情の不足への不安を抱いている。しかし愛情の量などというのははっきりと計測しがたいものであるからこの不安は容易に解消しない。こうして人々は殆どエンドレスな愛への飢餓感に襲われることになる。そのストーリー中に家族相互の心の葛藤をめぐる話題がふんだんに散りばめられた『新世紀エヴァンゲリオン』のヒットはこうした脈絡からも把握しておくべき社会現象といえよう。

ホックシールドが感情労働<sup>(4)</sup>について論じている『管理される心：感情が商品になるとき』の第7章「両極の間で——職業と感情労働」の中には家族内のしつけにおける子供のコントロールの方法の変容を論じた一節がある。役割関係を利用しての規範の内面化によるコントロール、例えば「ママの言うとおりにしなさい」から感情規則によるコントロール、例えば「ママは

そうしてくれると嬉しいんだけどな」に変化しているというのである。後者は子供の意志に働きかける形で作られるものであり、親子間の感情体験が重視されている。これはイギリスの社会言語学者バーンスタインが労働者階級家庭に多くみられる「上下関係的管理」と中流階級家庭に多くみられる「人間関係的管理」とを対比している部分を援用してのものである。「ママの言うとおりにしなさい」が前者の管理方法としたら「ママはそうしてくれると嬉しいんだけどな」は後者の管理方法である。だが、ホックシールドはバーンスタインの主張とはやや異なっておりこうした変容が階層関係を越えて広まっていくことを強調している。今や人々は仕事においても私生活においても「人間関係的管理」に多くを依存するようになりつつあるのである。それは「Aならば、Bを感じて当然であり、Bを感じたならばCをして当然」という感情規則を受容することを前提としている。

善悪の判断は抜きとして、こうした感情規則を用いた「人間関係的管理」は現実私的領域を超えて公的領域にも広がっている。すなわち我々は旅客機の客室乗務員や看護婦などに限らず、社会生活の至るところで感情労働に直面することとなっている。そして感情を伴うサービスの標準化と商業化は進行している。「心のケア」への関心の高まりにはこうした背景が存在している。かかる事態をどう評価すべきかについてはここでは留保しておくが、ナイーブな形での「心の商品化」批判を繰り返してもあまり有効ではないのではということを感じている。ことによるとナイーブな形でのカウンセリングの社会的機能批判にしても同様なのかもしれない。小沢さんのカウンセリング批判はもちろんあつたっているのだが、それだけで納得できないという雰囲気は無視できないだろう。質疑応答の時間だということに小沢さんの講演内容そのものからはかなり離れた自分の家族関係についての発言が多かった様子を傍聴していて私ははしたないことにそう考えてしまった。

#### (4)非対称的事実であることの評価をめぐる

小沢さんの講演会の場からの帰路にもう一つ気づい

たことがある。それは上記のことと関わるのだが、非対称的な関係をどう評価すべきかという問題である。例えば、バーンスタインが述べている例の労働者階級家庭に多くみられる「上下関係的管理」の方が、中流階級家庭に多くみられる「人間関係的管理」よりも好ましい場合だってあるのではないだろうか。集団の持つ規範を厳しく教え込むという役割の上下関係を利用して「ママの言うとおりにしなさい」とずばりと言って言うことをきかせるやり方のほうが、感情規則に委ねて「ママはそうしてくれると嬉しいんだけどな」などと間接的に言うやり方より技巧がないから実直でごまかさない関係を作れるのではないか。ルサンチマンの誘発などのこじれた副作用を伴わずに済むという点ではむしろ健全なのかもしれない。

このこととの関連で非対称的な関係というものについて問い直す必要を感じている。昨年の夏に書いた「牧人＝司祭型のカウンセリングを超えて」(『現代思想』8月号)という論文では、キリスト教文化と根深く結びついていると思われる牧人＝司祭型の告白とは異なるカウンセリングの可能性について考察した結果、クライアントとカウンセラーとの間に対等な関係性のある方がよりよいあり方ではないかという趣旨のことを述べた。しかしこのように言い切ってしまうてよかったのだろうかと考えている。暫定的な試論とはいえ我ながら大まかな言い方であったと反省している。少なくとももう少し論述の精度を上げないと「牧人＝司祭型のカウンセリング」を超える構想は成就しないだろう。

そもそも現実のコミュニケーションというものはいつも対等であるわけがない。上下関係のない状況を想定するなどというのは幻想であるだろう。ここで以前に羞恥心の研究という文脈で少しだけ調べたことのあるSM系メディアのことも想起される。フーコーらのSM論などをひもといて丹念に読みこんでみる必要性を感じている。今は簡単に思いつきだけ述べておくが、或る不平等な力関係の存在に眼をつぶるのではなく、そのような関係の存在している事実を認め、演ずることによって可視化しそれを超えていくという効果をSMは有しているのかもしれない。それがセックス

の快楽と結びつく点も重要である。既存の下手なカウンセリングによる「癒し」よりもずっと良質の「癒し」の得られる可能性も大いにある。シンポの場で「臨床と言っているが、ベッドはいったいどこにあるんだ」と学会を批判する発言をしていた方もいたが、非対称的な関係性の魅力を究めるべく大まじめにSM研究と取り組むことも社会臨床学の重要な課題の一つといえるだろう。

## 2. 臨床社会学の面白さとは何か

### (1) 見慣れたものを見慣れないものに

「SMへの意志」は「権力への意志」と同様に主体における内発的な面白さへの志向がなければ成立しない。学問もまた面白くなければならない。どれくらい面白いかで学問の価値は決まる。社会臨床学も面白いものでなければ研究する人は集まらない。社会臨床学は社会学より面白くなれるのだろうか。小沢さんの批判に対して臨床哲学がどう答えるかはそれを志向している当人たちに任せておく。ここでは(臨床)社会学ならどう答えるのだろうかを想像しながら、ライバルの(臨床)社会学の値踏みをする。

社会学はまさしく我々の日常生活を取り扱っている。自分が専門としているだけに一度つきつめて考えてみたかったのであるが、この学問の価値や魅力は簡単に言うといったどこにあるのだろうか。社会学が現実に対して何らかの影響力を及ぼすとすれば、産出された言説の力を通してでしかない。それゆえいかに臨床の現場を扱おうと臨床社会学の役割は臨床的営為そのものとはやはり異なる。そこにこそこの学問の魅力がある。

社会学の面白さは、敢えて一言で言うなら日常生活において見慣れたものを見慣れないものに変えてしまうマジックのような力にあるのではなからうか。これを異化作用と呼ぶ人もいる。例えば、ゴフマン『アサイラム』による精神病院の研究では、私物という患者の自己を維持するものが剥奪されることこそが、患者にガラクタ収集といった懸命の防衛行為を産み出させている事態を洞察している。剥奪の結果、生み出される行為それ自身が「異常」とみなされて、さらに

私物を奪われることになるという悪循環的ラベリング過程がここでは進行している。職員の態度変更(患者を「狂人」としてみることをやめる)で状況は激変する。

臨床社会学のまなざしは善意の臨床的なまなざしの社会的機能を批判的に捉え返すこともできる。例えば、この本質を個々人の心の問題に矮小化してしまうことは何を達成しているのかとの問いを立てる。カウンセリングやセラピーはいかにすぐれたものであれ、基本的に幻想の供給でしかないといえる。束の間の解放感を与える点でそれは麻薬と似ている。ひとときの「癒し」の実現と引き換えに我々が失うものは何なのか。そのような問いを生み出す力を社会学は有している。

### (2) 臨教審「心の教育」路線の受容基盤

臨床社会学の仕事の紹介に立ち入る前に「心の教育」必要論の受容基盤について簡単に説明しておこう。「心の教育」という言葉がしきりと強調されるようになったのは、1997年春に神戸で起きた「酒鬼薔薇事件」で中学3年生の少年が逮捕されたとき、橋本首相(当時)が即座に「心の教育」の必要性を提唱したのがきっかけである。それを受けて審議を始めた中央教育審議会が家庭のあり方の改善をこと細かに盛り込んだ答申(『新しい時代を拓く心を育てるために—一次世代を育てる心を失う危機』)を1998年6月に出した。それは学校の道徳教育の見直し、地域のあり方、家庭のしつけの望ましい姿などを提示したもののだが、内容的には「思いやりのある明るい円満な家庭を育てよう」「会話を増やし、家族の絆を深めよう」など陳腐な道徳的お説教の羅列にすぎない。

この「酒鬼薔薇事件」の際にジャーナリズムが最も力を入れて報道したのは「子どもの心の軌跡」への興味、関心に関することであった。親のしつけの失敗や親子関係の葛藤などの心理的な次元の話題ばかりが強調されたのである。これらは親たちの不安をかきたてた。「家庭が崩壊して来ている」「家族がしつけをしなくなってきた」という危機感をあおる効果があったと思われる。先にも触れたが、家族が専ら情緒的充足

機能に特化した場に変容しているという事態もこのことには当然、大きく作用している。

実際には「家族がしつけをしなくなっている」わけではないし、「家庭が崩壊して来ている」わけでもない。むしろ少子化が進み、親たちはますます子どもの教育やしつけに熱心になっており、子どもを大事に育てようとしている。子どもに対する関心の高まりはよいことではないかという意見もあるかもしれないが、事実としては専らよいことばかりとも限らないだろう。その背後には地域の共同体が消失し、学校への不信感が高まり、結果的に家族のみが子どもに対しての最終責任者としてのウェイトを強めているという構図が存在していることを見ておかねばなるまい。

現在、実際に起きているのは、子どもの教育に関心を寄せ過ぎる情緒的な家族が自らをもてあまし始めている事態というべきだろう。労働の場、生産の場としての機能をなくし、情緒的な関係性の充足のみが主要な機能となった近代家族の行き着いた地点がこれなのである。その意味では一部の乳幼児心理学者の「もっと母子密着を」という言説の果たしてきた役割などは反省的に捉え返されねばならない。家族関係、親子関係が今や「逃げ場のない牢獄」のような場になり始めている。そこは育児不安と幼児虐待、過保護・過干渉の問題、家庭内暴力などの病理を培養する場と成り果ているのである。

情緒的家族の構成員たちの産出する「心のケア」への多大なニーズは明らかに社会構造のメカニズムによって構築されたものである。まさしく消費社会の神話に他ならない。それはもはや私的領域にとどまることなく公的領域に流れ出す。市場が受け止めているケースもある。高額のカウンセリングルームや自己啓発セミナーという場の賑わいはその一例である。セルフヘルプグループなどという場も作られるようになった。学校教育もまた例外であるわけではない。臨教審の「心の教育」路線はそのような状況の中で多くの人に違和感を与えることなく受け入れられていったのである。

ともあれ、物質とは違って、心という汲めどもつきない対象が「開発＝搾取」<sup>(5)</sup>され始めているといえよう。セラピー文化は両義的である。公共空間における

「心のケア」の処遇をめぐる比較社会学的考察が必要になっているゆえんである。

### (3) いじめ現象をめぐる集団力学

最近、臨床社会学の研究者から「いじめ」についての刺激的な分析が提出されている。土井隆義「いじめ問題をめぐる二つのまなざし：『心の教育』はいじめ問題を解決するか」(大村英昭編『臨床社会学を学ぶ人のために』世界思想社2000年所収)である。結論を言えば「心の教育」はいじめを解決するどころか、かえって「いじめ」の原因となっているというのである。土井によると80年代の臨時教育審議会答申が打ち出したのは「生きる力」や「個性の重視」という明確な判断基準のない教育目標であった。そのような中から生まれた「心の教育」によって子供たちは自分で自分の価値観を構築しなければならなくなった。そして「子供たちの関心の多様化と内閉化をもたらした」(132頁)。その結果、子供たちに何がもたらされたのか。個性化という聞こえがいいが、それだけではないのだと土井はいう。すなわちそれは「学校に集う人々の主観的差異を抑圧して教師には教師の役割を演ずることを期待し、生徒には生徒の役割を演ずることを期待するという、従来の学校が潜在的に保持してきた演技空間の否定」(133頁)をももたらした。

こうして「学級はもはや各自に付与された役割に基づく演技空間などではなく、自らの内発的感情のストレートな表現空間と化している。すなわち、自分がどう感じたかが振る舞いの基準となっている」(134頁)事態が出現するに至った。このような人間関係はもろい。学級内における生徒同士の人間関係ももろくなっている。「互いの内発的感情にしたがって群れている関係においては、その「いい感じ」が損なわれてしまえば、その関係性もすぐに崩壊してしまう」(134頁)。生徒たちがそこでどうするかというと「自分のめざす方向は正しいのかと常に不安に脅え、それを確認するために、たとえ脆弱ではあっても他人と繋がってみたいと願うことになる」し、「いじめ行為によって傷ついでしまう脆弱な人間関係の軋みに耐え切れずに、遊びのフレームでラッピングすることで、その軋轢をごまか

してしまおうとする」(135頁)ことも起きる。

自分の内発的感情の赴くままに振る舞うという生き方が常にいいとはとてもいえない。自己の一貫性を見失うことになるからである。まさに「大切だと思ったことが、寝て起きてテレビを見てラジオを聞いて雑誌をめくって誰かと話しているうちに本当に簡単に消えてしまう」(村上龍『ラヴ&ポップ』幻冬舎文庫57頁、土井の引用から)のである。

いじめっ子といじめられっ子の関係が流動的で時と場合により入れ替わってしまうこと、いじめの理由に客観的な根拠が見出しにくいことの原因についても「のっぺりとした集団の内部においては、一人ひとりの配置は固定化されえず、継続性を欠いてつねに自在に変化する印象や感覚によってのみ、互いに繋がりがあい牽制しあっているから」(136頁)と分析することができるのである。

ここに現在の学校空間の構造がはらむ矛盾も絡む。すなわち「心の教育」という理念によって個々の子に個性化が奨励されるが、その一方で教育制度の方は「みんなでなかよく」というスローガンを前提とした集団的な体制のままなのである。そのとき「心の教育」は何に変質するのか。「子供たちは、一方では個性化への志向を強めているのに、他方では学級という均質的な空間のなかに依然として閉じ込められている。したがって、個性的な自分を信じながらも、一人の個として主体的な人間関係を他人と取り結ぶことができない。なぜなら、学級という均質的な空間においては、それぞれ異なった個人と個人が対立しながらも対話を進めていくという生き方を前提としていないため、そのようなコミュニケーション・スキルを身につける機会がほとんどないからである。こうして「心の教育」の理念は宙に浮いてしまい、「人にやさしい教育」へと履き違えられていく。本来、個性化教育とは人間関係にある種の厳しさをもたらすはずのものだが、流れは逆を向いている。そして人にやさしくなることを大義名分に、他人との間の違いを評価するよりも、他人と同じであることを要求する圧力が働くようになる」(137-8頁)。

大平健『やさしさの精神病理』(岩波新書 1995年)に

おける「やさしさ」にとってコトバはお互いを傷つける危ない道具」という指摘を援用し、いじめ行為の多くが言葉を発しないサイレントコミュニケーションであるのは対立点の顕在化の防止という効果を有しているためではないかと推察しながら、土井は「いじめは、やさしさを求める人間関係と表裏一体である。互いの対立点を認め、そこに厳しいまなざしを注いで解決をめざすのではなく、互いの対立点をほかに、その存在そのものを否定してしまおうとする人間関係のあり方は、対立を前提としたコミュニケーション・スキルの習得を妨げることになる。その結果、一方では異質な志向性を強く有するようになった子どもたちの間には健全なコミュニケーションが成立しにくくなる。これがいじめの発生する根源の一つなのである」(139頁)と結論づけている。

補足しておく、応用問題としていじめとともに学級崩壊、不登校、引きこもりなどについても或る程度、説明されることになるのではないかと。いじめとは生徒と生徒との関係の問題だったが、学級崩壊は教師と生徒との関係の問題である。不登校と引きこもりはコミュニケーションスキルの乏しい子どもの学校という場からの撤退である。いじめと同様のロジックでこれらの発生経緯は説明がつくことになる。

学級内部の人間関係は脆弱化し、みな自分のその場の気持ちにのみ関心が向いている。自分がどう感じたのが振る舞いの基準になっているというが、そんな事態を作り出すのに寄与しているものとして先にホックシールドの指摘を通して、情緒的家族における感情規則に依拠したしつけへのシフトという要因も挙げられよう。クラス内の求心力の喪失という状況の中でかすかな求心性にすがろうとする子どもたちの集合力学の所産がいじめなのであるという。痛ましいというしかない。したがって何かの有徴性があればいじめやすくなる。子どもたちはなるべく目立たぬように生きようとしているのだろう。

さて、土井の分析する通りだとすると、「心の教育」こそがまさにいじめや学級崩壊を生み出す源泉となっていることになる。文部省がわざわざ原因を作り出しておいてその解決を今度はスクールカウンセラーとい

う高尚な「心の専門家」に委ねるといふ構図が浮かび上がってくる。現在の教育現場で起きている諸問題は臨教審答申から問われねばならないのである。こうしてスクールカウンセラーの配備計画が文部省のマッチポンプ的な教育政策の所産でしかない事態を臨床社会学の研究は暴露したことになる。

#### (4)「キレル」という現象の知識社会的分析

臨床社会学を名乗っていないが、現在の心理学の広範な受容現象を批判的に捉え、分析している社会学者の仕事をもう一つ紹介しよう。森真一『自己コントロールの檻：感情マネジメント社会の現実』(講談社メチエ2000年)がそれである。実は本論のタイトルにある「心理主義化社会」とは、この森の仕事において使用している概念を拝借したものである。それは「心理学や精神医学の知識や技法が多くの人々に受け入れられることによって、社会から個人の内面へと人々の関心が移行する傾向、社会的現象を社会からではなく個々人の性格や内面から理解しようとする傾向、および「共感」や相手の「きもち」あるいは「自己実現」を重要視する傾向」(9頁)を指すものと定義される。

森は心理主義化社会の問題点を主に知識社会学のアプローチを使って解明している。「困った人」本の流行という現象を拠り所にして心理主義化社会として現代の病理を明らかにしている。刺激的な指摘が多々みられる。

例えば「キレル」人が多くなっている事態について、自己コントロール能力の低下によるものという通説を批判して、逆に高度の自己コントロールが要求されている社会であることを論証していく。その際に持ち出されているのは基本的には、デュルケム由来の「人格崇拜」という概念装置とウェーバー由来の「合理化」論である。前者は近代社会において我々の意識に強く働いている「聖なる自己」を傷つけてはならないとする規範である。デュルケムによれば、あらゆる道徳が崩壊しているように見える現代にもやはり強固な道徳は存在していて、それが「人格崇拜」である。実のところ我々は個人の人格を尊重すべきもの、神聖にして侵すべからざるものとみなす義務・規範にしたがって

日々行為しているのである。後者についてはリッツァーというアメリカの社会学者による「マクドナルド化」という概念に置き換わっているが、これは近代の行きつく果てを「鉄の檻」として悲観的にとらえたウェーバーの立論の変奏曲といえる。ちなみにマクドナルド化とは「効率性、計算可能性、予測可能性、テクノロジーによるコントロール」の四要素からなる合理化の原理が現代社会においてますます多くの領域を支配するようになってきている事態を指す概念である。

森は現代社会を高度な自己コントロールと感情マネジメントを要求する社会として把握している。現代社会の基底をなす人格崇拜も合理化の両規範が厳格化、高度化してきている。そのために我々はそのような社会状況で自己の感情をマネージしていかねばならなくなっている。いわば「義務と演技」に塗り固められた感情労働が親密な生活領域への侵食を強めている時代状況をわれわれは生きているのである。

例えば、電車内のような見知らぬ人々から構成される社会的・公共的空間ではお互いに無関心を装っている。話題にすると相手の体面をつぶし、傷つける事柄は気になっていても気になっていないふりをする。また逆に相手の話には実はそれほど関心はないのだが、関心のあるふりをするということもある。これらはまさしく儀礼的行為である。再び感情労働という概念が想起されよう。

森は若者のコミュニケーションの場面を取り上げて分析している。「友人の体面は何かがあってもつぶしてはならないという義務が厳格になり、友人たちとともにいるときには、全力を挙げて場の雰囲気盛り上げようと各人が努力しなければならなくなっている。そしてこのことは人格形成の途上にある若者に特に妥当すると思われる」(109頁)というのである。それでいて「自分の悩みを友人に話すことも、親しい者同士の間では回避すべきことである」(108頁)。悩みを語ること、自分の弱みをみせることは上下関係を作ってしまうことである。友人の間で対等でなければならぬとする暗黙のルールが厳格に働いているから、親しい相手であっても真にやすらぐことは難しくなっている。「人格崇拜」道徳の高次化の副作用はここにもみられる

わけである。

「聖なる自己」を傷つけてはならないとする規範の嚴格化が進めば進むほど、何らかの形で「心のケア」が必要になってくる。それはたとえ商品であっても購入したい希少資源と化している。カウンセリング・ブームの舞台裏はこのような事情になっている。自己啓発セミナーという場が多く、とりわけ学歴社会に適応して生きてきた若者たちの多くを引き付ける理由はこのようなところからも説明されるのであろう。

(以下は、次号)

## 註

- (1)この目次構成案は、上を書き上げた5月1日時点のもの。このあと下を書き進めていく予定であるが、その完成の暁には変更もありうる。
- (2)下川辺美智子「苦しんでいるのは誰なのか? : コンパッションをめぐるリポリューション」(『現代思想』25巻8号)は次のように述べる。「人は常に苦しむ主体という座からの逸脱への欲望を孕みつつ行動しているように見える。苦しむ立場にある者の味わう全能感の欠如と無秩序の威嚇。これを回避しようとするベクトルは宗教、政治などあらゆる文化のなかに働いている。それ故、議論を展開したり、論文を書いたり読んだりする学問的行為をするときにも、我々は無意識のうちに全能感を求め、苦しむ者の座を対象物に押し付けて自らをそこから移転させようとする。無秩序を言語によって理論の中に固定すること。これこそが学問研究の究極の目的であると、教育や慣習に教え込まれてきたからである。そんななかで、苦しむ者の位置に自身を置いてみようとするのは、不自然な行為であるのかもしれない。しかし、全能感の欠如をひたすら恐れ、無秩序がもたらす苦しみを回避するという動機だけに尽き動かされた学問研究は、それがどんな立派な理論を構築しようとも、結局は学問における全体主義に陥るのではあるまいか? そうならないために我々にはコンパッションの持つ『苦しむ能力』が必要なのである」(204頁)

学問研究には真理の追求という表向きの動機のは

かにもう一つの隠れた動機というものがあって、それは無秩序への嫌悪、全能感の欠如への恐怖だといふのである。そしてそれはどこかで全体主義とつながりうるともいふ。この論点には驚愕する。アレントの言うように「全体主義とは『作り上げた世界を外界から隔絶することによって安定する』ものである」としたら、どういうことになるのだろうか。新しい学問分野について構想するという場合、肝に銘じておくべきだろう。学問が体系性を備えていなければならぬと神経症的に強調する主張があるなら、そのこと自体に落とし穴があるのかもしれないということ。アレントおよびその思想の発掘者、下川辺の眼力の鋭さに敬意を表したい。

- (3)ケア学という学問は主に福祉分野の研究者が提唱しているものだが、考えようによっては社会臨床学とかなり近いようにも思われる。広井良典『ケア学』(医学書院)などを参照。
- (4)感情労働という言い方に対して感情的に反発して、そのようなものではない「本当の感情」「天然の感情」「自然の感情」があるとする対抗の仕方はどこまで有効であろうか。この問いに対して社会学には否定的な回答をする論者が多いようである。全ては文化的に構築されたものだというスタンスをとりたがる学問の性格がそうさせてしまうのである。社会臨床学ではどうであろうか。何も社会学のまねをしなくてもいいのではないかと最近を考えている。
- (5)アウスポイトウングというドイツ語は「開発=搾取」という二つの意味を有しているといふ。このことをマルクスの市民社会論的視点からの解説を通して示したのは内田義彦である。資本主義的生産様式には開発の面と搾取の面の双方がある。同じようにセラピー文化にも開発の面と搾取の面の双方があるのではないだろうか。

## 文献

- 土井隆義 2000「いじめ問題をめぐる二つのまなざし : 『心の教育』はいじめ問題を解決するか」(大村英昭編

- 『臨床社会学を学ぶ人のために』(世界思想社)
- 広井良典 2000『ケア学』(医学書院)
- ホックシールド.A.R 1983=2000石川准・室伏亜希訳  
『管理される心：感情が商品になるとき』(世界思想社)
- 井上芳保 2000「牧人=司祭型のカウンセリングを超えて：よりよい社会臨床のための試論」(『現代思想』28巻9号)
- 森真一 2000『自己コントロールの檻：感情マネジメント社会の現実』(講談社メチエ)
- 大平健 1995『やさしさの精神病理』(岩波新書)
- 小沢牧子 2000「カウンセリングの歴史と原理」(『カウンセリング・幻想と現実』上巻 現代書館)
- 下川辺美智子 1997「苦しんでいるのは誰なのか？：コンパッションをめぐるリポリューション」(『現代思想』25巻8号)
- 鷺田清一 1999『「聴く」こと力：臨床哲学試論』(TBSブリタニカ)

## 障害者からみた統合教育

竹嶋龍雄

### はじめに

私は別稿「統合教育と権力関係に関する一考察」において、教師の統合教育実践レポートを権力関係という視点から検討した。本稿はその続稿となるもので、生徒の側から自らが受けてきた統合教育が如何なるものであったか、学校あるいは教師が障害者をどのようにみているかを検討した。十分とは言えないが、権力関係を軸においたものである。“子どもの権利条約の趣旨を徹底する研究会”(2000)は統合教育への制度面からのアプローチを行った。両面からのアプローチが相乗効果をなせば、統合教育実践はより深まっていくものと考えている。

つい最近、「21世紀の特殊教育のあり方に関する調査研究協力会議」が中間報告を行ったと報道された(毎日新聞、2000年11月7日付け)。制度面での緩和を行い、障害者の普通学校への就学の道を広げたというものらしい。統合教育が制度面で確実な一歩を踏み出せるのか否か、課題は多いようだ。そのような状況下で本稿は書かれた(註)。ここでは、現在私が勤務している障害児学校に在籍する二人の作文、日記を検討の中心にした。二人は小・中学校時代、形態は違うが統合教育をうけてきた生徒たちである。

以下、権力を視点に置きながら、いまの統合教育あるいは普通学校そのものがかかえる課題を少しでも明らかにしたい。

### 二人の場合

以下、二人の作文、日記を示しながら、私の理解を述べる。

#### 《A君の場合》

本校高等部2年のとき、A君は教師に誘われ、校内にある障害者解放研究会(以下、障解研)に入った。そこで、今までのことを振り返り、今後、自分としてどのような生き方をせねばならないのかを考えるようになった。

夏休みにあった校内での障解研合宿(本校障解研生徒対象)で、今までを振り返り次のようなレポートを書いた。

一年生(普通中学校一年生一註；竹嶋)のとき、テレビを見てひるきゅうけいでトイレでぼくのことをガイジヤといいました。ぼくははらがたってけりました。ばかにしとるとおもいました。ガイジとゆうことばはしらないけど、こえでばかにしていることばだとわかりました。ばかにされているのがわかってきました。なにもいいませんでした。先生がぼくに「なにないとるんや」といいました。「ガイジヤといわれてなきました」。ガイジヤといったやつはだれかとききました。あのひとですとこたえました。先生はB君をおこりました。ぼくにB君はあやまりました。ぼくはなきながらいよいよいいました。そのあとB君とはなしませんでした。ぼくのほうからB君にはなしかけることはなかったし、B君もぼくにはなすことはなかった。

一年生ぜんいんでみたテレビはなんだったかおぼえていません。テレビのあと、先生は「みんなにしてもらいたいことがあります。A君はようごがっきゅうにいます」といいました。なんでゆうんやとおもいはずかしくなりました。ようごがっきゅうはべんきょうができないひとがいくところだとおもっていました。ぼくがべんきょうできないといわれているとゆうことがはずかしいとおもった。いま

でもはずかしいとおもっています。ようごがっこうのせいとだとひとにはなすこともできません。ペンきょうできないのははずかしくありません、そういえるようになりたいです。

A君は(障解研担当)教師とのやりとりの中で約2時間かけて原稿を書いた。そこには私も同席していた。A君の気持ちを引き出そうと教師はいろいろな質問を行ったり、A君の発言に対する説明を求めた。教師の働きかけたは教師の“ある思感”による誘導であるが、A君の姿を非連続のコマとして浮き彫りにした。コマとコマをつなぎ、教師は連続的文章を書かそうとする。沈黙が別なことばに変えられ、非連続のことばが連続のことばに変えられる。沈黙とまとまらない単語の羅列を教師が一定の形態にまとめ、本人に確認し、「じゃあ、そのことを書いてみよう」と道筋を示す。A君は「はい」と言って単語を並べる。そうやって一つの文章が仕上がる。

沈黙への解釈、単語の並べ替え、単語と単語の間を埋めることばには働きかける教師の考え方が入り込んでいる。教師の解釈と誘導によってA君の思いは再構成され、明確化された。明確化の裏には隠された教師の考え方があることを見落としてはならない。はっきりしているのは、A君の発言に依拠しながら、沈黙に解釈をくわえながら、文章を作ったという事実である。

できあがった文章を前にして、「これでいいの」とA君に聞く。A君は「はい、いいです」と答える。書かせたい文章の体裁は整っているが、これで完了した、ということではない。この文章がA君の抱えているものを解きほぐし、A君の生き方を具体的に展望したものになっているかといえそうではない。あくまでも文章は出発点であって、これからの取り組み課題を一定程度明らかにしたものでしかない。

以下、A君の書いた文章とそれにかかわった教師の思感について簡単に検討しておきたい。

(1) A君の書いた文章から検討していく。“「ガイジ」と言われ、ばかにされていると思ったが何も言い返せず、泣いていたこと”、“発言をした生徒を叱った

教師”、“「養護学級＝勉強のできない人がいくところ」とA君は思っていたこと”、“みんなの前で養護学級にいると話されてA君は恥ずかしい思いをしたこと”、などが書かれている。

「ガイジ」と発言した生徒の思いはわからないが、それをばかにされていることとして感じたA君は泣いた。「ガイジ」(＝障害者蔑視)ということばが、その意味を知らないA君に何らかの精神的打撃を与えるものとして作用したようである。教師によって叱られた生徒はあやまり、A君は泣きながら「いいよ」と言っている。その後、両者は互いにこえかけの一つもしていない。発言をした生徒の「あやまり」が実質的「あやまり」になっておらず、A君の「いいよ」が実質的「いいよ」になっていないことを推測させる。単なる形式的な「ごめんーいいよ」という関係に終わっており、事態の重要性を認識していない状況にあったと考える。「ガイジ」発言にかかわった教師はどのような認識のもとにどのような話をしたのか、疑問がわく。

さらに「養護学級＝勉強のできない人がいくところ」とA君に思わせ、「養護学級にいることが恥ずかしい」と感じさせていたものは何か。

一定の価値観・倫理観などを生徒にもたせる場として組織され、制度化された学校では、「資本主義的な産業経済システムや国家による政治支配システムと深くつながっている」(岡村、1986)知の伝達とその安定性、学校システムへの「《従順な》身体」(フーコー、1975)が求められている。それを効率的に行うために学校内分離が制度的に指向され、その実体化として障害児学級(養護学級)設置がなされた。ここでは「勉強ができない」＝“知の伝達の非効率性”という理由でA君は学校内分離の対象となった。

学校内分離の権力は、「勉強ができない」ことを徹底してA君に内面化(身体化)させ、分離の権力に従属させてきた。知から排除された者への生徒の評価のまなざしはA君自身が自分を見るまなざしでもあり、「勉強のできない」自分という評価を自分に下すものでもある。勉強ができないことへの教師の評価はA君の「生きる姿」を歪めるものでもあった。知から排除され、知をもって分離されることは、知によって成立し

ている空間にいるA君にとって「恥ずかしい」という心的活動を生じさせる権力として作用する。言い換えれば、「文部省の出店」であり「発達強制空間」(古川、1986)である学校は、知の体系からこぼれる生徒を一方所に収容し、自尊感情を砕き、劣等感を抱かせることで学校内の暴力的支配の安定をはかる。これらのことは分離・別学体制の維持・存続と密接な関係にあるわけだから、A君が障害児学校に入ってきて同様な心的様相を示すのは当然だろう。

80年代はじめの状況を小沢(1990)は次のように述べているが、根本的には現在も同じ状況にあると考える。

「近代学校は最初から健常者だけの学校でした。それを『常識』とした、大多数の教師・子どもは育ってきました。ですから、学校の中に障害者がいることはおかしいと感じるわけで、教育するとすれば、障害者別の学校を作るという発想になります。また、こうした『健常者の学校』の側では、障害者を見えない人間とする文化の性格が支配的でありました。別学の制度と文化は、健常者の側に別々に暮らすという生活意識を醸成した、といえましょう」。

(2)次に教師の思感について述べる。ここではA君が所属する障解研にかかわる教師の思感である。A君の文章にはかかっている教師の具体的な声はない。文章の背景には教師の声がある。

障解研にかかわる教師の思想には共通するものがあるようだ。「青い芝の会」的思想とどこかで、何らかの形で接点をもっているということである。青い芝の会の思想的出発点は大仏空の思想にあると私は理解している。では、大仏空は脳性マヒ者の集団に対してどのような思想を提起したのか。そこにふれながら考えてい。

「・・・自己を凝視し、自己を内省し、自己に絶望し、そこから自己を主張すればいい。叫ぶがいい。叫びは大いなるものほどいい。自己の本質がわからぬものになぜ敵の本質が見抜けようか。自分が脳性麻痺者であることを自覚してこそ、己れの煩惱の奥底にうごめく地獄を見極めてこそ、差別する者、貶む者の本質が判る。とするならば、何を嘆くことがあろう。脳性

麻痺者は脳性麻痺者に徹し、健全なる国家・社会、健全なる人間を問い返し、告発するがいい。脳性麻痺者というあるがままの、人間実在の姿をまずさらけ出すことからすべての変革ははじめるのだ」と大仏空は説く(岡村、1988)。

A君の書いた文章が、何故、あのような書き方になっていたのか、大仏空の考え方を重ねてみれば理解できる。自己への凝視、自己への振り返り、自己への絶望、周囲の差別性とそれへの抗議などを經由しながら、障害者であることを自覚し、勉強ができないことに引け目を感じる障害者ではなく、あるがままを生きるA君の姿を求める、という教師の思感が文章から読みとれる。だから最後に「べんきょうできないのは恥ずかしくありません、そういうようになりたいです」という一文を入れさせたのであろう。

このように理解してみれば、A君の過去、現在をかりて、教師の思いを表現した文章であり、A君は教師の観念的世界の中で教師の思うように操作された、といえるのかも知れない。最後の一文は教師の観念的理想像の押しつけであったのかも知れない。いずれにしてもA君と教師の間に一定の権力関係があり、そのもとでできた文章である、と考えるべきであろう。

#### 《C君の場合》

現在、高等部1年のC君は小・中学校を普通学級で生活してきた。しかし、中学校2年ぐらいから、不登校になってしまった。原因ははっきりしない。中学校の教師の話は「学校を休むようになり、そのため勉強がわからなくなったことが原因ではないか。プライドの高い彼ですから、勉強がわからなくなることが嫌だったのかも知れません。それで、障害児学級に入って勉強することを勧めたのですが・・・。彼はことわかりました。それからです、ずーっと学校を休むようになったのは」というものであった。障害者がプライドをもつことを否定的に捉えており、勉強のできない障害者には障害児学級への入級が妥当だと安易に考えられている。それは教師のC君に対する善意かも知れない。教師の障害者へのまなざしは“障害者は障害者らしく”という分離された世界へと即座に向くのであ

う。社会一般で行われている善意にみちた「障害者の規格化」である。

従順な障害者、慈悲の対象としての障害者、さらに分離を受容する障害者、その中ではプライドなど存在せず、ただ他の者が決めた規律の中で従順に生活することが要求される。これが障害者に対する権力行使である。そのことを中学校の教師は平然と語っている。

本校に入学してからのことを簡単に述べておく。入学当初、めまいがする、頭がふらつくなどの理由で遅刻したり、欠席することが多かった。学校に来て、机にうつぶせている状態がみられた。給食もほとんど食わず、家でも夕食をとらない日が数日続いた。「自分が衰弱して死ぬかもしれない」というのを聞いて、生への執着がなくなったのか心配した。「食べてほしい？」と聞かれ、いつもなら言い返すのに、そのときは「うん」とこたえた」と母親は語っていた。深夜、明かりもつけずに布団の上にならずと座っているときもあったそうである。

夏休みになり、C君を外に出すことを考えながら、PTCを計画し、カラオケに行ったり、学校で作業したり、いろいろ計画を組んだ。2学期に入り、1学期の状態とかなり違う様相をみせはじめた。2学期の初っぱなから体育祭の練習がはじまる。次に示すのは体育祭が終わってC君が書いてきた日記(私の所属する学級で書かせているもの)である。

がんばった。

小学校よりきつかった。

小学校では時間はかる係をしていたのでテントでパイプイスに座ってはかっている時間が多かったので楽でよかった。

以下、小学校の頃と現在を比較しながら、日記の内容について考えてみたい。

中学校での体育祭には体調が悪くて出ていない。だからC君にとっての体育祭(運動会)といえ、小学校のときと本校での体育祭しかない。

小学校のときの様子はどうだったのかC君に聞いた。予行練習での徒競走のとき、C君だけがみんなよ

りゴールに近いところに立たされ、スタートのピストルが鳴らされた。世間一般では「配慮」といわれる光景である。しかし、C君は走らず、歩いたそうである。「みんなとは違ったところからスタートするのが嫌だった。だから走らなかった」とC君は言う。担任には「嫌だ」と言わなかったそうである。運動会当日は演技・競技にあまり出ず、計時係をしたそう。計時係に何故なったのか、と聞くと最初は「何となく」と言っていたが、何回か尋ねると「『先生がしろ』といった」と答えた。演技・競技の効率性、見栄えなどいろいろあつてのことであろうが、演技・競技からの排除の様子が伺える。

C君にとって、教師の配慮(隠蔽された排除)が如何に屈辱的で嫌なものであったか、私は推察する。脳性マヒによって歩行が少しスムーズではなく、補装具をつけていた。そのことに対する教師の憶測と勝手な判断(=特別視)にC君はさらされていたのだろう。

本校ではじめての予行練習を終えて、C君は次のような日記を書いている。

体育祭の練習をやった。

死ぬ程暑った。

疲れた—————あ。

最後まで書けません。

申しわけありません。

暑い中、徒競走、集団演技などの練習をした。徒競走などではみんなが同じスタートラインに並び、ピストルの合図で一斉に走る。形相を変え、身体を左右に揺らしながら力を込めて走る。途中、つまずいて転がるが、すぐ起きて最後まで走りきる。体育祭で出場する種目すべてをC君はやりきった。補装具をつけていなかったのは足への負担も大きかったであろう。C君にとって、今までにない運動量のはず。「大丈夫か」と聞くと「大丈夫です」とこたえ、練習を続けた。確かに疲れたはずである。普段であれば、日陰に入って休憩したいというのだがそんな様子は全くみられなかった。「暑くてしんどい(「死ぬ程暑った」)。日陰に入り

たい。(自分にとって)つらい暑さの中、練習をやりきった。本当に疲れた。でも自分は本当に「がんばった」。”そういったことがC君の実感だったのだろう。「疲れた——あ」という書き方にC君の気持ちが表現されていると私は理解する。この表現には二つの側面があり、身体的側面から考えれば、上述のようになる。もう一つの側面として精神的なものがある。それにかかわって、以下述べる。

周囲から見られることに“過敏”であると思わせることがあった。教師同士が相談事をしていて、ふと視線がC君と合うと、「何かぼくに用事でもあるんですか」と言って教師の方によってくる。「別にあなたのことを話していたんではない」と言っても、「ぼくの方を見ていたじゃあないですか」と言う。宿泊学習での入浴のとき、キョロキョロ周囲に目をやりながらなかなか服を脱がない。脱衣場に誰もいなくなって、急いで服を脱ぎ、早足で浴槽に入る。歪んだ足があらわになる。みんなが浴槽から出た後、自分が出る。それは生活史(権力関係)の中で作りだしてきたC君の周囲への構え方なのであろう。それをここでは“障害=身体隠し”と呼んでおく。

こんな様子を見せるC君が体育祭当日を迎えた。周囲の視線に過敏で、障害=身体隠しに身をちぢめていたC君が運動会でゆがんだ身体をさらした。ゆがんだ身体を動かすことの“きつさ”はあるだろうが、身体隠しと周囲からの視線への過敏さから一歩踏み出すことの方が精神的に“きつかった”であろう。それをやりきったC君は「がんばった」と自らを評価し、文章化したのであろう。では、「…楽でよかった」という表現をどのようにみればよいのか。小学校時代の様子を書いた文章から考えれば、それは、上との関係の中で簡単に説明のつくことである。つまり、「楽でよかった」のは、障害=身体隠しの意識で過敏にならなくてもよかった係になったからであり、そういう係でなく、さまざまな種目に出ていたら「楽でよかった」とは書かないであろう。おそらく、運動会を休んでいたであろう。身体隠しと周囲の視線への過敏さは、C君の中では同じ心的活動の現れである。

障害=身体隠しにかかわって、再度小学校時代のこ

とを母親の話をもとに簡単にみてみたい。母親が今でも忘れられない悔しさとして私に語ったことがある。「テストで100点をとったとき、担任がクラスの子どもに『補装具をつけているC君でも100点をとった。みんなもがんばれ』と言ったことをC君から聞いた。そんな言われ方に悔しさを覚えた」こと、さらに「C君はプライドだけは高い」と担任から直接言われたことなど、障害者排除の思想を伺わせる発言である。当然ながら、教師とC君の関係、クラスの子どもとC君の関係は決してよいものでなかったであろう。実際にC君へのいじめもあったそうである。母親の話に従えば、C君と周囲の者(教師を含む)との関係は、同化と排除を基本とする権力関係にあったことが容易に理解できる。微細な権力作用がC君の日常性を支配していた。その権力作用がC君の行為を制限していたとするなら、あるいは他との関係性に作用していたとするなら、しかもそれが障害に起因していたとするならば、C君の意識の中に障害を否定的に捉え、障害と自分自身の間距離を置く心的活動が生じても不思議ではない。それが障害=身体隠しの現象として生起したと考えることは可能である。このことについては、後半でさらに考察する。

### 生徒からみた統合教育(普通学校)

A君の文章、C君の日記を中心にしながら、本校入学以前、そして入学後の様子を考えてきた。その中で、小・中学校の教師のかかえている問題性が若干明らかになった。そこで、以下、生徒のことはに依拠しながら、統合教育について整理したい。

(1)まず、その前に予備的整理をしておく。教師と生徒の間には知を媒介にした権力関係が存在する。学校では知の蓄積とその操作術にたけている特権的生徒の育成を行い、その反対に知の体系になじまない生徒を学校内分離(教育的排除)の対象として位置づけるという権力が作用している。分離(教育的排除)の対象とされた生徒は教室の中で知の伝達過程を沈黙し、頭を下げて聞かねばならない。わかるような知の伝達はされず、ただ板書されたことを機械的にノートに書き写

すだけである。妨害行為を行おうものなら何らかの制裁が加えられる。あるいは、生徒によっては、教室内、教室外で、知の密度に差こそあれ、個別指導と称した知への従順化がはかられる。教師(学校)は知の序列化を指向し、知による生徒の細分化を行なう。教室(学校)は知の網の目によって構成され、権力一知の関係が成立しているところである。

ここで、権力一知の関係を形成するカリキュラムについて、長い引用になるが示しておく。

「カリキュラムは、当然のことではあるが一定の時代と社会の被制約性の中にあり、諸々の文化的、経済的、政治的な条件、要請、拘束の下において構成されている……。確かにカリキュラムは客観的な知識や普遍的な文化(例えば個々の教科内容として示されるような事実と法則)と無関係にあるのではない。だれもがどこでも、いつでも認めざるを得ないような事実や法則といったものを媒介としつつ、学習者の学習活動と経験が組織されるのである。その面では、カリキュラムは客観性や普遍性、そしてさらにいえば価値的な平等性やイデオロギー的中立性に身を寄せてはいない。しかし、カリキュラムがまったくもって何の価値性やイデオロギー性をも内在させ得ないかといえば、そうではないだろう。現実のカリキュラムは現在の公教育制度下の学校において、つまり、現代の国家が組織し管理する学校の制度と体制の下にある学校において、構成され展開されているのである」(長尾、1990)。

学校で教師が生徒に伝達する知は、時代と社会に適合した倫理性・価値性あるいはイデオロギー性をおびたものであり、資本主義的・国家的支配体制維持という要素を含んでいる。堀(1994)はそのことを「教育内容が労働商品形成のための近代的な知識・技術・道徳体系として基準化されているということは、被教育者がこのような教育内容を学習しうる能力を有しているということが前提とされているということである」と表現している。そうしてみると、障害者を授業の中で「お客さん」にし、教室内分離・排除する可能性を「客観的な知識や普遍的な文化」によって構成されているとするカリキュラムがもっていると考えることができ

る。

(2)たとえば、「ガイジ」ということばが障害者に向けられる普通学校とはどんな学校なのか。「ガイジ」といわれて、意味はわからないがばかにされた”と思ったA君。「ガイジ」発言をしたB君はそのことばのもつ意味をわかっていたはず。知っている者が知らない者に浴びせたことばは権力関係の表出であり、A君が泣いたことによって、「ガイジ」が排除のことばとして意味をもった。B君の何らかの意図は果たされた。結果として、A君は自分が「ガイジ」と呼ばれ、社会的排除の対象であることを知った。「排除現象が、ふだん、われわれが気づかない形で、いたるところに起こり、維持されている」と山田・好井(1991)は述べているが、B君の意図の根源のところ、排除の思想はB君の障害者への見方を構成していたと考えることができる。微細な排除権力にB君の日常性は支配されていたといえるだろう。排除の微細な権力関係を維持することによって、今の学校が成立しているとする、障害者を排除する身体は日常的に学校生活において醸成されていることになるだろう。その空間の中に排除されるA君と排除のことばをいうB君がおり、その関係を作りだしている教師がいる、ということになる。

学校という制度的組織がもつ排除の構造は、近代学校制度成立以降のことを考えれば明らかである。たとえば、志水(1996)は「学校＝同化と排除の文化的装置」と規定し、「大多数の人々の同質化とその内部(ウチ)での序列化を果たすかたわら、返す刀で、外部(ソト)との境界線を保つために、『異質性』を作り上げ、それを外部化していった。すなわち、学歴にもとづく身分的秩序を維持・存続させていくために、少数の者を学校の規範にそぐわない者として脱落させていったのである」と述べている。それは「現代の国家が組織し管理する学校の制度と体制の下にある学校において、構成され展開」される、時代や社会に適合する価値性とイデオロギー性に起因する。別な言い方をすれば、時代や社会に従属する価値性とイデオロギー性による「規律・訓練」をもとにしながら、規格化の権力が行使され、権力一知の関係によって支配されているのが学校である、ということである。さらに言えば、同化する

身体は誰かを排除する身体でもあり、その両面を互いに補強し合うシステムが制度化・組織化された学校場で作動している、とみることもできる。

“養護学級＝勉強のできない人がいくところ”とA君が思っていたのは権力一知の関係が学校を支配していた証拠である。それとともに考えておきたいのが規格化の権力である。“勉強ができない”自分であることを徹底的に認識させるのが養護学級ならば、そこに在籍するA君は“勉強ができない”という自己像を自らの内につくりあげ、そういう人間として振る舞うようになる。そのことは、自らが自らを“勉強できない”自分として規格化してしまうことによって、外部に対して硬直した身体をもつことでもある。それに連なって、他との関係性の問題も浮上する。A君とB君との関係は歪められており、表層的には養護学級と普通学級を貫く権力関係の中で生じた「ガイジ」発言、形式的な謝罪と承諾などがあるが、せめぎ合い、つながり合うという点で根源的な問題を今の学校は視野に入れていないように考える。つまり、A君もB君も学校のもっている倫理性・価値性・イデオロギー性を身体化し、せめぎ合うことから身を引き、つながり合うことを志向する感覚を破壊する多様な装置を身体に内在化させている、ということである。

(3)C君にかかわってだが、ここでは“身体隠し”のことについて考えておきたい。身体隠しは障害隠しであった。なぜ、障害、つまり身体を隠さねばならなかったのか。厳密にはC君の発言によらねばならない。ここでは、多くを語らないC君の姿にこそ、問われるべき学校の姿が隠されているものと考え、検討する。

浜田(1992)は、自分自身の中にある価値観をになわされた「他者」(つまり「内なる他者」)が自分自身の対話者として常に自我の中に現存し、さらに「内なる他者」が障害者の心性構造と関係あるものとして、障害者が障害ゆえに羞恥(ここでは身体隠しにつながるものと理解しておく)を感じるのは、障害を蔑み、差別する世界の目が自分自身の中に浸み込んでいるからである、と述べている。これは「監獄の誕生」(フーコー、1975)に記述されている囚人への権力作用を想

起させる論述である。浜田の考えを借用しながら若干の考察を行う。

ある価値観をになわされた「内なる他者」は対話者として自己内に深く住み着き、自分自身の感情、言動あるいは対人関係などに影響を与える。それは自分が被ってきた社会的処遇(権力関係)と無関係ではない。「内なる他者」にかぶせられる価値観は、日常に働く微細な権力とともに関係性を通して個人の内部に入り込んでくる。障害者であるが故に他の者の空間と異なった空間への強制的な引き離しであったり、障害者の人格を否定的にみる発言であったり、“障害者でもこれだけがんばっているのだから・・・”という権力一知の関係維持のための素材化、言い換えれば障害者は他の者より低位にあるという考え方の表出化、「異質性」の強調化であったりする。また、障害者への排他性と「内なる他者」が繰り返し絡んでいったとき、障害者は外部に対して硬直した自己像をつくりあげていく。同時にそれは決して外に開かれぬ、障害を隠すという意識を自らの内につくりあげることにもなる。外部との断絶を自らが行うのである。その例がC君の場合の“身体隠し”であったと理解してもよいのではないかと考える。身体隠しはそれに見合ったC君の行動をつくりだし、C君の日常に組み込まれていく。身体隠しは表層的には障害隠しであるが、このように考えてくると、本来の自分—あるがままのCという個人—を非本来的な自分に強引に変えていく精神活動であるといえる。本来の自分を崩壊させ、自分の居場所を失わせてしまう「勲」的活動を深層においてC君は受け入れているように思われる。障害とCという個人とが“あるがまま”につながれていない、そこに生じている“存在することへの不安”がC君の心性を暴力的に支配しているように考える。

ところで、学校では“みんなよりゴールに近いところに立たせた”教師、“プライドの高い彼”“プライドだけは高い”と言った教師、あるいは“補装具をつけているC君でも100点をとったのだから、みんなもがんばれ”と言った教師、などとの関係の中でC君は生活していた。教師とC君の間を貫く権力行使の様子が読み取れる。また、「プライドの高い彼ですから、勉強が

わからなくなることが嫌だったのかも知れません。それで、障害児学級に入って勉強することを勧めたのですが・・・彼はことわりました。それからです、ずーっと学校を休むようになったのは」という内容にみられる教師によるC君の人格否定、そしてC君との関係拒否と障害児学級への学校内分離の発想、特にその発想には“C君のために”という「勤」的姿勢—C君の本来性実現ではなく、教師の都合によるC君の居場所剥奪—が読み取れる。C君の地平に立ちきれない教師の本心をかいま見る。普通学級からの排除を確信し、その暴力性に抗しきれず、C君は学校での自分の居場所を失ったのである。

学校は規律・訓練を基本に据えながら、権力—知の関係維持、規格化の権力行使などによって構成され、至る所で微細な権力作用が働いている場である。学校経営、学級運営、授業、特別活動など、どこをみても権力関係が作用している。生徒同士の関係においても然りである。制度化・組織化された学校における権力は「服従させられ訓練される身体を、《従順な》身体を造り出す」(フーコー、1975)のものであり、そこでは権力を生徒個々に内面化し、自らが自らに権力を行使するように仕組まれている。そうだとすれば、学校は身体隠しにみられように「勤」的側面を深層にもっていると考えることができる。

## おわりに

私は別稿において、次の五点を整理した。(1)「権力—知」「規律(規格化)」によって意図的に分けられ、それを前提として統合教育が成立している。(2)統合教育は「同化と排除の装置」を隠蔽している。(3)統合教育を実践する教師の身体は権力作用の場である。(4)障害者への配慮は排除と同質である。(5)統合教育は子どもたちの相互主体的関係を統制する権力をもっている。本稿においても、この五点は確認できた。それらを少し深める形で導き出されたものを以下に述べる。大きく次の二点にまとめられる。

(ア)学校がもっている倫理性・価値性・イデオロギー性を身体化し、せめぎ合うことから身を引き、つ

ながり合うことを志向する感覚を破壊する多様な装置を障害者も健常者も身体に内在化させている。

(イ)学校は生徒個々に権力を内面化し、自らが自らに権力を行使するように仕組まれており、その深層に「勤」的要素を作り出している。ここでの「勤」的要素とは、本来的自分を崩壊させ、自分の居場所を失わせてしまうような機能を指す。

統合教育は上記のような状況(学校)下で実践されている。これはただ単に学校だけの課題ではなく、私たちが生活する空間、大きく言えば社会構造・体制の問題とも関連する。身近なところで「自分たちの対他関係のあり方を見なおし、生きなおす姿勢を保つ」(浜田、1992)ことが求められる。しかし、そのことを妨げようとする微細な権力作用が私たちの日常に働いていることを見落としてはならない。

## 参考・引用文献

- フーコー、M. 1975：監獄の誕生—監視と処罰—。邦訳p.143.新潮社。
- 古川清治1986：一步前へ進むために—ゆりもどしの時代のなかで—。(岡村達雄・古川清治編著：養護学校義務化以降—共生からの問い—。p.10.p.20.柘植書房。)
- 堀正嗣1994：障害児教育のパラダイム転換—統合教育への理論的研究—。p.455.柘植書房。
- 浜田寿美男1992：「私」というものなりたち。pp.301-303.ミネルヴァ書房。
- 子どもの権利条約の趣旨を徹底する研究会編2000：統合教育へ—歩踏み出す。現代書館。
- 長尾彰夫1990：カリキュラム編成と学校文化。(長尾彰夫・池田寛編：学校文化—深層へのパースペクティブ—。pp.92-93.東信堂。)
- 小沢有作1990：部落解放教育論—近代学校を問いなおす—。p.340.社会評論社。
- 志水宏吉1996：学校=同化と排除の文化装置—被差別部落民の経験から。(井上俊他編集：こどもと教育の社会学。pp.67-68.岩波書店。)
- 竹嶋龍雄・船津守久：統合教育と権力関係に関する一

考察. 2000年9月29日受理. 広島大学. 印刷中.

岡村青1988: 脳性マヒ者と生きる—大仏空の生涯—, pp.189-190.三一書房.

岡村達雄1986: 「義務化」以降—〈共生〉から学校を考える. (岡村達雄・古川清治編著: 養護学校義務化以降—共生からの問い—. p.65. 柘植書房. )

山田富秋・好井裕明1991: エスノメソドロジーの冒険. (山田富秋・好井裕明: 排除と差別のエスノメソドロジー—[いま—ここ]の権力作用を解説する. p.67. 新曜社. )

(註)本稿は2000年11月に書いたものである。

## 最近の知能研究の動向 —「社会適応」と「生理還元」の相補的關係—

山下恒男(茨城大学)

### はじめに

知能研究をめぐる比較的最近の話題としては、R.J. ハーンスタインとC.マレーによる『ベル曲線』(1994)<sup>1)</sup> という845ページもの大冊の本の出版があげられるかもしれない。彼らはアメリカ社会において、貧しく家族数の多い家庭に住む者の知能指数が平均より低く、一方上層階級の人々のIQは高く、子どもの数が少ないという。そして、IQが高い男女がより多くの子どもを持つようにし、IQが低い男女が子どもの数を少なくするような政治的措置をとるべきだという。彼らは社会政策や福祉政策にも介入しようとしたのである。

しかし、このような主張そのものは特に新味のあるものではない。むしろ、脳研究や遺伝子研究にともない、『知能の改良』という一部の人の長年の夢がいよいよ現実化してきたという「幻想」の方が検討に値するのかもしれない。

優生学(Eugenics)の創始者として知られるF.ゴルトンは『人間能力之研究』(Inquiries into Human Faculty and its Development)が発表される1883年頃までに「知能」というものを生まれつきの一般的、認知的能力と考え、それは人間の感覚的鋭敏さ、識別力や視覚あるいは聴覚刺激に対する反応時間等によって測定されると考えた。つまり、一般的な精神能力の背後にある生物学的基礎を仮定したのである。

かのA.R.ジェンセンは、『人間知能百科事典』(1994)<sup>2)</sup>のゴルトンの項を執筆しているが、ゴルトンは教育と職業に基づく能力レベルと彼の行った感覚—運動のテストバッテリーによる測定結果との間に非常にわずかな違いしか見出せなかったのに失望して、研究の継続を断念したという。しかし、ジェンセンはゴルトンの仮説は正しかったのだが、分散分析や重回帰

などの統計的手法が当時まだ開発されていなかったゆえの結果で、今日では統計的な有意差を見出し得ると主張している。

19世紀の後半から20世紀初頭にかけては、ゴルトンやJ.M.キャッテル等による知能の生理学的研究が盛んな時期であった。

しかし、知能テストの創始者はA.ビネーであると考えられている。彼は「社会適応」という考え方を軸にして実用的な知能テストの作成に成功した。以後、商品化された知能テストのほとんどがこの流れにそっている。その一方で知能の生理学的研究は、イギリスのH.J.アイゼンク等のいわゆる「遺伝論者」を中心として100年以上の間、根強く続けられてきている。

ところが、近年脳研究や遺伝子研究の「進歩」にともなって、知能研究はかつて不可能と思われた「生理還元」の領域に入りつつあるかに見える。そしてそこでは生理学者や生化学者が研究の中心になり、神経心理学者を名乗る一部を除いて、心理学者はお払い箱になるのではないかとさえ思われる。

しかし、生理学的研究の場でも、現実には昔ながらのペーパーテストも使われているし、今後も使われることだろう。「生理還元」はそれ自体で完結することは方法論的にも不可能なのであり、個人の行動を社会的文脈の中で判断し、評価する従来からの心理学的な方法の助けなしには意味を持たない。

そういう意味で、従来からの心理学的方法は(したがって、それに対する批判も)依然として有効なのである。本稿ではそのことについて論述したい。

### 1.21世紀の知能評価

J.D.マタラッチオは雑誌『アメリカン・サイコロジスト』の中の論文で、21世紀の心理テストを予測して

いる<sup>3)</sup>。そこで扱われているのは心理テスト一般ではあるが、知能テストが中心となっている。

彼は論文の中で近年の生理学的研究の成果について言及している。そこでは、ビネーやD.ウエクスラーなどの伝統的な知能テストの得点が、次のような様々な生物学的指標と統計的に有意な相関があるということが明らかにされているという。

- (a)脳波(EEG)記録から得られる平均誘発電位(AEP)に見られる個人差
- (b)弁別や選択などの反応時間(RT)の個人差
- (c)点検時間(inspection times)の変動
- (d)個人に特有のRTや生理学的測度にみられる試行間、個人内の振幅(oscillations)と変動(例えば標準偏差)

さらに、「初期の研究の結果は神経伝達速度とブドウ糖が脳の中で新陳代謝される割合もまた、伝統的なIQ測度の諸得点と相関しているということを示唆している」と述べている。

ウエクスラーのIQとの相関関係を見いだした研究として、彼はまずD.E.ヘンドリックソン(1982)のそれをあげる。ヘンドリックソンが用いたのは脳波記録から得られたAEPで、WAISのIQと被験者が認知的課題をこなしている時のAEPの分散等との間に高い相関が見られたという。

もう一つの例は、最近(と言っても1992年頃)のT.E.リード&A.R.ジェンセン(印刷中)によるもので、RAPMテスト(Raven Advanced Progressive Matrices test)のIQと視覚刺激の呈示に伴う大脳の平均誘発電位との間の関係を報告している。

マタラッチオは最初このような研究に懐疑的だったが、技術の進歩に伴って、多くの知見が得られると期待するようになったという。

私はそのような改良が皮質機能の情報処理や関連する諸側面についての神経心理学的、神経化学的、神経分子的諸測度の新しい開発からもたらされると期待している。そして、それは現在の陽電子放出撮

影法(PET)の後継物のような脳画像化技法の進歩した新しいシステムから得られる洞察からももたらされよう。

そして、彼はR.J.ヘイヤー等(1988)によるPETを用いたパイロット研究を紹介するが、そこでは、脳内のブドウ糖代謝率とRAPMテストでの抽象的知能の測度の間の有意な負の相関を報告している。これはテストで高得点を取った者はテストの課題に答えている間、最少の脳エネルギーしか消費していないことを意味する。

なぜこのようなことが言えるかということ、ビデオゲームの『テトリス』を使った実験で、この複雑な学習課題を4~8週間続けた後では、スキルの進歩が見られた一方、そこでのブドウ糖代謝率は減少したから、なのだという。

次に彼は、「認知心理学と新しい知能テスト」にふれる。今後もスピアマンの一般知能を反映したビネーやウエクスラータイプの個々のアイテムの重要性は残り続けるだろうが、と前置きしたうえで、最近の認知心理学、情報処理、発達心理学の進展にも期待を寄せる。

特にJ.B.キャロル、E.ハント、R.J.スターンバーグ等の研究者の名を挙げているが、それは彼らが一次的な単純な精神過程だけでなく、推論、理解力、解釈力のような人間の複雑な認知的スキルについても研究する技法を開発しているからである、という。とりわけ、スターンバーグに対する期待は高い。それは、実は「知能と生涯学習」という新しいテーマが登場しているということと関連しているのである<sup>4)</sup>。これについては本稿の趣旨とは少しそれる部分があるので、別の機会に譲りたい。

マタラッチオはまた、近い将来、まったく新しい神経心理学的テストバッテリーが出来るだろうという。それらは次のようなアイテムから構成されている。

- (a)異なる感覚モダリティを通じて情報を受容する効率
- (b)即座の貯蔵でその情報を保持する能力(注意や集中の能力)

(c)その情報を処理する効率

(d)呈示されたアイテムへの反応を達成するために要求される言語的あるいは運動操作を実行する能力

また、彼の「知能の生理学的尺度」についての叙述から見えてくることは、それが脳波を用いた研究からPET等の新しい技術へと移行してゆくことである。この論文が書かれた当時、後述するPETやMRIを用いた心理学的研究はまだ多くはなかったのである。

しかし、知能の生理学的研究を重視しているかに見えるマタラッチオは従来からの伝統的知能テスト、例えばビネーやウエクスラーの尺度、それにSAT<sup>5)</sup>などの意義も認めているし、その改良も期待している。彼はこれらのテストが英語以外の言語(例えばスペイン語やヴェトナム語)などでも実施されることを期待する。この背景にはいわゆる‘マイノリティー’人口の増加が意識されているのは言うまでもない。

さらには、QOL(Quality of Life)の概念にも関心を示しつつ、「高齢者社会」への対応を強調する。彼は、「次世紀の前半にクオリティー・オブ・ライフに関連した適応行動についての次世代のよりよい尺度が広範に使われるようになることを予測する」とも述べている。

彼が言う適応行動とは、「毎日の生活で重要な自己マネジメントの能力、例えば、コーヒーをカップに注ぐ、砂糖の包みを開ける、自分の健康を維持する、服を着る、知人とのコミュニケーション、調理、電話をかける、メニューを読む、歩く、バスに乗る、車を運転する、自分のお金の管理、社会化、仕事への復帰、余暇活動への参加等々」である。そして、そのようなより良い、適応行動及びQOLの尺度に近い将来開発されることを予測している。彼が、このような尺度によって測定されることを想定しているのは、高齢者や幼児だけでなく、重篤な身体的損傷や脳の損傷を受けた人たちである。

つまり、繰り返すが、マタラッチオは生理学的研究だけでなく、社会的適応をも重視しているのである。これは彼の個人的な志向ではなく、「社会的適応」との対応付けを欠いた「生理学的研究」はそれ自体では成立

しないことを示していると解するべきであろう。

## 2.「知能をめぐる心理学」

日本心理学会が発行している『心理学ワールド』5号(1999)<sup>6)</sup>の特集は「知能をめぐる心理学」である。「知能検査の進展と使い方」(大六一志)、「知能研究の最前線」(益永浩美)、「IQから社会的『かしこさ』へ」(木下富雄)、「エコロジカルな知性」(三嶋博之)の四つの文章がある。

大六はまず、「ビネー検査も多因子化するのか?」として、スタンフォード・ビネー検査の改訂(第4版)についてふれ、これは「臨床現場の要請に応えたものであるが、ウエクスラー式知能検査と似てしまって、アイデンティティを失ったという見方もできる。また、バッテリー形式や知能偏差値が導入されて原型をとどめなくなった検査に『ビネー』の名が冠され続けることには疑問をもつ向きもあるであろう」と言う。

次に「ウエクスラー式知能検査は変身しないのか?」として、「1939年の発表以来半世紀以上が経過するといふのに、基本的な検査の構成に技術革新がみられないというのでは、いささか問題があるだろう」と述べる。そして、次のような期待を示す。

なお、神経心理学の分野ではWAIS - R - NI (Neuropsychological Instruments)が開発されている。これは、クライアントがWAIS - Rのある課題に正答できなかった場合、図1のように選択肢を提示してマッチングや再認を求めたり、ヒントを提示したりするもので、いかなる援助がクライアントの遂行能力を高めるか、条件分析を行うことができる。WAIS - Rから得た情報をリハビリテーションに生かすための工夫であり、今後の知能検査の一つのあり方として注目される。日本での出版が期待される。

さらに、「近年アメリカで、ビネー式、ウエクスラー式をしのぐ勢いで普及しているのが、カウフマン(Kaufman, A.S.)の知能検査である」として、このうち2歳半~12歳半を対象とするK - ABCの日本語版を

紹介している。これは、「ウエクスラー式と同様に、複数の下位検査で構成されるバッテリー形式をとっているが、『知能検査』という名称を放棄し『心理教育アセスメントバッテリー』と称している。また、総合指標はウエクスラー式のIQと同じ平均100、標準偏差15に設定されているが、『IQ』という名称も放棄し『標準得点』と称している」ものである。

そして、大六は「おわりに」として、「…集団式の知能検査は、得た情報を学業にどう生かせるのかが曖昧で、結局衰退の一途である。日本では1991年の指導要録改訂で知能指数の記入欄が廃止され、現在では就学時健診でスクリーニングに用いられる以外ではあまり使用されなくなっている。

今後の知能検査の方向としては、すでにアメリカのTOEFLなどで盛んに用いられている項目応答理論が導入され、適応型の知能検査が開発されてくるのか、また、ビネーの原点に回帰して、到達度評価のような検査が開発されてくるのか、興味あるところであると述べている。

益永は『知能』の重要性については人々の間に広く合意が成り立っている」が、その概念の定義づけは困難で、「普遍的な定義を与えることに成功していない」という。

そして、知能研究の様々なアプローチの中で、彼女自身は「知能の生涯発達」という研究テーマに焦点をあてている。

彼女は20世紀の知能研究の歴史を生涯発達研究という観点から簡単にまとめて、次のように述べる。

…4つの柱の誕生とともに知能の発達をとらえるためのアプローチが広がった様が認められる。第1期・第2期では、推理・推論の能力と知識の両面から知能を理解することの必要が確認され、第3期では、知能の年齢変化の原因の究明に力が注がれた。第4期では、異なる環境の中で、異なる期待にこたえるべく機能している異なる年齢層ごとに、その時期を特徴づける能力を基準にして知能を定義すべきであるという指摘がなされた。現在盛んに模索されているテーマの一つである。

「知能研究のこれから」としては、「たとえば、言語分野に秀でた人物が、数を扱う分野を至極苦手とする（またはまったく興味を感じ得ない）場合、この人の「知能」のレベルはどのように数量化されるのが望ましいのだろうか」という問いを発して、すぐ続けて次のように言う。「心理学の分野において最近、『専門的知識と技術』に対する関心が急速な高まりをみせている。これらの研究は、ごく特殊な分野において認められる大変高度な知的機能が、環境への生産的な働きかけにとって非常に重要な役割を果たすものであると強調する点で、『知能』研究の今後の在り方に新しい方向性を示すものである。たとえば、会計士が専門の分野で著しく秀でた判断や決定の能力を示すならば、この能力を中核にすえてこの人物の『知能』を測定する方法が模索されてもいっこうに不思議ではない」と。

そして、「これまであまりにも過度に重視されてきた分析能力に加えて、創造性や現実に対処する能力という側面からも、より広く人の『知能』を測定すべきであるといった指摘もなされてきている（Sternberg,1997）」とつけ加えている。

次の木下は、「新しい価値基準としての社会的かしこさ」を提案している。

社会的「かしこさ」は私たちの造語であるが、類似の概念がないわけではない。たとえば社会的スキル(Argyle&Henderson,1985)、社会的有能性(Sternberg,1985)、EQ(Goleman,1995)などがそれである。ただこれらの概念は対人関係の技術的側面に偏していたり、情動の自己認識に重点を置きすぎたりというように、私たちの概念に比して少し幅が狭いと思う。それにしても、1984~1985年頃に、東西で類似の概念が競うように現れたところが興味深い。

このうち、ゴールマンのEQについては次節で取り上げる。また、スターンバーグについては前項でもふれたところだが、前記の益永も言及している。

木下は「社会的かしこさ」の「構造次元」として、①大

局的発想、②状況適合性、③相対化の能力、④内的世界の広がり、⑤感情の制御、の五つを挙げている。星野命より「これは同時に優れた管理者の能力を表しているのではないかと指摘されているという。また、栗本慎一郎が、⑥問題を抽出して指摘できる力、⑦エネルギーであること、の二次元を追加することを提案しているという。

木下が図式化した「社会化不全症候群をめぐる要因構造」とは、まず「経済的豊かさ」という「経済構造の変化」を出発点として、それが「価値観」「生活スタイル」「社会構造」といった「社会・生活構造の変化」を生み出し、それが「軽く浅い人間関係」「ギャング集団の喪失」のような社会的相互作用の貧しさに特徴づけられる「対人関係の変化」につながり、さらにそれが「社会的ルールの未習」「感情の制御能力の欠如」「内的世界の狭さ」「共感能力の欠如」等々の「社会化不全症候群」(社会のおろかさ)をもたらし、最後にそれが登校拒否や食異常のような「非社会的行動(情緒障害)」といじめや校内暴力のような「反社会的行動」という「問題行動」となるというものである。

木下が言う「かしこさ」と「知恵」という概念は類似しているように見えるかもしれない。しかし、明らかに違う点がある。それは、木下等がかしこさを測定できるものと考え、「信頼性・妥当性を備えた尺度の作成」を構想していることである。

最後の三嶋の文章は、タイトルにもあるように「知能」というよりは、「知性」と表現することによって、結果的には知能概念の拡大を図っている。また、最近の傾向であるエコロジカルな視点を取り入れている。

エコロジカルな観点からみれば、「知性」とは、生物と、生物の生息する(他の生物も含んだ)環境との間の相互作用のダイナミクスの「現れ」と考えられる。そうであるならば、「知性」の原因を生物のみに帰するのは一方的すぎるように思われる。以下ではいくつかの材料を提示しながら、「知性」の発現における生物と環境の相補性について明らかにしていきたい。

そして、彼は生物の適応行動(知性)の前提としての「環境の持続」を指摘する。

これが行為の発生に「アフォーダンス」が重要となる一方の理由である。もちろん、環境の持続が必ずしも行為を引き起こさないと同様、アフォーダンスは行為の原因にはならない。しかし、加えて述べておくべきことは、アフォーダンスの持続は、生物の「予期」の能力とも関係しているということである。

つまり、生物と環境との間のある種の規則性(ここでは「ローフル」なものと言われる)を仮定し、それが知覚の制御を受けつつも、知覚と行為は循環的で分かちがたい、と言う。そして、「もし『知覚—行為循環』が自己組織するダイナミック・システムであったならば、私たちは『知性』という現象を、単なる抽象ではなく、自然の営為に接続することができる」と結んでいる。

ふつう私たちが「知能」を論じるとき、「個人差」の問題を抜きにすることは出来ない。もちろん、人種とか性といった「集団の差」も含めてだが。エコロジカルな観点にたつことによって、知能の個人差にこだわることは止めようという提案ならそれなりの意義はあるだろうが、そういうことでもなく、「環境」を媒介にして、知能あるいは知性という概念を拡張してゆく。つまり、率直な疑問として生じるのは、どうもたことを「知能研究」に位置づける必然性があるのかということである。

以上、知能研究をめぐる4つのレポートの概略を紹介した。これだけでも、知能研究が多様になっていること、しかし、従来からの流れも依然として「健在」であること、も推測される。

しかし、予期に反して知能の生理学的研究にはまったくふれられていなかった。わずかに、大六が「神経心理学の分野ではWAIS-R-NIが開発されている」と書いている程度である。知能の生理学的研究に関心がないのだろうか？ そうでないことは、この特集号の

「トピック」として「テレビ番組(ポケットモンスター)による健康被害について」(杉下守弘)という文章があり、その中で「機能的MRIによる検討」という節があり、巻末に図1として「4色の切換(パカパカ)刺激による脳の賦活をfMRI(機能的磁気共鳴画像法)で測定した結果を示した図」として三枚のカラー写真が掲載されていることからわかる。

「知能」という枠組みの中で神経心理学者等が論文を書くことをためらわせるような状況に留まっているから、という推測もできる。

### 3. EQ登場の意味

ダニエル・ゴールマンの『*Emotional Intelligence*』は1995年に出版されたが、その本の中ではEQという言葉は使われていない。ところが、日本での訳書のタイトルは「EQ～こころの知能指数」<sup>8)</sup>である。この間の事情については、訳者あとがきで次のように説明されている。

「EQ」というキャッチフレーズ的な表現は、雑誌TIMEの1995年10月9日号が表紙を含めて9ページにわたる特集を組んで本書の内容を紹介した記事の中で使ったものだ。「人生で成功できるかどうか、ほんとうの意味で聡明な人間かどうかを決めるのは、IQではなくてEQの高さだ」と書いた記事が全米でたいへん話題を呼び、「EQ」という言葉は一気にアメリカ社会に広まった。厳密に言えば多少正確さを欠くが、「EQ」という言葉がある意味でIQと対をなす“emotional intelligence”(こころの知能指数)の意味を感覚的にうまくとらえているので、著者本人の諒解を得て、日本語版では“emotional intelligence”とほぼ同義に使っている。

この本の日本語版の帯に記されたキャッチフレーズは、「社会で成功するためにはIQではなく、EQだ」というものである。内容を読まないでIQという概念に否定的な立場の本と誤解しかねない。しかし、実際にはそうではなく、「二種類の知性」ということをゴールマンは言う。

「私たちの知性は、根本的に異質な二通りの認識モードが作用しあって成り立っている。『考える知性』のほうは、おなじみの認識モードだ。事態をきちんと把握し、熟慮含味し、思慮分別をつけるのは、『考える知性』だ。しかし、頭のなかにはもうひとつ別の認識モードがある。衝撃的で、パワフルで、ときに非論理的な命令を出すこともある『感じる知性』だ。

つまり、EQはIQに取って代わる概念ではなく、相補的な概念である。多分、IQが必要条件で、EQが十分条件だとも言うのであろう。

もう一つ重要なことは、EQの説明にあたっては脳生理学的な「裏付け」が用いられていることである。

このような障害は知能テストでは把握できないが、もう少し対象をしばった神経心理学テストをすればわかる。また、いつも落ち着きがなく衝動的な行動からもわかる。ある研究によると、知能指数は平均以上なのに小学校での成績が悪い児童を集めて神経心理学テストをしてみたところ、前頭葉皮質の機能に障害のあることがわかったという。この児童たちは直情的で不安にかられやすく、破壊的な行動に走りやすい問題児でもあった。前頭前野が大脳辺縁系の衝動をうまくコントロールできていない結果と考えられる。

自分の感情や行動をうまくコントロールできることと社会的適応は密接な関係がある。ピネーの知能テストでは、社会常識や中庸思想のような知識や態度の形で表現されていることが、脳の機能に基づく感情や行動のコントロールというレベルで語られているところにEQの特色がある。

ゴールマンの本は五部から構成されているが、第一部が「情動の脳」で、第一章「情動とは何か」、第二章「情動のハイジャック」から構成されている。他に第五部「情動の知性」(第十五章「情動教育のかたち」)がある。

こうした説明は先に引用した「このような障害は知能テストでは把握できないが、もう少し対象をしばった神経心理学テストをすればわかる」という考え方に

もはっきりしている。

しかし、脳が成人するまでに「完成」してしまっ、可塑性を欠くとすれば、一種の決定論となってしまう、この本の中で大きなウエイトを占めている「情動教育」というものと矛盾することになる。

ところが彼は、この点でかなり都合の良い話を展開する。すなわち、「EQの各要素の臨界期」が幼年期の数年間にわたっている、「そのチャンスをのがすと、あとで矯正するにははるかに多くの努力を要することになる」。だから、「遠回り」をすべきでない、というのだ。そして、次のように説明するのである。

たしかに、脳は死ぬまで(幼年期ほどではないが)可塑性を保ちつづける。あらゆる学習は脳の変化をうながし、シナプス結合を強化する。強迫神経症患者の脳に起こった変化を見ても、働きかけを続ければ情動の習慣は神経レベルにおいてさえ改造可能であることがわかる。PTSD(心的外傷後ストレス障害)が脳にもたらす変化—その意味では心理療法による変化も同じだが—は、反復性の(あるいは強烈的な)情動の経験が良くも悪くも脳におよぼす影響を象徴的に表していると言えよう。

なお、ゴールマンがEQのよりどころとしているもう一つのもは、ガードナーが提唱した「多重知性モデル」<sup>9)</sup>である。

たしかにこの本の力点は「子供たちのこころの教育」である。しかし、社会的反応はさらにそれ以上の意味を求める。情動の「自己認識」ということは、ハウツー物的な功利的自己向上の期待へとつながってゆく。

『食べるだけでIQ・EQが高まる』などという本もある。雑誌の特集では「ビジネスEQ」というコトバさえ使われ、「EQ=心の知能指数」が業績の75%を決める」という記事まである。

EQというものが持つこうした側面については、森真一が「心理主義化社会」における「感情マネジメント」として、知識社会学的観点から批判をしている<sup>10)</sup>。

先に見た木下の「社会的かしこさ」と同じようにEQ

という概念の登場の背景には社会的「事件」の存在、とりわけ自己をコントロールできないとされるティーンエージャーによる「犯罪の嵐」といった認識がある。実際、この本の中でもそのような事例はたくさん挙げられている。しかし、その説明の仕方はやはり最近の流れの中で出てきたものである。それは言うまでもなく、脳研究の「進歩」である。脳中心主義と言ってもよい。そして、社会的適応の背景に「脳研究」による説明という流れと同時に、感情という概念が知能に吸収され、飲み込まれてゆく姿を示しているとも解されるのである。

なお、さらに最近『魂の知能指数』<sup>11)</sup>という本が翻訳出版された。

これは原題に‘Spiritual Intelligence’とあるように「第三のQ」として、確信を持って書かれた。すなわち、「いま、新世紀を迎えるにあたり、最近まで十分に理解されていなかったたくさんの科学的データから、第三の“Q”があることがわかってきた。人間の知能の全体像は、精神的知能—略してSQ—を語ってこそ、はじめて完全になる」、「SQは、IQとEQの両方を効果的に機能させるために必要な土台なのだ。まさに究極の知能である」とIQとEQを否定することなく新たな概念を主張している。

特に注目されるのは、ここでも「脳とSQ」ということが問題とされていることだ。「人間の無限にあるかもしれない知能はみな、脳内の三つの基本的な神経の働きのどれかに結びつけられるということだ。ガードナーが挙げている知能はみな、実際には基本的なIQ,EQ,SQと、それに関連した神経の配列のバリエーションなのだ」という叙述に如実に表されている。

#### 4.脳研究と知能

医学における放射線利用ではX線写真撮影がおなじみだが、最近ではコンピュータで画像の再構成処理をするX線コンピュータ断層撮影(X線CT)、X線のみでなく、加速器からの陽子(プロトン)を使用するプロトンビームCT、 $\gamma$ 線や陽電子を放射する核種の標識化合物を対象とする局部に集中させ、放出される $\gamma$ 線を計測するエミッションCTやポジトロンCTもある。

CTとはcomputed tomography(コンピュータ断層撮影)である。

MRI(magnetic resonance imaging)は体内に存在する水素原子核からの情報を利用して得られる断層画像であって、X線CTよりも脳の灰白質と白質をはっきりと区別でき、1980年代に登場した。

また、f-MRI(functional magnetic resonance imaging)は、「fMRIでは、活動に伴う血液のヘモグロビンの状態変化を検出する。ヘモグロビンは酸素と結合した状態(酸化型)と遊離した状態(還元型)とで磁性が変化する。酸化型は反磁性を持ち、還元型は常磁性を持つのである。生体の活動が盛んになって、血液がそこにたくさん供給されると、酸化型ヘモグロビンが増え、還元型ヘモグロビンは減る。するとその場所の水素原子核スピンのT2が増大する。この信号変化をキャッチして、生体の活動レベルをはかるのがfMRIの原理だ」<sup>12)</sup>と説明される。

生物物理学者小川誠二を紹介した「脳の機能を見る原理」という記事が2000年の元旦の新聞に出ていた<sup>13)</sup>。

実験では人の目に光を当て、脳の反応を見た。右目に当てると脳の左半球に、左目に当てると右半球に、パターンの変化がはっきり現れた。脳のその部分が活動していることを示していた。1992年のことだ。人の脳の働きを見る、機能的MRI(磁気共鳴断層撮影)法と呼ばれる画期的方法が誕生した。

もちろん、小川だけが独占的に実験したわけではないが、「血液の酸素結合度依存性」という原理は彼の独創だという。「機能的MRIは今や、心理学などでも不可欠の研究手段だ」ともその記事には書かれている。

現在ではこの他にもdMRI(dynamic MRI)と呼ばれるものもある。

梅本守は「MRIの所見から知能発達指数正常と自閉症児の脳幹における形態的变化を指摘している」研究などを紹介しているが、「しかし、MRIは生体の構造を画像化するものなので構造的疾患や腫瘍などの臨床診断には役立つものの、心的過程、つまり脳の活動状

態を写し出すものではない」と述べている<sup>14)</sup>。

X線CTやMRIが器質的病巣をとらえようとするのに対し、機能的病巣をとらえようとするものとして、PETやSPECTと呼ばれるものがある。

PET(positron emission tomography)とは、何種類かの陽電子(ポジトロン)放出核種で認識された化合物をトレーサーとして用いて、酸素代謝やグルコース代謝をみる、脳循環代謝測定の方法である。

一方、SPECT(single photon emission computerized tomography)については、「通常のシンチグラフィに用いられる $\gamma$ 線を放出する放射線同位元素で標識した物質を投与し、体内から放出される放射線( $\gamma$ 線)を計測し、多方向からの投影データをもとにX線CTの技術を応用して二次元断層画像を得る方法をSPECTという」と説明されている<sup>15)</sup>。

PETとSPECTの違いは、前者では大掛かりな装置が必要だが、「SPECTに比べると空間解像度が高く、さまざまな心理刺激を付与した際の脳の賦活検査(activation study)などを行う際にしばしば用いられる」という<sup>16)</sup>。

それでは、このような測定方法は具体的にどのような用いられているのか。「知能」と直接関係させた研究はあまりないと思うが、いわゆる「高次精神機能」というレベルで考えれば、医学関係を中心にかなり多く見られる。

例えば、清水宏明らは運動関連領域の問題解決行動における活性化を検討している<sup>17)</sup>。

刺激方法は、液晶プロジェクターでスクリーンに投影した迷路内の経路を探索する課題(path finding task)を用いた。コントロールとして、迷路内中央の固視点を見るだけの条件を課した。

Path finding taskは、被験者が手にもったスイッチを左右上下に操作することにより、スクリーンに投影された迷路内のカーソルをスタート位置からゴール位置まで誘導することで行った。

そして、頭の中でのみカーソルを移動させる想像課題と実際に手を動かす実行課題という二つの条件を組

み合わせることによって、脳のどの部位が活動するかを調べている。

長田乾は「感覚刺激・神経心理負荷に対する脳循環代謝量の変化」の実験を行っている<sup>18)</sup>。

言語性刺激として『シャーロックホームズの冒険』を聴かせたときの脳血流画像と、非言語性刺激として『モーツァルトのホルン五重奏曲』を聴かせたときのそれを比較し、脳のどの部位で血流の増加が見られたかを検討している。

山本大輔は「記憶の臨床心理学的研究」という表現をしているが、「以上に説明した三つの技法、つまり、MRI,PET,fMRIを組み合わせることによって、生きた人間の脳のどこで何が起きているのか、形と働きの間から、つぶさに観察できるようになった」と述べている<sup>19)</sup>。ことはそれほど簡単ではないだろう。しかし、かつて脳波に対して期待されていた役割がこうした技法へと転換しつつあるのは確かだろう。そして、そこでの技法と「生きた人間」の関係構造は変わっていない。

つまり、脳の血流とか代謝のようなものを測定する技術は進歩しているが、その血流の変化が何によって生じるのか、どういう状態においてか、という刺激状況との対応がなされなければ、何の意味も読み取ることではできないのである。

ここでも観察や評価の対象になるもの、それらを行う者の経験や価値観といったものが意味付けに大きな影響を与えていることは言うまでもないだろう。

## 5. 遺伝子研究と知能

デザイナー・チャイルドという言葉聞くようになった。親が望む性格や才能を持つ子どもを遺伝子工学を利用して作ろうということなのであろう。

分子生物学者のリー・シルヴァーは『複製されるヒト』<sup>20)</sup>(原題『エデンの園を作り替える』)というセンセーショナルな本の著者である。私がこの本を読むきっかけとなったのは「パンドラの箱は開かれた～未来人の設計図～」というビデオである<sup>21)</sup>。

ビデオは「アメリカの分子生物学者シルヴァー博士は遺伝子を自由に組み換えたデザイナーチャイルドの

登場を予測しています」というナレーションで始まる。モデルとして紹介される一組の夫婦。「体外受精させた自分たちの胚をアリスと名付け、その遺伝子情報をすべて読み出すことが出来ます。その情報をもとに好ましい遺伝子を自由に組み込んだデザイナーチャイルドを作り上げます。胚の遺伝子情報はコンピュータと結ばれ、一つの遺伝子で起る重い病気の項目が開かれます」。

画面はSSGD(Severe Simple Gene Disorders)すなわち「重度の単一遺伝子異常」の項目から始まる。「もし死に至る病や重度の病気を引き起こす遺伝子変異があれば直ちに正常なものに修復できます」というナレーション。

「次は、複数の遺伝子が環境的な要因によって病気を引き起こすリスクの度合いを示した項目です。このリスクを低くするための遺伝子組み換えも可能です。」

PCID(Predispositions to Complex and Infectious Diseases)すなわち「環境要因による病気が起きるリスク」の要因の画面が開かれる。

最後にデザインの仕上げ、すなわち、Physiological and Physical Characteristics(「生理的・身体的特徴」)の項目の画面になる。

身長165cm、体重50kg、髪の毛の色ブロンド、目の色ブルー、運動能力、IQには180と入力される。体質(体格)、芸術的才能なども指定される。

すると画面には生まれてくる子どもが16歳になった時の姿が映し出される。こうした遺伝子操作の後、胚は母親の子宮に戻される。

ここでシルヴァーが登場して語る。「これまで生物の進化は行き当たりばつりに起きてきました。これからは違います。私たちは指示された通りに生きてゆくでしょう。自分たちの進化を自分たちでコントロール出来るのです。しかもこの遺伝子操作技術によって世代ごとの進化が可能です。進化の方向を決めるのは私たちがなのです」と。

そして、9ヶ月後デザイナーチャイルドが誕生する。

「スポーツ選手や科学者、音楽家、画家など特殊な

能力に恵まれた人類が遺伝子操作によって登場することをシルヴァー博士は予測しています。未来人類に大きな影響を持つ遺伝子の人為的な操作、人類はそのテクノロジーを獲得したのです」という締めくくりのナレーションが流れる。

しかし、「IQ180」が何を意味するのか、具体的にどんな遺伝子あるいは遺伝子操作と対応しているのか、まったくわからないのである。

実際にシルヴァーの本を読んでみると、ビデオとは異なり、もう少し注意深く書かれている。病気を治すために遺伝子操作を行うのは問題ない(?)が、それがある能力の増強やある特性の発現のためにまで用いるのは、様々な議論が存在する、という認識の中でこの本は書かれているように思われる。

また、ビデオでデザイナーチャイルドと言われているアリスは“ヴァーチャルチャイルド”であって、デザイナーチャイルドの章では具体的な記述はない。

それよりも、この本の中で彼の考えを正当化するような引用文や記述の方が興味深い。

例えば、「最高の住居、最高の学校、最高の医師、最高の車を選ぶことが許されるなら、なぜ、最高の子どもをつくるのが許されないのか?—「高い知能」を持つドナーから提供された精子との人工授精で子どもを授かった親」とか、「むろん、歯の矯正や、鼻成形術や、知能の向上のための栄養の摂取や教育の利用は、ほとんどの人が認めている」など。

しかし、一方で「八十九パーセントの人が『知能の向上』を目的とした利用を否定しており、『美貌の獲得』を目的とした利用に至っては、九十五パーセントの人が否定している」とも紹介している。

たしかに、シルヴァーは挑発的でもある。マスコミも扇情的に取り上げている。しかし、主役は遺伝子だけでないことは承知していて、「将来、生理的な理由でアルコール中毒になる可能性を持った対立遺伝子を選んで胚を選択できるようになる日が、いつか来るだろう。だが、そのような対立遺伝子を避けられたとしても、純粋に心理的な理由から、やはり酒を飲みすぎってしまう人もいるはずだ」とも述べているのである。

## 6.IQ遺伝子?

雑誌『タイム』は1999年9月13日号の特集で「IQ遺伝子」を取り上げている<sup>22)</sup>。まず、マイケル・D・レモニックが「スマート遺伝子?」という記事を書いている。そこで紹介されているのはドウギイー<sup>23)</sup>という名で呼ばれる‘スマート’なスーパーマウスである。

このマウスを「創った」中心人物はプリンストン大学の分子生物学者ジョー・ティエンである<sup>24)</sup>。彼はNMDA(N-methyl-D-aspartate)受容体と呼ばれる蛋白質にNR2Bを強化する遺伝子を余分に組み込んだ。NMDAは特定の化学信号に反応するもので、そこからカルシウムイオンがたくさん入り込むようにすれば、それだけ記憶力が強化されるのでは、というわけである。

NR2Bと呼ばれるそれは、若い動物(学習がよくできる)において非常に活発であり、成体(学習がよくない)においては活発でなかった。そして、それはほとんどが前脳と海馬(そこで長期記憶が形成される)で見いだされる。研究者たちは、彼らがドウギイーと呼ぶ新種を創るために普通のマウスの胚のDNAにNR2Bをつくり出す遺伝子を継ぎ合わせた。それから彼らは一連の標準化された検査(齧歯類のSAT)をマウスにやらせた。

その結果は「各ケースで、ドウギイーは普通のマウスよりも素早く学習した。同じことは新奇な対象テストでもおこった」というものであった。「知能が遺伝子に由来する」という考え方は米国社会でも多くの論争を引き起こしてきたし、「人種差別主義」とのつながりも指摘される。

“我々は次のことを示唆することは考えていない”と彼は説明する。すなわち、“人間の知能が動物の知能と同じであるということ。しかし、私は課題解決は明らかに知能の一部であり、学習と記憶は課題解決にとって決定的な意味を持っていると言いたい。そして、これらのマウスは他のマウスよりよい学習者であり、よい記憶力の持ち主である。”

結局のところ、ティエンたちが「知能あるいは記憶に対してさえも独自の遺伝子的カギ」をみいだしたと主張しているわけではないにせよ、この実験によって、高齢化社会の中でアルツハイマー病のような疾患に対する治療的期待が増加したことは事実である。

次にナンシー・ギブスが「もし我々がそれ(技術)を持ったとして、それを使うかどうか?」という疑問を投げかけている。彼女はそのニュースを人々がどのように受け止めるかに力点を置いている。まず紹介されるアメリカ社会。そこでは、人々は治療目的に留まることなく「スマート(頭の良い)な赤ん坊を作ります」という遺伝子ドクターの宣伝に無関心ではいられないだろう、という。

彼女は、「科学は進歩しつつあり、倫理がそれに追いつこうとしている。両方とも我々の人生を変え得るような選択を強いている」としながら、「しかし、治療することと改良する(完全に近づける)こととは別である」と考える。

そして、倫理学者エリザベス・パウンドの「私はこれを恐ろしいものと思う。私たちはある主導的な価値のもとに非常に同質的な社会、はるかに管理化された社会を形成するリスクに遭遇している」という発言を紹介している。

また、ロバート・マレンカの「脳がある事柄を忘れるように進化したのは理由がある」を引用しつつ、人の記憶力が強化されすぎて、嫌な体験も忘れることができなくなって、人は幸せになるだろうか、として、忘れることの意味の強調、人は忘れなければ生きてゆけない、と述べている。

さらに、タマリン・ドラモンドの「あなたの記憶の万能薬」と題する記事では、「イチョウとかハーブの薬は大人気だが、それらは万能薬か偽薬か?」と問いつつ、高齢化するアメリカ社会での人々の健康志向、記憶力や集中力の衰えを心配する人たちの老化を遅らせようとする様々な努力に焦点を当てている。

なぜ、イチョウなのか、というと、それが脳の血流を増加させることによって記憶力が改善されると一部で信じられているからだという。一見すると、本題か

らはずれているようだが、アメリカ社会での「健康志向」の様子はわが国の昨今の状況をも描いているようである。

いかに記憶は機能するかの多くははっきりしないままである。しかしながら、我々は記憶が神経伝達物と呼ばれる化学物質—その一つはアセチルコリンである—とそれらが脳の中で運ぶシグナルを含んでいることを知っている。人々が学習するとき、シナプス—脳細胞の間の相互連結—が強化され、複雑な結びつきのネットワークを創りだす。しかし、加齢にともないシナプスは途切れがちになり、記憶を効果的に回復する能力も同様に低下する。

ドラモンドは「いつの日か、それを遅らせることができるかもしれない」というが、ドラモンドの力点はそうした薬の副作用等がほとんどわかっていないことに対する警告である。「一般に同意されていることは、大部分の記憶増進剤はその危険性についてまったく知られていないということである」と。

特集の最後は『人間の測り間違い』<sup>20)</sup>の著者として有名なS.J.グールドの「視点」(‘ネズミからのメッセージ’)である。彼は‘スマートなネズミあるいは高IQの人間を作るためには遺伝子以上のものが必要だ’として次のように二つの誤りを指摘する。

#### 1. ラベリングの誤謬

複雑な生体は遺伝子の単なる総和ではなく、遺伝子単独で解剖学上の特定のアイテムを形成したり、それ自体で特定の行動をするものでもない。

#### 2. 構成物的誤り(compositional fallacy)

それぞれの遺伝子が一つの生体の別々の部分を作らないように、全体としての生体も適切な形成コードとその活動の単純な総和とみなすことはできない(スケルトンは肋骨の遺伝子に首の遺伝子を加え、それに頭の遺伝子を加えたものではない、等々)。

人間の精神性とか組織のような複雑なシステムは単一の要因における欠陥によって容易に混乱させられるという事実は、同一の要因の強化がそのシステ

ムを調和的に有益なやり方で強化するだろうという反対の主張を妥当化するものではない。

彼は「遺伝的決定論」の誤りであることを述べたうえで、「長い目で見ると、普通の意味でのダイエットと健康なライフスタイルが、あらゆるもののうちで最上の記憶増進剤なのかもしれない」と結論づけている。

ところで、『タイム』誌のこの特集で扱われている「スーパーマウス」について、池谷裕二は次のように述べている<sup>25)</sup>。

遺伝子操作による「記憶力増強ネズミ」の誕生。この画期的な研究が世界の注目を浴びたことは言うまでもありません。しかし、この研究には最大の難点がありました。それは、遺伝子導入という方法が人間には応用できないということです。確かに、ガンなどの難治性疾患に対する「遺伝子治療」の有効性は、展望のある明るい話題としてマスコミにも取りあげられています。しかし、NMDA受容体の場合には状況がちがいます。この遺伝子を人に組み込むことは、技術的には可能でも、倫理上行ってはならないことです。

池谷は「遺伝子治療」はあくまでも「治療」であるが、「遺伝子操作」は「人体改造」だから、越えてはならない「最後の聖線」であるという。「治療」と「操作」がそれほど違うのか、少し疑問もあるのだが、後者が「人為的進化」への道を進る可能性があることは確かである。

## 7. 「記憶と知能」から見えるもの

知能をめぐる論議においては、かつて単因子説と多因子説の論争が存在した。

こうした論議と必ずしも対応するものではないが、非常に関係があるものとして、知能をいくつかの要素に分解し、一方それらを統合する中枢が存在するという要素を強調するか、全体性を強調するかという対立軸もまた健在である。

これらは前述したような脳研究の中でも、遺伝子研

究の中でもあらためて再浮上している。それだけでなく、私たちの知能観の中にも存在しているようだ。

「脳と記憶」の問題を扱ったテレビ番組のビデオを見たことがある<sup>26)</sup>。

「レスリー・レムケさん、目が不自由で知能は小学生ほどですが、ある特殊な記憶力を持っています。レスリーさんはどんな曲でも一度聴いただけで最後まで覚えてしまうのです」というナレーションから始まり、一人の女性がカセットレコーダーである曲を聴かせる。それをピアノで正確に演奏する場面。

ナレーションは、「知能の遅れを持ちながらある分野に並外れた記憶力を持つ人たちはサヴァン症候群と呼ばれ、これまでに100人近くが確認されています」と続く。

そして、「もう一人のサヴァン、ニューヨークに住むジョージ・フィンさん。彼の頭の中には8万年間のカレンダーが収められています」。医師か誰か男性が彼に質問する。

「2000年1月の第2木曜日は？」「13日」「1 2 6 9 5年12月25日は何曜日？」「水曜日」、と次々に正確に彼は答えてゆく。

そして、「もしある日突然、この記憶力が失われたら私たちの人生はどうなってしまうのでしょうか？」というナレーションがあって、「ジェレミー・カスさん。かつてケンブリッジ大学のポート部に活躍し、将来は弁護士を志したほどの記憶力と才能の持ち主でした。彼は今、毎日テープレコーダーを使って、その瞬間瞬間の出来事を録音し続けています」と第三の人物が紹介される。

ある日突然記憶力を失った彼は昔の記憶は残っているが、新しいことは数十秒前のことも覚えることができない。彼の一人暮らしの場面。食事を作っている、何をしているのか次々と忘れてしまう。つねにメモを取る生活。新しい人間関係も作れない。

彼の母親は記憶を失う前に父親と離婚し、家を出ていった。母親への苦い思い出を書き換えることが難しい彼に、8年ぶりに母親が彼を招く。ごちない出合い。母は楽しかった幼児の思い出に頼ろうとする。弁護士への道をあきらめ、家具職人（「技の記憶」という

ものが別にあることが説明される)として生きようとする彼もまた、母のために家具を作る。二人がはつきりと心を通い合わせたかは、はっきりとは描かれていない。

実は、以前聴いたラジオドラマでこのような記憶障害を持った男性を知っていたのだが、実在する人までは想像できなかった。このドラマの主人公は30歳位の銀行員。猛烈に仕事をして、胃の病気になる、病院で手術をしたのだが、術後の点滴で必要なビタミンが何かが補充されなかったという医療ミスで、新しく体験した出来事をすぐに忘れてしまうという状況になる。

つまり、ここでも新しい記憶を作ることはできないが、古い記憶は保存されている、ということから生じるドラマが展開する。

通常、私たちには未来があり、それはやがて現在となるが、それも直ちに過去となって過ぎ去ってゆく。しかし、新しい記憶を形成することができない人は、いわば“経験ができない人”であり、その人に過去はもはや存在しない。

つねに、現在にのみ生きているということは、砂のように次々に崩折れてゆく生を生きているということでもある。自分の人生を定着できない人間がいかにもむなしい人生を生きているかは想像に難くない。

ところで、これらの実際のあるいは架空の例で生じている記憶障害は、側頭葉の海馬を中心とした部分の切除によっても生じると言われている。多くの脳や記憶を扱った本に必ずといっていいほど紹介される、てんかんの手術を受けたH・Mさんの症例がある<sup>27)</sup>。

手術後、H・Mさんは、新しく何かを覚えることがまったくできなくなった。病院のスタッフと普通に会話できるものの、毎日会っている彼らを覚えてはいないのだ。

トイレへの道順もわからず、食事に何が出たか、いや食べたかどうかさえ覚えていない。その反面、H・Mさんは自分の名前は覚えていた。言葉の使い方もまともで、語彙も普通に保たれていた。知能テストをしてみると、IQは百十二で平均以上の値が出

た。手術直前に測ったIQは百四だったので、数値的にはむしろ高くなったわけである。

手術以前の出来事、たとえば自分のしていた仕事のことなどはよく覚えていた。子供の頃の出来事もいきいきと思い出すことができる。結局、H・Mさんから失われたのは、短期記憶を長期記憶へと変換させる力ではないかと思われる。

この短期記憶と長期記憶の問題は神経生理学などで大きな研究テーマとなっているようである。また、前記のカスさんが海馬に損傷を受けたことも共通している。ただ、ここで「IQが高くなった」というのは奇妙に思える。知能を構成する要素の一つとして記憶が位置づけられている一方で、知能と記憶を分けて考える。

しかし、私が前述のビデオを見て考えたのは別のことだった。

このビデオを見ていて思ったのは、ある面について特別すぐれた記憶を持っている二人の男性は、周囲の人たちの指示で彼らの能力を示して、受身的であり、私たちの持つ「知的障害者」のイメージそのままである。ところが、もう一人の男性は苦境にあっても何とか自分で人生を切り開いてゆこうとする姿が描かれる。

なぜ、このような感じを持つのだろうか？ 二人の男性の「生活」は描かれていない。描かれているのは彼らの特別な「能力」だけだ。つまり、人と違った「部分としての能力」のみが着目されているのである。

一方、カスさんには「物語」が存在するのだ。そして、私たちの彼への眼差しも「記憶障害」こそが「部分」として受け止めている。それ以前の彼の「統合する能力」のようなものを中心として人間の値踏みをしてしまっているのだと考えられる。

もう一つは、きわめて人間的な物語が「脳と記憶」の仕組みを説明するために使われているということ、そのことに奇妙さと違和感を覚えた。これが今、私たちが生きている時代なのか、と。

## 8.生理変化はそれ自身では完結しない

ある医者が、「これからは、『創薬』『再生移植医療』

『遺伝子治療』の三大方策の組み合わせによってあらゆる病気を克服できる、というシナリオが出来上がりつつあります」ということを、新聞に書いていた。

脳研究や遺伝子研究が近年急激に「進歩」したのは事実である。しかし、そのことですべてが近未来に変わるようなことは幻想であって、現実には「解決」すべき多くの問題がある。

ヒトゲノム解読はほぼ終了し、「ゲノム地図」が公表され、「ポストゲノム」が話題になっている。しかし、約10万個と言われた遺伝子の数も予想を下回る3万個から4万個ということになっている。いわゆる“ジャンクDNA”と呼ばれるものの存在理由も(進化に関係していると言われるが)よくわかっていない。

また、個別の遺伝子の塩基配列の読み取りが完了したとしても、それらが独立に機能しているとは考えられない。すでに見たような要素論と全体論の問題とも関連しているこの問題について、慎重な見解を示す研究者よりも、科学ジャーナリズムは競って新世紀、脳の世紀の到来によって、すべてがドラスティックに変わるような報道が氾濫している<sup>28)</sup>。

こういう研究の報道と関連して、選択肢がたくさん与えられているかのような錯覚から、欲望の肥大化が「新しい病」として生じているように思われる。その人の置かれている個人的、社会的状況を抜きにして健康になりたいか、死にたくないか、等と問うことは難しいだろう。

今、問題になりつつある「人為進化」の是非という問題について、専門家は答えられない(はずである)。

いかに脳研究や遺伝子研究が進歩しても、人間の日常的行動の人間による観察やある価値観のもとでの評価がそれらに取って代わられることはなく、両者は相補的な関係にあるということである。つまり、よかれあしかれ心理学者は職を失うことはない。

生得的なものによって、人間のすべてが決定されるわけではない、という時、二つの意味がある。一つは、遺伝によってデザインされたものが発現する時、環境因子の影響を受けるということである。遺伝子決定論は専門家によっても否定されている。

そして、もう一つはたとえ生得的なもの＝生理学的

なものと考えたとしても、そのことの意味を評価するのは「社会的な」認識であるということである。

ある刺激が与えられた時、脳の中である変化が生じていることは明らかである。ただし、そこで生じていることの意味を解釈するためには脳以外の行動との対応付けが必要なのである。この脳以外の行動を私たちは日常的に観察し、評価している。それは社会化された眼差しである。したがって、それは歴史や文化によって規定され、変化するものである。

いままで見てきたように、最近の知能研究では、一見すると「社会適応的」志向を示しているようでいて、脳あるいは神経心理学的な裏付けを誇示しており、一方で生理学的研究も社会適応による意味付けを不可避として、両者は相補的な関係構造にある。

生理学的研究がどこまで行っても自己完結をすることはない本質を持っているということは、私たちにとって救いであると同時に、人間は一人で生きていかざり(文字通り)存在しない、あるいは存在の意味を持たない、ことをも示しているように考えられる。生理的変化は社会的文脈という光を与えないかぎり、何の意味をも語らないのである。

注:

- 1)Richard D.Hernstein and Charles Murray 1994 *The Bell Curve* The Free Press. なお、ハーンスタインの本では、次のものが翻訳されている。  
R.J.ヘアンスタイン(岩井勇児訳)1973(1975)『I.Q.と競争社会』、黎明書房
- 2)Robert J.Sternberg(Editor in Chief) 1994 *Encyclopedia of Human Intelligence*(2Vols.) ,Macmillan Publishing Company,p.457 - 463.
- 3)Joseph D.Matarazzo 1992 *Psychological Testing and Assessment in the 21st Century*,*American Psychologist*,p.1007 - 1018
- 4)SATはScholastic Aptitude Test(進学適性検査、学習適性検査)の略称。アメリカでは多くの大学が入学志望者にこの検査を課してきたが、カリフォルニアなどではaffirmative action(積極的優遇措置、

- 差別撤廃措置他の訳語がある)等の観点からの見直しの動きもある。
- 5)例えば、『アメリカンサイコロジスト』誌では1997年に「知能と生涯学習」の特集をしているが、そのゲスト・エディターはRobert J. Sternbergである。
- 6)日本心理学会編 1999『心理学ワールド』5号
- 7)アフォーダンス(affordance)とは、アメリカの心理学者J.J.ギブソンの造語で、彼は生態学的な立場から知覚の機能を考えている。アフォーダンスは、生物を取り巻く環境への適応の仕方を視覚や触覚などを通じて把握することで現れる性質である。
- 8)ダニエル・ゴールマン(土屋京子訳) 1996『EQ〜こころの知能指数』、講談社
- 9)ガードナーは「人生に有用な知性は広範多岐にわたるもので大別しても7種類はある」と主張した。それらは、言語的知性、論理数学的知性、空間的知性、身体運動的知性、音楽的知性、対人知性、心内知性、である。
- 10)森真一 2000『自己コントロールの檻』、講談社
- 11)ダナー・ソナー&イアン・マーシャル(古賀弥生訳) 2001『魂の知能指数』、徳間書店
- 12)山元大輔 1997『脳と記憶の謎〜遺伝子は何を明かしたか』、講談社現代新書, p.98
- 13)『朝日新聞』2000年1月1日付け
- 14)梅本守 1995 中枢神経系の発達と老化に伴う形態的、機能的変化(『児童心理学の進歩1995年版』)、金子書房, p.259
- 15)長田乾 1993 高次脳機能と神経放射線学的診断(『発達障害医学の進歩No.5』)、診断と治療社, p.86
- 16)大東祥孝 2000 発達障害と脳研究—自閉症関連病態をめぐって—(『児童心理学の進歩2000年版』)、金子書房
- 17)清水宏明、井上敬、虫明元他 2000 Functional MRIによる高次・精神機能測定、『脳と精神の医学』、第11巻第1号、23 - 29.
- 18)前掲論文
- 19)前掲書、p.98
- 20)リー・M・シルヴァー(東江一紀、真喜志順子、渡会圭子訳)1997(1998)『複製されるヒト』、翔泳社
- 21)NHKエンタープライゼス企画制作「パンドラの箱は開かれた〜未来への設計図〜」(『驚異の小宇宙 人体Ⅲ 遺伝子・DNA』第6集)、フェリシモ出版
- 22)The I.Q. Gene? *TIME* Sep.13,1999
- 23)ドウギューとはアメリカの古いテレビ番組の主役である架空の早熟な天才少年‘ドウギュー・ハウザー博士’にちなんだ名前。
- 24)ティエンその人と「スーパーマウス」については以下のホームページでも知ることができる(2000年12月現在)。  
[http://www.princeton.edu/~psych/PsychSite/ns\\_tsien.html](http://www.princeton.edu/~psych/PsychSite/ns_tsien.html)  
<http://www.sciam.com/2000/0400issue/0400tsien.html>  
<http://www.abc.net.au/quantum/stories/sl03200.htm>
- 25)グールドは知能テストのあり方、研究者の倫理等について批判的な立場をとってきている。しかし、知能テストの存在そのものを否定しているわけではない。  
スティーヴン・J・グールド(鈴木善次・森脇靖子訳)1981(1989)『人間の測りまちがい』、河出書房新社
- 26)池谷裕二 2001『記憶力を強くする』、講談社
- 27)NHKエンタープライゼス企画制作「人生をつむぐ臓器—記憶—」(『驚異の小宇宙 人体Ⅱ 脳と心』第3集)、フェリシモ出版
- 28)例えば、次の論文なども扇情的なタイトルと内容はかなり違っている。  
ヘラ・ラルフス 1999 “すぐれた人間”を作ってはなぜいけないのか?、『遺伝子の世紀』、学習研究社

## 児童相談所から見えてきたこと — 瀬川三枝子さんとの語り合いの中から —

戸恒香苗(東京大学病院小児科心理相談室)

最近頻繁にテレビ、新聞に「虐待」による子供の死が報じられ、それに関わる児童相談所の職員がコメントを求められている。児童相談所の役割にかなり関心が集まっている。神奈川県中央児童相談所(以下、児相)で児童相談員をしている瀬川さんに最近の児相の様子について、語ってもらった(01.2.11)。なにしろ去年11月の虐待防止法が施行されて以来かなり忙しくなっているという。「実際に数として増えているし、通報によって児相や警察が問題にするようになってきているため」という。近隣からの通報がはいれば即それに対応して行かなくてはならない。瀬川さんのいる児相でも、職員は外回りをして児相に戻ってから5時以降も事務処理におわれ、家庭訪問をしたり、親を呼んだりして、児相の電気が夜遅くまでついているという。虐待の通報が入るとチームを組むので1件に何人かがとられ、人を増やしてほしい状態にあるという。

瀬川さんは、現在の児相の前、婦人相談所に6年間いた。そこでは夫の暴力などで逃げ込んできた人の相談にのり、その人の出先を一緒に考えるのが仕事だった。そして、今の職場に12年間いる。

普通、児相の職員は2～5年で転勤するが、瀬川さんの12年は例外にあたる。

「私は目が見えない。全ての職場にそう対応できるわけではないので、異動の場も限られてしまう。神奈川の場合は他の県とは違って児童福祉士の他に、児童相談員を置いている。福祉士は銀行でいう外交員みたいなもので、相談にかかっている家を訪問したり、周辺の人たちの話を聞きにいたりしてその家族に立ち入ることができる。一方児童相談員は、窓口において足を運んでくる人の話を受ける。心理の人が子供を担当し、親の相談を児童相談員がうける。基本的には1時

間の時間をとり、18歳以下の子供達のあらゆる相談を受ける。学校の問題(不登校、いじめ、集団に馴染めない等)、障害の問題(ことばが遅い、落ち着きがない)また非行(万引き、うそ、家出、シンナー)と子供の問題でもあるのだが、同時にその親達の問題でもある。『事情があって子供が育てられない』、『望まない子を妊娠したので子供を預けたい』、『離婚するけれどどちらの親も引き取りたくない』というものもある。14才以下の子が犯罪をおかすと、家裁に送れないのでその子たちを施設に措置する仕事も入ってくる。

昔は、『どこまでが体罰か』『間食ばかりでどのような食事をあたえたらいいのか』というようなしつけの相談があったが、今はいろんな相談機関ができたためか、ほとんどない。

話を聞いていると、私のいる小児科相談室の相談内容とかなり重なっていると思った。しかし、虐待への対応や、親に手放されて行き場のない子供たちをどうしていくのか、警察、病院、施設との連携をとり、即対応して行かなくてはならない臨場感はいくらでもない。

マスコミ報道が不安をおおっていないか

「最近虐待の通報が多く入るようになった。大抵は近所の人たちから『子供を泣かせる声が毎日聞こえてくる』『子供が裸で外に出されているのが気になる』というもので、他に学校、保育園、病院からの通報もある。大体はPRがいきとどいたせいか、警察に行く前に通報してくる。通報があるとそこを訪ねなくてはならない。匿名の場合は、それを尊重しなくてはならない。通報された相手を追い込んでしまうこともあるので、闇雲に入るわけには行かない。児相以外

の、地域で公的立場にある保健婦や民生委員に家庭訪問で様子を見てもらったりして慎重にしている。また、病院、警察、保健所、幼稚園、学校ともつながっているの、プライバシーにもかなり気を遣う。

親が『虐待しそうです』と言ってくる場合と、子供が学校の先生と一緒に『虐待されている』と来る場合もある。去年の11月の虐待防止法が施行になってから、『虐待してしまうかもしれない』という不安を訴えてくる親が多くなっている。明らかに、この間のマスコミ報道が、育児不安をあおっているのではないかと思っている。

虐待してしまう不安を、さらに1歩すすめて「子供が嫌いだから虐待しそう。だから他の人に育ててほしい」という話を持ち込まれてくる。

確かに今の親達が、子供を育てることは私が子供を育てていた20年前の状況とかなり様変わりしていることがわかる。親を取り巻く情報の量が違う、質が違う。あらゆる商品や流行の情報、子供の教育の情報にさらされながら、そして、仕事を持つことも当たり前であったり、インテリアやおしゃれに気をくばり、遊びの時間もしっかりとる。若い親たちの生活をみるとそんな生活であり、ぬか味噌臭さなどということばは死語になっている。でも子供との生活はそうそう変わらないはず、子供といると忍耐の連続であり、夜泣きはする、思うように食事はしてくれない、家の中をちらかす、洗濯は山の様、他人の子はよく見える、自分の毎日のくり返しに嫌気がさしてくる。今の若い人たちがどうやりくりしているのか、感心している。

90年前後から「普通の育児をしているおかあさん」のなかに虐待の問題があることができたという。児相への相談件数は99年度には10年前の10倍で1万件以上、周辺からの通報は前年度の4倍になっているという。瀬川さんが言うとおりに忙しいというも頷ける。

瀬川さんは「実際に子供たちが殺されている。何でもかんでも否定するわけではないが、確かに通報によって命をすくわれている子がたくさんいると思う。だけど一方で子育て中の親たちが虐待しそう、虐待しているのではないかと不安がっているのも事実だ」。

今、若い人達ばかりでなく、私達の何かが変わり始めているらしい。

最近、知人のことで偶然児相の担当の福祉士の方と話す機会があった。夫の訴えで妻の6歳の子への虐待が問題にされ、児相が入って、1歳半の下の子も虐待される可能性があると言われて、児相から里親へ預けられた。親権を持つ夫も児相に預けざるを得ず、児相が子供の措置について一番の決定権を持つことになった。福祉士と話していてわかってきたことは「子供のことを一番に考えその環境を整えることが」最優先される。そして、子供を育てられない親の思いは、関係者の中では一番後回しにされる。知人の場合、虐待として子供たちが措置されたのだが「児相から見ると親子関係」と「こちらから見ると親子関係」の理解の違いをどう埋めていくのか途方に暮れてしまった。本人たちだけでは子供を取り戻していくことは不可能に近いと思われた。福祉士は「今1歳半の子を預かっている里親の方が愛情を注いで育ててくれる。だからとても子供の表情が落ち着いてきた」と強調する。当たり前と言えば当たり前だ。そうでしょう、今まで毎日親たちの怒号が行き交う中にいたのだから。

将来この親たちにどれほどの教育、しつけができるか、そうでなければ里親の方が十分な養育環境を持っているという暗黙の判断、親の資格とは言わないが、福祉士の中にその様なものがあるのではないかと感じた。私たちの中にもマスコミで報道される虐待事件の親たちの子供への仕打ちのひどさに、この親よりまだ施設の方がましという比較が自然に出来上がっている。

誰もがなにかが足りない親の元で育つ。どれほど足りないかを誰も線を引きすることはできない。この知人にはまだ二人の子供たちがいるが、母親の足りない部分を当たり前で自分たちで補ってきた。学校の書類を母に説明しながら書く。母が荒れていれば自分たちで食べることをやってきた。これはこれで「この母にこの子あり」の世界で、そのことがいい、悪いという話でもない。そうでしかないのだと思う。1歳半の子は、里親に預けられて3ヶ月、もう親の顔を忘れてい

るだろう。まず親子の面会の日を入れてほしいと児相に言いに行くことにしている。この子にとってのいい親探しではないだろうと思う。どう彼女ら親子に関わる人たちの出入りを増やして、手助けできるかだろう。児相の立場にしてみれば、親権を持つ一方の親の訴えがあったので介入せざるを得なかったのだろうが、その介入の難しさを知る。我が子に落ち着いた対応ができるのか、社会性があるか親の比較をされたら負けだ。親が判定の対象になっている。

子供を虐待する親はとんでもない親とされ、親にどんな事情があろうと、異常な人として一括りにされていく。そして若い親たちの「母性・父性の欠如」が世間に一人歩きしていく。私もだだをこねる2歳の長女が「ごめんなさい」を言うまで叩いたことがある。そのときの心のこわばりようは今もぞっとする。止まらないのだ。子供の気持ちに沿って心を動かすのが難しいときがある。子供と生活する時の、親の方がコントロールがきかず切れてしまうという当たり前の風景が、今では必要以上に罪悪感とまでは言わなくても、後ろめたさをもたされているのではないかと感じる。

子供が親の一方的な暴力で死んでいくことに、痛ましさを覚え胸が痛くなる。ある人から「子供は昔からずっと殺され続けてきている。今に限ったことではない」と言われた。そうでありながら今なぜ焦点が当てられ始めているのか。私達はマスコミによって事件を知るのだが、そこでは視聴率を上げるためにその異常さが強調されていくし、私達もそれに目を奪われる。子供がいじめられ殺された時、児相や、保健所、警察が介入しなかったことを非難する。前もって通報があって親子のことがわかっていた時はなおさらだ。そして児相の言い訳と近隣の人たちの声がマスコミに流れる。近所の人「知らなかった」「わからなかった」という事件に対する驚きが載る。確かに密室で起きることが多いので、本当に知らなかったのだろう。でも薄々は知っていたらどうしたのだろう。私達は自分も含めて、虐待を何か隣近所がさわれない特別なものに行っているのではないだろうかとも思う。

我が家の前にすむ教師夫婦が、毎晩1、2時間小学生の子供たちを大声で怒鳴りとばす。ご夫婦一緒の時

もあるし、どちらか一人の時もある。「片付けていない」とか、「宿題をやっていない」とか、なのだが、怒鳴る声を聞き続けているだけで疲れてくる。近所の2、3人の人に話をきくと、誰も何も言いに行った事はないという。意を決してドアをノックし私の名前を名乗る。するとぱたりと声がやむ。「お母さんだれかきたよ」という子供の声。電気が消え誰もでてこない。軒を連ね暮らしているのはあなた達だけではない。次の朝顔を合わせたとき、普通に挨拶をしたが、これだけのことでも気が重い。通報することで行政が動いてくれれば、近隣の者として顔を出さず、いいことをしたという思いでいられる。これはわたしたちの何を譲り渡していくことになるのか。アメリカの虐待件数が10年前で270万件だという。通報はもっとあるのだろう。この途方もない数に込められている意味を是非知りたいものだ。

若い両親による事件が続いている。社会にでたばかりで、経済的にも大変な人たちが、子供を育てようとしてがんばっていて、自分たちも結構我慢することも多い生活の中で弱い者がより弱い者をいじめてしまったという印象がある。2、3日前には大家族の中で3歳の男の子が亡くなった。夫の連れ子だと言うが、曾祖父、祖母まで手を出している。その家族の中で後ろ盾のない一番弱い彼が標的になってしまったのだろうか。近所の人たちもいじめられているのを知っている。

瀬川さんは、「10年前はじめて虐待の子を受けたとき、周りは私がこれは虐待ですと言っても認めなかった。一年後その子がやはり虐待を受けていたことがわかった。けれど、今は周りが虐待と騒ぐことに抵抗がある。どういう基準で虐待と判定するかの防止マニュアルがあって、その親子関係でピックアップしたものが項目に当てはまれば虐待になる。客観的にやっているように思えるが、逆に恐い。親の知らないところで虐待になってしまう」。

「親元に子供を戻すとき、迷う？」という質問に、瀬川さんは「よく先を見据えて仕事をしろ、と上の人から言われるが、人はどう変わるかわからない。一度親に戻って駄目なら、2度目もチャレンジしたい。その

時には関わり続けるしかない。ぱっぱと判断するより迷う方がいい」と答えてくれた。2年、5年で異動していたら、やはりこの言葉はでてこなかったらう。12年間親子につきあってきた体験からでてきた言葉だろうと思う。

「虐待された体験を持つ人はまた子供を虐待する」という定式がかなり浸透していて、「虐待されて育てられたから私も虐待してしまうかもしれない」という不安を訴える相談があると瀬川さんは言う。実際に子供がいやな親がいて「虐待しそう」と言って子供を他の人に育ててほしいという。「マスコミからの情報もあるが、心理学が送り込んでくる知識をどう崩していくのかが大変」と瀬川さん。

「親にほめられていないから子供をうまく育てられない」と言う人に、瀬川さんは「障害者として生まれてこない親が、障害者を育てられないと言うのと一緒じゃない」と切り返す。ここは彼女なればこそその説得力のある言葉だ。「過去の育てられ方に縛られている。そういう人に限ってすぐまじめなの。講演会や育児相談会に行き、権威ある人の話を聞く。『3歳までこう育てましょう』とか聞く。子育てに役に立てようと話を聞いているうちに、自分がそうやって育てられてこなかったことを発見してしまって、専門家の話を聞いて、逆に自信をなくしてしまった。元々、自信のある人や、いい加減な人は行かない」。

また「被虐待児症候群」というのががあると瀬川さんが教えてくれた。虐待をうけた子が長じて社会に適應できなったり、犯罪を犯したり、また自分の子に虐待を繰り返す傾向があることを言うらしいのだが、ここを真面目な人が聞くと、必ずそうなる過去に必要以上にとらわれ不安になっていくのだろう。虐待を受けたからといってそうでない人もいるし、そうなる人もいる。また、虐待を受けてこない人もしかりだ。

瀬川さんは、「親から暴力を受ければ、そうなるのは至極当たり前だと思う。何も出さずにいることの方がおかしい。周りにいるものたちが一緒にどうつきあって越えていくかではない」と話す。さらに、「自分たちが離婚するので、子供たちが傷つくからカウンセリングしてほしい」と行って来た人がいる。そう私

のところにも、「母親が亡くなったのでカウンセリングをしてほしい」とか、「離婚するのに、子供が何歳のときに一番ダメージが少ないか」という質問まで受けたことがある。何事もない前から話が持ち込まれる。親がもう子供のトラブルにつきあうのがしんどいらしい、いや面倒くさいのかもしれない。何しろ傷つくことは大人の方が恐いのだ。取り返しのつかないことのように感じ、おびえているとしか思えない。「トラウマなんです」なんて言われると、「とらとうまを飼っているんですね」と答えてしまうと瀬川さんは笑う。

### 子供達につきあえなくなった大人達

「『子供が落ち着かなくて、怒りとばしてこのままだと子供をなぐっちゃう』という親が相談に来た時、児相の医者の診断で薬の処方があり、落ち着いたということがあった。周りから親のしつけのせいとされ、自分を責めていた。保育園が児相に相談に行くように勧められて送ってくる」。

きっと、ADHD(注意欠陥/多動性症候群)の診断で、今流行りの薬「リタリン」が処方されたのだろう。瀬川さんも児相でこのような相談を受ける時、かなり複雑な思いがあるという。瀬川さんがいる中央児相が総合療育相談センターの一角にあるため、外来があって医者がいるため親も医者にかかることを希望していてそれを制することも難しいという。

学級崩壊や、立ち歩く子供たちが問題になってから、ADHDという病名が広まり、幼稚園、保育園、学校の先生たちが診断し、医療機関に行くように親子に勧める。そして、子供の落ち着きのなさに困っていた親は、薬が処方されることを期待してくる。そして、結構その薬が効いてしまうことがあり、最近医者の中でも多動の子にリタリンを処方するようになってきている。もちろん慎重な医者もいるのだが、どんな子供たちかと聞いてみると昔からいるやんちゃな、いたずらな子供たちだ。

今思い出すと、私の兄もそうだった。母がよく物差しを持って飛び歩く兄を捕まえようと待ちかまえていたものだ。家にいる時は、広告の裏に軍艦、飛行機、

戦車、大砲が火を噴いて戦っていた。それもドーン、バーンと実況を加えながらやっていた。母は授業参観に行く度、落ち着きのない兄のことをこぼし、叱っていた。40年前の話だが、今なら、一度は専門家のところへ相談に行かされていることだろう。

また、娘の幼な友達の男の子は、登校班で行く時もあちこち寄り道し、朝礼には並べず捕まえている先生を蹴飛ばしていた。授業参観の時、お母さんの愚痴を聞くのが恒例だった。彼のお母さんの姿を見ると授業そっちのけで話しかけてくるのだ。その彼も今や高校2年生。人間関係の不器用さがお母さんの悩みの種だが、彼のお父さんに似ているなどと思うが、いかんともしがたい事だ。兄の時も、この子の時も「そのうち落ち着くわよ」と周りが言っていた。何があっても、過ぎてしまえば一日何とか暮らせたという世界だ。

しかし、今大人たちは、いずれどうにかなっていくことを知っていながら専門家へと言っている。異常な子、治されるべき子として見ていくことに敏感であってほしい。毎日子供とつきあう中で、最初はとまどっても、慣れることで、越える世界をいくつも体験している筈だ。

私の相談室にも、ある幼稚園の園長から「皆と同じ事ができない。担任の話聞かない。自分の関心のあつオモチャで遊んでいて、他の子と遊べない」。さらに、「これでは、小学校に行ったら他の子から浮いてしまい、いじめの対象になり、将来犯罪者になるかもしれない。病院に相談に行きなさい」とご丁寧に将来のことまで見通されてしまった。お母さんはショックを受けて泣いていた。お父さんは「俺もそうだった」と動じなかったようだ。そこに全ての答えが出ていると思う。瀬川さんも、保育園から言われて相談に来る人がいて、若い保母さんが言うことが多く、当然彼女らが専門家になっている。この子供たちとどうつきあうかでなく、病気として見分けることが現場にとって仕事になりつつある。

ADHDの行動の特徴をしめす項目があつて、その子供の行動のいくつかが当てはまれば、この症候群になる。テレビ欄に「落ち着きがないは病気?」というタイトルを見つけた。医者がアナウンサーに答えてい

る。原因は、周産期の問題、脳の機能の問題、遺伝の問題、伝達物質、環境、親の養育等を挙げ、いくつかの複合だという。この医者は、薬については副作用があると云って懐疑的だったが、学校では通級で、個別教育を受けさせ落ち着いた環境を作ること、家でも本人の出来ることを伸ばすようにし、ほめて育てること、そして将来も落ち着きがなく、職が落ち着かず、対人関係がうまくいかない人もいて長く観察が必要だと脅しておいて、「そのうちに脳の発達により落ち着いて来て、問題はなくなってくる」と言う。これを見ていた親たちは、何に注目するのだろうか。自然に治ると言うところか、親や周りの対応で改善されると言うところか。親たちは、日常の生活の中で、子供が次々と引き起こしてくることを後追いするだけで精一杯だ。怒ったり、すかしたりいろいろなことをやってきて大して効き目はない事を経験的に知っている。果たして、個別、丁寧な通級での時間が彼らにとってどれだけ有効なのだろうか。多動の子にとっては、クラスの人数が多いほど目立たないのはいやすいという医者もいる。専門家の言うことも様々だ。ある医者は、「この子がクラスにいられるために、やむを得ずリタリンを出す」という。一方、「アメリカは使いすぎだが、副作用もなく、一部の子にはよく効くこともわかてきた」と言う。結局のところやむを得ずというのは言い訳にすぎない。薬を出して効く子がいれば、この子たちの治療にはこの薬という流れができ、そして彼らが病気であることがますます強化されていく。そして、特別な子たちには、特別なメニューが用意される。つい最近、授業中立ち歩くわけでもなく、授業妨害をするわけでもない小学校3年生の子が学校に説得されて特殊学級に移った。リタリンを飲んでいて。専門家は原因が特定できないと言う。それなのに本人一人に薬を飲ませることで責任を負わせることになっていく。

瀬川さんは、医者が書いたADHDの本を何冊か読んで相手の道筋が見えて納得がいった。「皆これを読んで子供を判定している。そして専門家と同じ言葉を使っている」と。

毎日、困っちゃうといいながら「こうしよう、ああ

しよう」と工夫しながら、本人を抑圧することを含めて周りの大人たちがしのいでいくしかない。私の娘は、幼友達の家に入りびたっていたし、学校も一緒に通っていたが、彼のことで困ったこともないし、彼が他の子とどう違っていたかも記憶にないという。子供同士というのは、大人とは違ったところで生きていると思う。

特に、周りの大人たちがなぜこうも子供たちにつきあいきれなくなってきたのか。瀬川さんは「児相で人と関わっていても、流れが速いと感じる。そばで〇〇ちゃんなあに？と聞いてあげられない。つきあってられないから、専門家がでてきたのか。専門家がいるから忙しくなったのか」と言い、「お互いの自己実現を目指す共働きをする若い夫婦にとって、コントロールの効かない子供は、矯正の対象になってしまう。そのことがADHDというラベルの定着に一役買っている」と指摘する人もいる。「大半の人の生活にコンビニがあり、携帯がある。待つなんていうことがない。私達障害者は、ものを頼んでも、ちょっと待ってください、といわれる。それに、老人も弱者は待たされる。生活のなかで、万事、旅行は旅行会社へ、漏水は水道工事屋へ、専門のところへ持ち込むのと同じで、不登校はスクールカウンセラー、非行は児相へと、最短距離を選んでいく。そして、近所の人と専門家なら専門家の言うことに、友人と新聞、テレビなら新聞、テレビに重きを置く。皆が最短距離を選ぼうとする」。

リタリンを子供に飲ませているお母さんは、「薬を飲んでいると全然違う。家の中が落ち着いていて楽なんです」という。病気と診断されれば、親のせいでもないし、学校、教師のせいでもないことになり、診断をもとめ、薬の処方箋を、両者が望んでいくことになる。学校に薬を飲んでいけば、落ち着いて授業を受け、勉強もこなすようになるとなれば、飲まない理由はない。子供達も自ら飲むことを望むようになるかもしれない。「周りにとっても、本人にとってもよければいいじゃないですか」と、事がどんどん単純化していく。それでもあえて言いたい。彼は親を一晚中寝かせないほど暴れるわけではない。親子はよく寝ている。

## 自分の感性でいけばいい

若い人の事件が起きるたびに、新しい病名がマスコミに流される。そしてその情報を聞いて、日頃、子供の様子に不安を持たせられている親たちが、自分たちに当てはめて問い合わせしてくる。瀬川さんや私達が窓口になり相談を受けていくのだが、私などは、心理学の常識に捕らわれたくないと自覚的にやってきたつもりでも、相手の話す何言かで、ストーリーを自分の中で、勝手に作り上げていく。そして、その親子を判定しているのだ。要するにその親子の力量のなさを測って、一緒に考えましようと言っているのだ。長年やってきて身につけてしまった垢に気づいていくのは大変だ。友人から、私の受け答え、態度、雰囲気のカウンセラーになっていると、よく指摘される。

最近三人の若い人が、相次いで連絡してきた。話を聞くと、三人とも精神科のクリニックで、カウンセリングを受けていたという。一人は、半年後、カウンセラーから何の理由も明かされず、一方的にカウンセリングをうち切られてしまった。クリニックにかなり問い合わせをしたが、私的な関係は一切明かせないということで、本人としては、今までの関係は何だったのか、相手がどういうつもりだったのか人間不信に陥ってしまったという。一人は、カウンセラーがこちらが話すまでじっと待っているという。そして、お互いの話がつねに彼女の症状に集中し、行く度に気分が暗くなったという。もう一人は、毎回夢を聞かれ、なぜ自分の今の苦しさそれが関係あるのかの説明がないまま、疲れ果ててしまった。カウンセラーにしてみれば、カウンセリングの基本にのっとってやっているのだろうが、その杓子定規さにあきれてしまった。といっても私も同じ穴の貉で、大して変わりはないのだけれど、カウンセリングを受けてまで疲れ果てることはないのだ。

瀬川さんはこんな枠の中で人に関わってはいない。「カウンセリングの勉強をお金を払って講習を受けたことがある。相手を知るのに役だったと思う。心理学の勉強をしていなかったのだから、自信がなかった。何

だ、これを元に児相の人や、専門家がものを言っているのだ、ということが分かってきた。何も恐いものはないと思った。自分の感性でいけばいいんだと思った」。そして、心理学の専門家の言っていることをどう突き崩すかが毎日の仕事だという。

「子供と暮らしていてしんどそうな人もいる。ご飯も作れないし、朝起きることも、子供を風呂に入れることも、幼稚園の送り迎えも大変なお母さんにこれ以上がんばってとは言えない。医者に行くことや、薬を使うことも勧める」。現実として、母子が、明日からどうにかやってくるには、薬も医者も必要になってくる。

鬱で苦しんでいる人には薬と私の中でもなっている。ADHDで悩む親子がいれば薬とそのうちに私の中の常識が変わっていくのも時間の問題かもしれない。そのことを自覚していないと、どんどん流されていくだろう。

これからも、次々と新しい病名が作りだされてくると思う。今まで一つの病名で括られていたものを、いくつかの症状の違いをただ細分化して病名をつけてるように素人目には見える。また、医者も一人一人診断基準が違うのも事実だ。さらに、この20年間で流行があり、次々と病名ができて、消えていった。「正確に診断したからと言って、一つ一つに治療法があるわけでもなく、周りがこういうことをする人なのだ」と理解するのに使われるぐらいにしか役に立たない。生活の中で周りが切り抜けていくしかないんですよ」と、ある医者が言う。

瀬川さんは、最近の親たちの様子が変わってきたという。「子供の状態がさほどでもないのに、親が困る困ると言ってくることが多い。自分たちのことを自分で考えなくなってしまった人たちがいる。この前は、『妻が子供につらく当たる。これは虐待ではないか』と児相に判断を仰いで来る父親がいた。自分が体を張るのではなく、人にやってもらって、責任逃れをしたいのだと思う。父親からの相談も多くなっているし、夫婦と一緒に来ることも多く、『若い父親が、僕ももう少し話したい』と自分のことを語り出すこともある。男の人たちが愚痴をこぼすようになってもいる」。自

分たちの周りに話を持ち込むのではなく、相談機関に持ち込む事には変わりなく、瀬川さんは、「相談に来てよかったというのはうれしいが、ここまで来ないとよかったと言えないことに悲しさがある」とため息をつく。

相談に来る人たちが、自分の話を友人がいても話しにくい、と言う。隣近所のつきあいでもあり得ない、どういう風に返されるか分からないし、どういう風に広まるか分からないから、それに相手に迷惑をかけるからだという。しかし、相談に来た方の子供が暴れ出し、それも母、子だけの家だったので、せっぱ詰まっていたのでそんなこと言ってられない。お母さんの兄弟、友人、先生、友達の親に子供のことをうち明けていった。家に遊びに来てもらったり、子供に声をかけてもらったり、一緒に遊びに行ったり、何しろ孤立せずに、家に入出入りを作ることから始まる。何しろ親だけではやっていけない。もちろん私も何ができるわけでもない。周りにつなげる形を作るしかない。専門家だけが、親子の問題にさわれる、解決できるというのは嘘だ。周りを関われなくしているのは、専門家に頼ろうとする私達の生き様だし、一方、相談を受ける専門家は、人の生活の広がりを狭めてはならないし、そのことに敏感でなくてはならない。

篠原さんから「瀬川さんと話していて、今の児相が抱えている問題と虐待報道が話題になり、児相から見える親子関係、世相に話が広がっていった」と聞いた。更に、瀬川さんと私がよく似た仕事をしていることもあり、是非話してみたらということで、私が瀬川さんを訪ね、インタビューをさせていただいた。お互いに相談に来る人々と日々どう繋がるのか迷うことを語る中で、いかに専門家やそのことばが相談に来る人を右往左往させているかに気付く。私達もその専門家のひとりとして、人を右往左往させていることには変わりはない。そんな話に終止したかもしれない。

以上、瀬川さんの3時間に及ぶ話に啓発されながら、行きつ戻りつしながらまとめさせていただいた。

## 赤子を流すなどカニは泡を吹く

松田博公(共同通信編集委員室)

A：カニは己の甲羅に似せて穴を掘ると言うが、まことに批判する行為は恐ろしい。人をどう批判するかで自分の水準を明かしてしまうからね。

B：と、一匹のカニが申しております。

A：うん、そのカニの泡吹きだと思ってもらっているのだが、いま井上芳保さんの提起した「よりよい社会臨床」論をめぐってわきおこっている社会臨床学会の大議論に、ちょっと口を挟みたくなったのにはわけがある。当時の社臨雑誌がたまたま手元になくて、うろ覚えにしか語れないが、臨床心理学会の活動に区切りをつけ社臨が発した時、運営委員会から、佐々木賢さんと一緒に過去の臨心研雑誌を読み、総会で感想を述べてほしいと依頼されたんだ。それを引き受け、賢さんとぼくが公開対談をしたその席で、どうやらぼくは現在の議論を予見していたのさ。

B：先見の明を自慢したいわけだ。

A：それもある。それ以上に、深い縁を感じるんだ。ぼくが話した幾つかの論点の中で、記憶しているのは、社臨が苦悩する人々とともに立ち続けようとするなら、宗教性へのまなざしを深化させたほうがいいということだった。人々はなぜ宗教性を欲するのか、そもそも宗教性とはなにか、その中に肯定的機能はあるのか、などを追究しなければ、人間性の生理も病理も分からない。そして、宗教性へのまなざしを感じさせる面白い論文として自己啓発セミナーを分析した井上さんの作業を取り上げて絶賛した。

B：それで、現在の井上さんの主張についてはどうだい。「よりよい社会臨床」なんて、われわれでなく、ほかの学会の課題だなんて全面批判もあるようだが。

A：確かに彼はこう言っている。「現状のような問題の多いカウンセリングとは別の、よりよい社会臨床の可能性というものを『こころ』の時代ならばこそ考え

ねばならなくなっていると思われる」。ぼくはこのポジティブな言葉よりも、ちょっとねじれた別の表現の方が好きだね。「『強いられた自己決定』に知らず知らずのうちに足を踏み入れてしまったとしても、意図していない結果がそこから産み出される可能性は大事にしたい」。こちらの方が、井上さんの持ち前の繊細で優しい戦闘性とニーチェ的人間観、カウンセリングへの両義的な評価などが展開された一連の論文の意図をよく示していると思うよ。

B：「現状のカウンセリング…とは別の」という言葉が井上さんの立論の全体的な趣旨を誤解させたと言いたいのかい。

A：うん、ここは「現状のような問題の多いカウンセリングにおいてさえ潜在する、よりよい社会臨床の可能性」と書いた方がよかったね。井上さんの意図が、何らかの「よりよい」カウンセリングやセラピーなどを持ち上げ、理想的な技法を編み出そうとする心理臨床家的なものでないのは、ぼくには自明のことだ。いま社臨で、ほぼ全否定されているカウンセリングやセラピー、自己啓発セミナー、カルトなどへのまなざしを変えようという主張以外ではないよ。まっとうな提案だと思う。セラピー文化の罫を指摘し批判できる視点を所有した集団として社臨の存在は貴重だ。だが、その批判の質が、「産湯とともに赤子も流してしまう」教条的、観念的な内容のものであれば、現実の中に芽生えている変化の契機を見失い、状況のダイナミズムを捉え損なうだろう。井上さんはこう言っているんだ。

B：井上さんも大変だ。自己啓発セミナーを体験したことがないのにセミナーを批判している人に、セミナーの「よりよい」所を理解してもらうなんて難題だ。

A：ぼくは、アメリカで先住民の女性の心理学者か

ら個人的なシャーマニスティック・カウンセリングを受けたことがある。先住民だけが集まって集団で行うサウナのようなスウェット・ロジや降霊会にも出たが、それも悩みを抱えた人々のためのヒーリングの場だった。ヤマギシ会の一週間の特別講習研鑽会や某文化人類学者のワークショップ、チャネリングや座禅の会に参加したこともある。それぞれの内容は違っているし、またこれらは精神分析医やカウンセラーの行う治療面接とは雰囲気も技法も異なるものと想像している。参加者がその場を通過することでどんな行動や思想の変化を遂げるか遂げないかをミクロに分析することなく、「支配権力の側からしかるべき機能を設定されている」と抽象的に還元し、一律に否定などできないはずだ。

井上さんの主張はぼくの実感にもよく合致している。これらの場所から帰ってきたときは、少なくとも数日、何があっても寛容で、精神は疲れず、孤独感もなく大地に足が着いた穏やかで楽しい心地がしたもののさ。

B：寛容で、穏やかで楽しい個人生活。それこそ現実社会に適応させようとする権力の望むところじゃないか。

A：いや、頭が少しは冴えてこの世の矛盾に敏感になれば、他者を怖がらずに一緒に超えていこう、諸問題の解決に当たろうという気持ちにもなれた。数日はね。その後待っているのは、元の木阿弥、記憶の風化とともに日常の慣習的実践の中に流れる日々さ。かくして、お金と時間が許せばぼくも飢えた眼をして、セミナー回りをしたかもしれない。「セミナー貧乏」になり、セミナーだけが人生、と依存症に陥ったかも。でも、それはセミナーが依存症を仕掛けているというより、現実の社会が変わらない限り、そのような関係が発生してしまうということなのさ。

セミナー体験は、時に、いまの自分の生活は本当じゃない、もっと自分らしく生きられる世界があるはずだというアナザ・ワールドへの欲求を激しくかきたてる。現実の生活でその欲求が実現できなければ、リピーターとしてセミナーに埋没したり、さすらいのクライアントになっていくのは不思議じゃないから、セ

ミナーには常に自閉的で自滅的な依存症の危険が付きまとう。でも、それと共に、自己超越の仕掛けも準備されていて、優れた主宰者はそれをきちんと駆使しているはずだ。「あるがままのあなたが、本当のあなただ」「あなたはすべてとつながっている」「あなた自身が人生の主人公」。これらの言葉が、白魔術として家族や企業、セミナー自身からも離脱させ、精神の自律への旅に向かわせることもあれば、黒魔術のようにセミナーへの依存症をもたらすこともある。さまざまな欲求の層があり、セラピーへの反応も元々の欲求に応じて層に分かれている。複雑系としてのセラピー文化を、一元的にどこかに還元して捉えることは無効だと思う。

社会装置として無視できない形でせり上がってきているセラピー文化を、井上さんは、「社会臨床」のフィールドにしようというわけだ。フィールドは、戦場だ。無数の権力と対抗権力ががせめぎ合う場。それを全否定するのではなく、介入し、そこに貫かれている錯綜した権力作用を解明し、孤立した味方を発見して支援する、ゲリラ的で内在的な批判を目指していると思うよ。

B：井上さんの提案は、社臨の外では反対する者より共感する者の方が多いだろうね。

A：だからこそ、気に入らない人がいるのかもしれない。独り孤塁を守る社臨の「党派性」を貫徹するというか。シンポ『「カウンセリング・幻想と現実」を読む』で野田正彰さんが触れた林延哉さんの「我々は現代の社会を否定している」という言明は、その部分だけ取り出せば、あっと仰天だけれど、案外、こういう発言の根拠を検討することは大事かもしれない。

情報消費社会と呼ばれる現代のシステムをいかに認識するのか、どう変革するのか、現代の権力構造とは何か、どう否定するのか、非権力、脱権力はいかに可能か、変革の主体はだれか。このような課題をめぐって、ここ半世紀だけでも、モダンやポストモダンの多くの思想家、哲学者、運動家が論争を展開し、練り上げ、切り開いてきた方法や行動の水準がある。浜田寿美男さんの言う「やわでない」状況を見据え、裂け目にてこを入れる作業だ。マルクスが資本主義を相互に矛

盾する無数の力の動的な複合体として認識し、全否定の対象と考えていなかったことはヒントになる。資本主義の墓堀人は資本主義の中からしか登場しない。脱学校文化の若者は、学校体験から生まれ、セラピー文化を超える人々は、セラピーの中から日々生まれる。

B：井上さんが原理主義の砲火を浴びて、「パーミヤンの石仏」にならないことを祈るよ。

A：彼は世界的な権力分析の達成を踏まえて思考する人だ。社臨にとって貴重な存在だと思うよ。それはさておき、ぼくは社臨にやはり宗教性へのまなざしを持ってほしい。さしあたって、夏合宿報告の広瀬隆士さんの文章を素材に考えてみよう。そこでは、井上さん、石川准さん、篠原睦治さんの、それぞれの人間観が違うという判断が示されている。まあ、井上さんの二一チエ的な受苦の人間観を「抑圧解放」モデルと定義するのは、かなり意地悪だと思う。ぼくには報告されている限りの三者の違いは、力点の置き方の差異でしかない。でも、今はそれを論じたいわけじゃない。

石川さんの「ギアの入っていない」「のんびりリラックス」した状態や、篠原さんの「今ここの『憎しみ』『不快』『不信』などの負的な感情体験も…リアルな生活世界の一端として肯定も否定もしないで受けとめ、…現実をいとおしみたいと思うし、現実世界を共々に生き抜くことではないか」という「生活者」の境地から、何かしら懐かしい記憶がわいてこないかい。二人の言葉が醸し出す人間像のイメージは、親鸞、道元、良寛といった鎌倉以降の宗教者や中山みきら民衆宗教の教祖たちが語ってきた人間の本来の在り方と同型だ。共貧共存の日本の精神世界であり、アジア的な老荘タオイズムと言っても通じるものだ。彼らの言葉と宗教的なものやその今日的、世俗的形態であるセラピー文化との間にことさらに異を立てることにどんな意味があるだろう。

事実はこうだと思う。これだけ世俗化した社会であっても、宗教的なものが、人々の共通感覚として密やかに息づいている。その土壌に支えられて、石川さんや篠原さんの言説が意味の担い手たりえる。もし、宗教的なものが根絶やしになったなら、二人の言葉もまたカニの泡吹きよりむなしく響くのではない

だろうか。

庶民が民衆宗教を通して暗黙裏に求めてきた人間の幸福、理想の生活と、社臨が探究する人間観は、突き詰めれば同じ地平にあることが分かる。そのように考えておくこととおかないことの間には、決定的な差があるだろう。宗教を権威や権力への従属の装置とだけ考えている限り、これは理解しがたいことかも知れない。しかし、宗教の歴史は権力、権威と盲従に充ち満ちているが、権威を振りきり、盲従を離脱しようとするもう一つの伝統も絶えず存在してきた。「真実の自己」を求めて、「真実の自己」など存在しないと目覚めることが「真実の自己」になることであり、悟りの超越、無化こそが悟りだと主張する、自由人の系譜が存在してきた。

心理療法は、宗教の世俗の形だから、宗教由来の権威と従属が宿っている。同時に、ある種の心理療法的ワークの底流には、やはり宗教由来の権威への反発や非権力への欲求、自由への限りない憧れも宿っている。見ようとすれば、それは見えるだろう。

B：ぼくは、白隠禅師の「隻手の音声の公案」が好きなんだ。両方の手のひらが相打って音が出る。片方の手のひらだけでどんな音が出るのか。

A：きみには聞こえないのか。森羅万象が相打って奏でる美しい交響曲が。よく聴けるように、きみの耳を思いきり引っ張ってあげよう。だが、いまは右の手を前へぐっと突きだしてみる。この手は、孤独に宇宙に身をさらす井上さんの提案だ。さあ静かに、発する音を、聴いてみよ。 (2001. 4. 23)

「映画と本」で考える

## カウンセリング批判も「幻想と現実」か？

浪川新子

帯に「カウンセリングの思想と技法に疑問と批判を提起し、現代社会を考察」とある、この分厚い本を読んだ。内容量の多さに閉口したが、読み進めてみると案外読みやすく、これが社会臨床学会の本にしてはよく売れている(?)理由かも知れない。多くの著者のせいか、どことなく一貫性がなく、自分の好きなどころから本を読み始める事が出来ることも多くの読者を引きつけたのかもしれない。

1

近年、カウンセリングという言葉は「こころの病」に関してだけでなく「住まいのカウンセリング」「お肌のカウンセリング」にいたる「ほんとと笑っちゃう」世界まで使われ出している。本家本元ではどう思っているか知らないが、こう使われ出すと、本家本元の権威が損なわれるようで良い傾向だと私は思っている。この大衆化現象の背景には、人間関係の稀薄さに、商品としての売り込みが成功しているのがうかがえる。資本主義は凄い。

「…友人や親にいつも“値踏み”されている…日常の人間関係」という認識から離れられない人が多いということだ。小沢さんは、人の「値踏み、切り捨て、排除の役割を臨床心理学が歴史的に請け負ってきた」と述べる。徹底した近代の個人還元主義によりそして臨床心理学が発展してきたのだ。小沢さんの論は日本におけるカウンセリング小史へと明快に進む。

私は大学卒業後、ロジャースのカウンセリングの勉強をしていたのだが、それは大学で伊東博の授業を受けたのにおおいに影響されたことである。大学を拠点にしてカウンセリングが広がったその真っ只中に私は居たのである。幸か不幸かカウンセリングの勉強の最中にどうもこれは嘘っぱちではないかと気が付き始

め、「最近のあなたはなぜか、かたくなになっている」と講師に指摘され、私はカウンセリングの勉強を止めた。60年後半という社会のなかに身をおいていたのでそんなことも考えられたと思う。企業の人事部長や寮の管理者や教育委員会の指導主事のような人が多く、現場の教員もほとんどいなかった時代である。そんなこんなで当時カウンセリングを学ぼうとしていた私自身の位置が小沢さんのおかげで、すっきり整理ができたようだ。

それにしても臨床心理学会において臨床心理士の国家資格問題を契機に問い直された、カウンセリングをする側とされる側の問題は、未だに残され続けられている問題であるはずである。それでもなおかつ、昨今はカウンセリングを受ける人カウンセラーを目指す人が多いのというのは、それだけ社会の状況がひどくなっているということなのだろうか。臓器移植においてレシビエントが一個以上の臓器を必要とするのと同様に、カウンセリングを受ける人は一人以上のカウンセラーを必要としているので、もしかしたら本当はカウンセラーの数の方が多いのではないかとも思ってしまうが。新設大学院に臨床心理学のコースが増えていることを聞くとこの傾向はもっと続くに違いない。せめて、学生に就職は厳しいよと言ってあげたい。カウンセリングの場を転々としている人は多い。もちろん、転々とさせられているのだけれども。

小沢さんはカウンセリングの人間管理の仕組みを中島さんの論文を引きながら述べていく。中島さんはカウンセリングの問題を、言葉の問題から捉えている。(自分が自分に)語らせる言葉が自分で気がついている以上のものに発展していくことは、元々日常生活でもよくあることである。しかし、日常生活では言葉はその時の状況や関係や体の表現に裏打ちされて自分の中

に帰っていくものであるのに、カウンセリング場面では、ことさらに言葉だけの空間だから、妙に意味深く自分に帰ってしまうのではないだろうか。もっとも言葉だけという批判にたいしてカウンセラーが「お触り」というのもあるらしい(国家による売春制度を提唱している輩が喜びそうだ)。

カウンセリングはまた人の感情をコントロールしていく。小沢さんのあげている子供をなだめる親の例は具体的だ。カウンセリング技法を取り入れた「親業」に精を出すまでもなく、親の心得本は山と積まれている。このような本は、全部目的別だ。子供を何々にする方法。こうして人は「希望という名の電車」に乗ろうとそれぞれが自己決定して、別々の希望列車に乗って出発する。だから、途中事故でも会おうものならこれは隣の人に相談も出来ない。カウンセリングがかくして必要になるというわけだろうか。「問題」を抱えた子を持った親でカウンセリングに通っている人は多いのである。小沢さんはそこいらを丁寧に語る。

心優しき薬物中毒の青年がカウンセラーを「思想警察とよんでもいいな」といっているのは(アーヴィン・ウェルシュ『トレイン・スポッティング』青山出版社1996)、まさに的を射ていて面白かったのだが、ヤクに走るこれらの若者も社会の抑圧の賜物であるとするれば、私たちは皆堂々巡りの輪の中にすっぽりはまってしまうのだ。小沢さんは「抑圧の姿を見せないカウンセリングは学校管理、コミュニティ管理の役割を負う、社会体制の寵児である」という。すでに、いろいろな場面でカウンセラーを訪れる人は多くの抑圧を受けており、抑圧があってはならないという幻想に取り込まれている人なのである。抑圧があって閉じこもらなくてはいられないようになったら、閉じこもっていればいいのだと、閉じこもっていたこともある私は今になって思う。「明るく元気」が流行る昨今にあっては、「暗く病がち」は捨てたものではない。

さて、このように自分の好き勝手に読んで「カウンセリングの歴史と原理」だが、少し気に掛かるところがあった。心のケアの項で、精神科の野田正彰についてふれながら心のケア概念の危うさを述べている。しかし、野田の阪神大震災時の「心のケア」批判はあくま

でもマスコミや多くの心理学者や専門家によって作り上げられた「心のケア」論に対して精神科医として物申しているのである(野田正彰『災害救援』岩波新書1995)。その意味で、小沢さんが進めてきた論調とは軸が異なるものと思える。野田正彰は災害時の心のケアはそんなに簡単なものではないよ、きちんとした災害精神医学による配慮が必要なんだよといっているのである。私には野田のいうちやちな知識しか持ち合わせず、大騒ぎした輩のほうがまだましであると思える。ただし、この新聞上の野田の文を私は読んでいないのでその文脈では野田の真意はどうだったか私には分からないので無責任な指摘になっているかも知れない。

また、関係の商品化にどう抗するかを論ずる項では、生きる力について「もしそういう力があるとするなら、それは関係を作りあい維持する力のことである」とある。私は、「生きる力」は「今生きている人」にはある力なのでどんな人にもある訳で、自殺する人にもその死に至る寸前まで備わっているものなのだと思う。だから、それをあるとすればというように解釈を広げる必要は全く無い。「障害」児といわれる子どもの教育を考える場では多く「生きる力」が論じられてきた。「関係を作りあい維持していく力」なども早速使われそうだし、いやもう使われていて、そのために「特別な教育」が必要なのだと言われ続けている。改めて目標になり得る言葉の言い換えは必要ないのではないか。人は人の中に居続けることによって「ただ今生きている」のである。

## 2

「はじめに——『復習』を少し」とあるが、これ「復習」でないようだ。「学校カウンセリング」と心理テストを問う」の中島さん、篠原さん、佐々木さんの論に対しての林さんの読書感想であり、その中では、三人との微妙な違いを林さんは表明している。

林さんは、中島さんの学校教育におけるカウンセリング批判を例にとりながら、「学校が現にあり、その学校について語るときせめてどうあってはいい、どうであってはほしくないという思いはやはりある…」とい

う。この気持ちから見る時、林さんにとって「ロジャースの学習者中心の学校は一定の魅力を持っている」のだ。

また篠原さんの「登校拒否を病気と解釈することも、積極的に行かないことを意味づけることもせず、でも、『共に学校に行くこと』を模索しよう。なぜなら、学校にいった子どもも行ってない子どもも同じ『学校化社会』に生きているのだから」という提案を、「苦肉」の提案とみなす。そうして「学校化社会の諸矛盾の現場である学校を肯定してしまうか、改善しようという動きに繋がらざる得なくなるし」と展開して、これまでの議論を指して「この学校改善の運動は…」とまで言い切る。おいおいちょっと待ってよ、と私は思う。

佐々木さんでは同書の中の「我々の立場と主張」を揚げながら「当たり前の人間関係」の変化している価値観の下では「当たり前」はを根拠にすることはできないし、「当たり前」を「人間として当たり前」とし捉えると「人権」という概念と結びついていくとしている。林さんはいろいろ文句があるようなないような論法で進めしてしまうので私にはなかなか読み取りにくい。

日本臨床心理学会の越智浩二郎が『「当たり前」のつきあい』を『臨床的なかわり』の中の『専門的かわり』の一つとして位置づけている」ことを引合いに出しながら、「当たり前の人間関係」をさぐる。そして、「実はいま僕たちの目の前に起きつつある、しばしば目にするような関係ではない関係、ということをついてるのだ」と林さんは考える。さらに「その内実は、といえばそれは明確ではない」のだという。なんだか言葉の迷路にはまったような騙されたような気がしてくる。

「当たり前」については私もよく考える。私は、「障害児・者といわれている人が、私たちのいま生きている世の中の価値観から見ても明らかに「当たり前でない」ことを強いられている時に、「当たり前と一緒にしよう」という風に使ってきた。その意味で、「当たり前」の意味はその時その時で「どのようにも」変化するものだと考える。だからそれは時には、ほとんど「非常識」の範疇にはいることさえあるかもしれない。

変化する社会の価値観を、林さんは「夫婦は一生を添い遂げるのが当たり前」という例を出して説明して

いる。しかし、今も昔もこの「当たり前」から逸脱した人が、「だけど、そういう事だってあるのだよ。男と女、別れる事だってあるさ。それで『当たり前』と泣いたりわめいたり居直ったりしながら生きてきたのではないだろうか。「当たり前」はその時その時で勝手にに使うのだ。だからその時その場所その空間を共有した者の間で点検が必要で、それが篠原さんの言う「せめぎあう」という言葉なのではないだろうか。だから一つの「現状への抵抗の姿勢なのかもしれない」というのは近い気がするが、それが「人権」という概念と結びつくかという、これはやはりそうではない。

例えば林さんは就労の問題で「障害を理由に就労できないのは『人間として当たり前の生存権』が侵害されていることになるし、やはり人間として当たり前の社会に参加する権利が侵害されていることにもなる」と例を出して、「『人権』とは抵抗の言葉だ」と結んでいる。しかし、私には、実はこういう飛躍の言葉の狭間に「障害児」といわれる人の「当たり前」でない「生きる場所」が存在していると本当に切なく思ってしまう。林さんの位置が見えてこないのである。

さて、林さんはロジャースの教育思想という観点からそれが日本の学校教育に与えた影響について述べる。ロジャースに林さんはずいぶん優しい。

林さんが「学習者中心の学校」に一定の魅力を持っていれば、これは当然のことだ。ロジャースは「自立的主体的な個人を基本として、その個人の集合体としての民主的な社会」を描き、その様な社会をつくるにあたっての教育の重要性を主張している点を挙げて、林さんは「ロジャースに稀薄だったのは人間の共同的なあり方、類としての存在を基底に据えるという発想であった」とこれも優しく述べている。私は、ここはロジャースが未来の理想社会まで展望していた人とすれば極めて危険な人物だったと思わざるえない。つまりロジャースの描く未来社会そのものが人間の全精神的統合を目指しているように思えるからである。ナチスの初期に似ている。私は勉強不足でロジャースを少ししか読んでいないが、改めてあの時のあのナントも知れない「嫌な感じ」が思い出された。

また、ロジャースの教育思想が戦後の「個人の価値

と尊厳」に基礎をおく民主主義教育体制の中で受け入れられ1960年代の経済の高度成長期に流行し1980年代の「いじめ」「登校拒否」が社会問題化していくにしたがってロジャース派が衰退していくことなどが改めて良く分かった。「正しい批判をされて」受け入れられなかったにしても、それはそれで良かったことではないかと私は思うのだが。しかし「一元的な基準による評価・序列化」がかなり批判され、複雑化してきている今日この頃では、またロジャースが流行り出さないともかぎらないぞ、なんて思ってしまうのだ。なんとなれば教育にしても全人格的な育成などと叫ばれている時代なのだから。

### 3

赤松さんは自分史と重ね合わせながら、戦後精神医療とカウンセリングを語っていく。ロール・シャッハテストと心理面接を学びながら疑問を感じる。そして、面接者と被面接者との閉じられた関係がもたらす人格の再体制化とは何かと考え続けていくのだ。私は自分のかつての職業(施設職員と教員)と重ね合わせていく。赤松さんがはじめて精神病棟に足を踏み入れた時の衝撃は、私が初めて施設を訪れたときの衝撃に似ている。違うのは赤松さんが矛盾に満ちた心理職として患者側に立ち常に患者の日常に付き合い続けようとした一方、私は「すぐここんところ辞めてやる」と思い、「障害児」といわれる子ども達と一緒に食事をするのも拒否したことであり、また、ただちに「わけの分からない世界に溶け込んでぼんやりと過ごして来たことである。私は結局自分の職業を通してしか「障害」児といわれる子どもに寄り添うことは出来なかった。

赤松さんは常に「閉ざされた病棟」の中で自分の自己変革を求める。その中で精神療法が一对一の関係ゆえに治療者優位の論理に支えられていることを自覚しながら「治療の中に閉ざすことでなく、開かれた関係づくりを」と模索し続けるのである。そして「精神病」として受診する本人が「自分のありのままを認められていない責め苦に緊張している姿」に出会う。そして「開かれ支え合う関係」をつくっていく。

このような中で、赤松さんは「了解不能という刻印」

という概念について考える。赤松さんによれば、ヤスパースは了解することを追及しついに「真正妄想」という概念にたどりつき、フーコーは社会文化のあり方との関係ではみ出す少数派を「病的なもの」として排除してきたと言っている。そして赤松さんは、そのヤスパースとフーコーの「病的体験」への捉え方の違いにテーマの鍵があると言う(なんだか難しい)。「社会的に少数の者を遠ざけ閉じ込めるほどに了解し難い溝は深まる」(これはヤスパースか)、「この差異があろうと交流しあう関係が開かれる中に、解り合い、支え合う共同感も作られる」(これはフーコーを発展させたものか)と赤松さんの議論は進められる。それでは、私たちは「了解可能」を目指した関係をあくまで追及しなければならぬのだろうか。そうとすればそこにも「了解する人」と「了解される人」の問題が残りはしないだろうか。

私自身の事で言えば、「障害」児といわれる子どもとの関係で「了解可能」と思ったことはない。「了解しよう」とは余り考えなかった。付き合い合えば付き合い合うほど不思議な存在だ。いろいろな経験から、私は人間同士に「分かりあえる」関係があるとは思えなくなった。しかし、「わかりあえる関係」がなくても一緒に居ることは出来るのだ。

私の従兄弟は「精神病」といわれて、入院と退院を繰り返していた「不思議な人」だった。そして、子どもながらに大人たちの彼に対する差別感を感じ取っていた。時々、私のうちに来ていたが、なんとも不思議な感じを持った人で私はただじっと眺めていたのを思い出す。伯母が「せっかく戦争から帰ったのに訳の分からんごっとなって」と嘆いていた。彼が病院で死んだ時、母が「死んで良かったつ」と言っていたのを覚えている。

従兄弟と私はただ一緒に居たのである。「精神病」の人と「一緒に居た」という感覚はこの時よりないが、了解可能を目指す赤松さんの提案は「正常」といわれている今の私には息苦しさを感じてしまうような気がする。

「精神病患者」の置かれている現状は深刻である。フーコーのいう社会文化的投影としての「病者」はますます

増えているのではないか。「精神病院」が開かれていったときに誰でもが「心の病」として「診療内科」にかかるようになり、カウンセラーは大流行になるだろう。そしてそこにはもっと大きな差別が横たわる。良心的カウンセラーほど「了解可能」に向かう。でもその先は私には見えない。「ただ、一緒に居るだけ、そして今の現状を暴いていく」ことしか出来ないのではないだろうか。

## 4

NHKで「プロジェクトX」という番組が放映されていた。いろいろな方面のいろんなプロジェクトが紹介されていた。感動的なものもある。沖縄の高校野球が甲子園に出場する話、戦乱終了後のカンボジアに橋を架ける話、中島みゆきの「地上の星」の歌に乗って男たちの物語が始まる。中島浩籌さんの「生涯学習・管理社会におけるカウンセリング」を読みながら何故、中島みゆきの歌と共にこの番組を思い出してしまった。「みんなどこへいく」ののだろうか。

中島さんは生涯学習社会におけるソフトな管理技術としてのカウンセリングについて述べる。マズローの自己実現の概念が急激に変化する社会が求める人間像と重なる事を丁寧に説明している。カウンセリングの技術が内面を重視しながら、全ての内面を認めるわけではなくある一定の方向への変化だけを健全なものとしてみる眼差しを持つこと、そして個人の変化を問題から切り放してしまうやり方を問題としている。

「生涯学習」は「いつでもどこでも学べるシステムを」という標語で表現されることが多いそうなのだけど、私には「生涯学習しなさい」と言われているように感じていた。これではまるで私たちは学校だけでなく、いつもいつも学習の機会を与えられて鞭で追い立てられているようだ。私など忙しくて学ぶ暇なんかないのである。最近の電話会社の多様化だけでも「急激に変化する社会」が家の中にも迫ってきてあたふたしているこのごろである。

電話だけでなく世の中が複雑になるとやはり変化していく社会に適応していくための学習は必要か。最近、パソコン教室が盛んで私の町ではほぼ全員が講習

を受けるのではないかと思われるほどの教室の数である。これでパソコンが沢山売れるだろうなと思っていたのだが、中島さんの説明でこれなんだなと思える。

そういう私の家にもパソコンは二台もあるのだ。メールも最初はやっていたが直接声が聞こえる電話の方が用事がお互いに身に入る。「たえず進歩している科学技術を身につけた」けれども「学んでいこうとする意欲を持ち続ける」ことが出来なかったのである。自分が落ちこぼれのように感じる。だがしかし、よく考えてみると、これが畏ではないか、この感じをうまく利用されて、私らを学習に追い立てる。

中島さんの言うソフトな管理社会では「休みなき管理」が広がっていくそうである。この世に一人だけで生きているわけではない私はこの「休みなき管理社会」からどうして逃れることが出来るであろうか。

とこういうふうに私の頭の中島さんを読み進めていくうちに日常生活の中で感じている私の不調和な気持ちがかんたん拡大されてあらぬところに発展してしまう。発展した挙げ句はまた中島さんに戻って発展したまま中島さんは何故自殺した杉本君や不登校の子や学校にそんなにこだわるのかと、(これ又こだわっている)私を発見する。杉本君の自殺はマスコミや同じ神奈川で教員をやっていた私は新聞や管理職から大体的話は聞いている。ひどい話なのだが、私は自殺してしまった教員にまずは同情してしまった。他は私にはあまり自分の問題として考えられなかったのである。だから、杉本君の「学校の破産」という言葉もそれ以上の意味をもってわたしに迫ってこない。当然杉本君の問題提起という風には受け取らない。そういう私と中島さんの距離が、中島さんのこの項を読んでいて、妙な不調和を感じてしまうのかも知れない。生涯学習・管理社会におけるカウンセリングの問題の筋道としては私にもよく分かったつもりなのだが最後の方で杉本君の問題とかさねあわせることが私にはどうしてもできない。

## 5

井上さんの「消費社会の神話としてのカウンセリング」全体の論調は極めて時代的なものである。今社会

学なる学問は面白そうだ。「風邪の谷のナウシカ」解説本なんかも社会学者が書いているので漫画版「ナウシカ」が好きな私はわざわざ購入して読んだが、解説ではなく、意味有り気な説明本だった。でも、朝日新聞の読書欄で取り上げたのだ。最近妙にサブカルチャーを扱った論文が多いがそういうことを考えるのも社会学なのか、と最近分かったのだ。話としてはナウくて面白い。と「ナウシカ」解説本では言っていたが、井上さんの「新世紀エヴァンゲリオン」解説本ではなくて視聴者のアイデンティティの動揺みたいなことを言いたかったらしいのだが、井上さんも言っているが「新世紀エヴァンゲリオン」はちょっと古い。今では浜崎あゆみらしい。今に浜崎あゆみ本が社会学者の手によって出版されるのに違いない。もしかするともう出版されているかもしれない。

井上さんは「エヴァ」や浜崎あゆみに共鳴する若い層から発せられる「心の空洞化」に対する切実な声を受けとめたいがために「オルタナティブなカウンセリングへの色気」や「セミナープログラムそのものへの色気」があるのだろう。しかし、私でさえ若者が「心の空洞化」を抱えていないとは思わないし、カウンセリングに通う人が少ないとは思わない。しかし、その事と、それを利用した商売が流行していること、しかも一定の方向性を持って現在の社会の中で有効性を持つようとしていることを批判することとは異なる次元の話ではないだろうか。

「セミナープログラム」での「自分はこれでいいのだ」というふうに気付けばいいのだろうか。消費社会の神話としてのカウンセリングをいろんな文献を持ち出して批判しておいて、他人に対して「それでいいんだ」なんて言う資格があるとすれば、井上さん自身がすでにカウンセラー的人格を持ち始めているのではないだろうかなど私は考えてしまう。この本を読んだ人はきっと少なくとも「自己開発セミナー」には参加しないであろう。「心の空洞」を抱えて「セミナー」に興味があった人でも愚弄されているとしか思わないだろうから。

自己啓発セミナーに関しては私自身の身近で問題が起こった。セミナーに参加して自分自身も周りの人も今日の続きの明日の生活を続けにくくなり、長い間、

不都合のある生活を強いられることになったのである。私なりに手探りで調べたりもしたのだが、このような例は精神科医からも報告されている。この子は阪神大震災のボランティアの中で誘われ、ご存じのように一度体験した者が、他の人を勧誘するシステムで何人かの若者がセミナーの講習を受けている事実を知ったとき、私は精神分析の人達の批判、「精神分析的な手法をいい加減に使って」商品化しているという批判さえも受け入れられるというくらいに激怒してしまった。そしてあれほど評価された阪神大震災のボランティアに駆けつけた若者、勿論それぞれにいろんな理由があって駆けつけたと思うが、そういう若者が対象になったことでセミナーの巧妙さに驚かされたのだった。

セミナーは以前は会社の研修などで多く利用されてきたが、資本家はその限界を悟って、今では余り利用していないらしくて、さすがだと思わせられたが、現在では新興宗教団体などが多く利用しているらしい。まさに、消費社会の神話なのだ。そんな中で「セミナープログラムそのものへの色気」など自ら餌食を差し出すこと以外の意味はないと思う。実際少しばかりの有効性があるからといって「色気」をだすと「ミイラ取りがミイラになる」のではないだろうか。性的に差別を受けている男たちがいるからといって、搾取されない売春制度をなどといってる輩がいるのだけれど、少しは慰められるから「心」を売りなさいと勧めているようなものだと思ってしまう。たとえ、売春制度が出来ても性的に差別される男は出てくるだろうし、セミナーに参加しても「心の空洞化」は埋められないのだから。

井上さんにはよそ見をせずに、消費社会におけるカウンセリングの果たしている役割を学者としてきっちり追求して貰いたいと思う。

## 6

読書をしての何よりの楽しみは、新しいことが分かりその事で自分の状況を新しい角度で照らしてもらえ、その事に読みながら頷けることである。どんな本でも私にそんな楽しみを与えてくれるのは良い本なの

だ。石川さんのこの項はそういった意味で新鮮だった。感情労働という言葉は聞いていたけれど、改めて知ってみるとなかなか面白い概念だった。そうか、私は感情労働者だったのだ。教員を辞めて初めて自分が大きなストレスを抱えていたことに気づいた。気がつかなかったのは多分同じ様な体験を持ちストレスの持つ意味を理解してくれる仲間がいたので、自分で気がつかないうちに燃え尽きもせず、教員もお仕事と割り切り、しかもそんな自己嫌悪にも陥らずに済んだと思える。自分のことは自分でよく分からないのでこう説明して貰うとなかなか面白い。特に、カウンセリング的ものの考え方と対比させてあるので分かりやすい。カウンセリングの持ついかかわしさが露になってくる。しかし、「安易に妥協せずに自己反省を続けることである。そして、にもかかわらず実践を止めないことである」というのはあまりにもきついことである。辞めてしまった私は、学校現場に残っている仲間達のことを思う。

## 7

佐々木さんがお書きになったものやお話は何度か聞いたことがあるので読んでいる側から、以前の話とごちゃごちゃになってしまっていて私はこの本では、良い読者といえない。佐々木さんはスクールカウンセラー事業の推進者として関わってきた村山正治氏の書いたものからスクールカウンセラーの性格を批判的に取り上げている。近代社会の矛盾の中で生まれた学校をめぐる様々な問題を近代社会を支える方向でのスクールカウンセラーで強化しようとしても解決にはならない。臨床心理士という資格社会の中に新たな資格を持ち込むことによって、新たな権威をつくり、それが必ず利権を産み、ますます問題を複雑化することになる。昔、施設に勤めていたとき、資格を持っている人は保母さんくらいで、私たちは児童指導員と呼ばれていた。ところが、今施設の中では、いろんな資格を持った人が働いているらしい。勿論学校も多種多様な資格を持つ人が増えている。

臨床心理士の資格があると、教員に採用されやすいらしい。認定心理士だか臨床心理士だか学校心理士だ

か知らないけれどこういろいろでくれば、どれが偉いか、どれが専門的か、選択する苦勞を再びしよい込むことになって、学校で問題有りと言われた親子は大変だ。お金と暇と「知的」財産がある人なら専門家選びもうまく行くかも知れないが、そうでない人は妙なしがらみに縛られて、大変だろうと思ってしまう。佐々木さんは華道や茶道の家元や盆天と臨床心理士との共通点を上げ、どこが違うかということ、臨床心理士の方は国家が関与しているということ大学の養成課程を経るということだけだといっている。なんだかとても説得力があって可笑しい。

最近、教え子から良く相談を受ける。大学出たけど就職がない。資格をとって就職したい、については、どんな大学院に行けばよいだろうか。どんな学校にいけばよいだろうか、と私には何とも答えようのない相談ばかりだ。まだこれから学校へ行くのか？ 果たしてその資格を取ったら就職できるのかと問い詰めると、決まって、そのあとは相談に来なくなる。ある子なんか法律を学んでそれを生かした仕事につきたくて数社受けたが資格がないため落ちてしまった。これから司法書士の資格を取るために学校へ行くと言う。浪人して、就職留年してまだそんなことを言ってるかとなりがたりたてたらやっと思えて、法律事務所の事務員をやっ楽しんでるのだが、資格を持ってないと不安という子は多い。私の知らない英語の資格など言われても困ってしまうのだが、佐々木さんが二十九種も挙げているのを知ると知らなくて結構と思ってしまう。自分が教えた子供がいい年になってもいつまでもこういうことをしているのを見るのは辛い。小学校で教えた私が悪いのかとまで思ってしまう。でもこれは私のせいではないと佐々木さんはいつてくれるので嬉しい。

現在の日本で起こっている教育にかかわるさまざまな問題は日本特有なものではなく、世界中で起こっているらしい。しかし、私はネパールでもバングラデシュでもそんな話は全く聞かなかった。きっと先進国と言われているところは大人が疲れて、子供も疲れてしまっているのだ。でも、高校進学率九十パーセントの学歴インフレの国が下に戻るはずもない。佐々木さんはただ大人と子供が一緒に居る場所さえあれば、

心理的医学的な治療は必要ないという。佐々木さんの「同居」の話は別のどこかでも読んだことがあるが、それしかないというか出来ないというか、全くそのとおりだと思う。いい加減、大人は子供のことについてあでもないこうでもないというのを止めるべきだと思う。「うるせいなー」という声が聞こえないのだろうか。

8

最近私は「過激派」になってしまった。ずいぶん古い言葉なのだし、昔から「過激派」は嫌いだったにもかかわらず。あの何でも日米帝国主義のせいにするのがわけが分からず、お前らは無知だから騙されているんだぞといった説教振りがとても嫌だった。でも、今私は何時でも何処でも心理主義がはびこってしまって、私の中ではつながっているのだけれど、言葉としては、「マスコミと心理学者のせいだ」といってしまうことが多いからである。新聞に毒づき、テレビに唾かける(それにしてもよくテレビを見ている)。佐賀のバスジャック事件はまさに象徴的だった。あの訳知り顔の心理学者やマスコミをどうにかしてもらいたいと思う。でも、批判するのも難しいらしい。下巻の方を読むと学校現場では、批判すら出来ないようだ。私の属していた組合の中でも、不登校問題をやっていた人の中には、スクールカウンセラーは学校の風通しを良くするなんて言っていた人が居たが、風通しをよくするどころか問題をさらに複雑にさせているにすぎないと思う。スクールカウンセラーの人に依ると言う人もいたが、そんなことはない。「良いスクールカウンセラー」ならよい訳ではない。システムとして入ってくる問題であるから、これは絶対反対しなければならないと思うのだが、教員も疲れているのだろう、声は小さい。すでに私の近所でもスクールカウンセラーが現場に降りてきた。私の孫たちはその学校に通うだろう。社会臨床学会くらいは最後まで批判をしてもらいたい。とりあえず、どこでものさばってくるスクールカウンセラーの河合隼雄という人をきちんと批判してもらいたい。この本を読んで私が一番思ったことだ。

（“この場所”から）

## 小学校1年生とのドタバタな日々

大垣 智紀

せんせいが  
わたしのなまえをよびました  
せんせいは  
わたしのなまえをしっているんだね

せんせいが  
めがねをはずしてふきました  
せんせいは  
ちよっぴりおとうさんににている

せんせいは  
みなみのしまでうまれたんだって  
せんせいの  
おかあさんはなくなったんだって

せんせいは  
なかよくしようといいました  
せんせいも  
ともだちがほしいのかな

『いちねんせい』（谷川俊太郎）より

はじめての1年生担任で、いたいけなおさなごたちと上の詩のようなのんびりとした牧歌的な日々をすごせると思っていたら、いまだきそりゃたしかに大マチガイだった。

おとなしくしてしてくれたのは、入学して2週間くらいまでで、その頃は、ボクの話をつぶらな瞳で真摯にうけとめる天使のようなお子様たちだった。

ところが、「学校」という場と、「オーガキ」というオ

トナに慣れるにしたがって子どもたちはみるみる「ガキんちょ」になっていったのだった。おのれのキャラをストレートにくりだす子どもたちをみて、そうかそうかそうきたか、ならば「がきんちょ」v.s「おーがきんちょ」でいっちゃったろーじゃないの、ってな気分で40人の子どもたちと日々、ドタバタやっている。

前々から、1年生を受けもったら、次第に「学校」化されていく（というよりボくらがしていくのだけれど・・・）子どもたちの姿をつぶさにながめてみたい、などと思っていたものだが、そして今じゃかなりのところまで幼稚園や保育園で集団化されている子どもたちなのだが、あらためて見渡してみるに、ちっとも、いっこうに「学校」化してくれない愉快でしたたかな面々なのであった。

学校（ボク）の都合では生きてないアナーキスト(?)たちなのであった。とほほ。

朝や休み時間にボクに繰りだされる攻撃は、例えば、殴る蹴る（小さいくせに結構痛いんだ、これが）、机の上から背中にとびつく、よじのぼる（木じゃないっての）、ぶらさがる、つねる、ふむ、なめる、かじるにカンチョー、ちんもみ（10年たってやってごらんっての）、ジッパーはさげるしパンツはみるし、シャツの中に頭は入れるし、すね毛は抜くし、注射は打つし着がえをのぞく・・・と油断もスキもあったもんじゃない。

こんなことばかりしているのなら疲れるけれどシアワセなんだけど、ボクにも授業があるわけで、なだめすかして、怒鳴ってオドして席につかせて字やたし算を教えているのだ。とはいえ、つきあってくれるのははじめの15分くらいで、次第にドタバタが始まり、やがてボクは怒号の人となるのであった。みーんな勉強は好きじゃないんです。朝の9時から「ねえ、お休み時

間まだあ？」なんて真剣にきかれてしまうと、こちらもお休みしたくなる。あるいは休み時間が終わってもちっとも帰ってこない子を捜してみると、だ一れもないグラウンドの片すみの砂場で黙々と遊び続ける3人組がいたりするのだ。

そんなこんなの子どもたちが帰るころには、ボクは身も心もホントにくたくたになる。はげしい日々なのだ。

しかし、こんなドタバタな日々も9月、運動会の練習が始まると少々変化があらわれた。といっても子どもたちは相変わらずだったのだが、まさにそのことがボクを苛立たせることになってしまった。練習中、「走る順に並ぶ」とか「ダンスをおぼえる」とかできない面々が続出して、隣のクラスや2年生も一緒にやってることもあってその乱れが目についてしまった(「諧調はもはや美ではない。美はただ乱調にある」(大杉栄)というのに!)怒鳴りつける、おどかすなんてことの続く痛恨の日々があったのだ。

考えていることとはうらはらの感情がほとぼってしまうのだった。

そのたびに自己嫌悪し、夜の酒量も増えてしまうのだが、翌日はまたくり返して、子どもとの関係だてぎくしゃくしていた。子どもたちも心なしかボクと距離をおくようになった気がした。

ところがふと、「あ、そうか、運動会はたんなる行事なのではなくて、子どもたちを『学校』化させる強力な装置なのだ」と思うにいたってようやくおさまきながら平静を取り戻すことができたように思う。

運動会には、「きちんと並ぶ」「相手と競う」「みんなと同じようにする」「がまんする」「待つ」といった学校的価値がつまっていてそれは「参観」が伴うことで強化される。

これまで「並ぶ」といったって「来た順」に適当にやっけてた子たちに種目ごとの並び順を即座にせよ、というのも酷なことだし、体育の時間は、ボールあそびやフーフーフやロープでブランコしたり跳び箱とマットでポケモンごっこしたりと、てんでバラバラなこととしてたのに、急に「みんなと一緒に!」といってもそりゃ、つらい。

だからといって「すまぬ、すまぬ、こんなアタシが悪かった、どうか、この通り・・・」と今さら謝るわけにもいかず、せめてものお詫びの気持ちをこめて「お菓子のサンスー」などをやってお茶をにごし、またあらためて格闘的労働の日々は続くのだった。

さてさて、こんなはげしい日々はいつまで続くのだろうか・・・と思案していると、同僚から「1年生も2年生になるとぐっと落ち着くわよ、大丈夫よ」などと言われてしまって、「うーむそうか、あと半年の辛抱か・・・」と思う反面、「この子たちも、2年生になると落ち着いてしまうのか・・・それもちょいと面白くないなあ」などと倒錯した気分になるのだった。

やりたい放題、好き勝手に過ごしているようにみえる子どもたちであるけれど、そりゃもちろんストレスもあるだろう。ボクの日々の弾圧、抑圧によるもの、友だちとの関係によるもの、それからおそらく制度としての「学校」によるものなど。4月と9月に学校に来れない日が続いた子もいたし、毎朝「学校休みたい」と親に訴えている、という子もいる。その子は夏休みの終わりに、「また学校が始まると思うと悲しい」と親に洩らしたそうで、そんな話を聞いたボクも悲しい。

とはいえいまだきの1年生と付きあうのはホントに楽しい。疲れるし、苛立つことも多いけれど、心の底から腹をかかえて笑ってしまう出来事も、次々と起こる。それから、「学校」のありようについて考えさせられることも多い。たいていはドタバタの中で忘れてしまったり、無意識に「学校」を正当化して気にもとめなかつたりしているのだろうが、もっともっとたくさん刺激されたいと思うけげな今日このごろなのだ。

(2000.10. 第50次湘南教研レポート「“登校拒否”を考える」より、一部修正)

編集後記

今日は5月20日。ニュース42号の発送作業を終え、一息つく間もなくこの9巻1号の編集作業を行っている。ようやく終わりの目途が立ちつつあるが、実は予定より一週間遅れてしまっている。

あとは編集長からの「はじめに」と「編集後記」を受け取って貼り込み、印刷するだけだ。今日、明日で終わる仕事だが、そのあとに会計の最終的なまとめをしなければならない。

また、来週の日曜日は運営委員会があり、その翌週の日曜日にはこの雑誌の発送作業が控えている。つまり3週連続で日曜日が「楽しい日曜日」になるわけである。

これが一つの山場だとすると、その次に控えているのが総会である。昨年総会も司会を引き受けてしまったが、愚かなことに今年も引き受け手がなかったため申し出てしまった。確か昨年の総会が終わったときは「もうやるまい」と堅く心に誓ったはずであった。忘れっぽい性格は何かならないのかと思う今日この頃である。

(平井)

第9回総会は北海道の札幌学院大で開かれます。社会臨床ニュース42号には井上芳保さんが「ライラックの花咲くキャンパスでお会いしましょう」と書き、花崎皋平さんも「ピロードのような柔らかな風、白や紫のライラックの花と香り、ポプラの木の葉の鳴る音」と北海道の6月を表現しています。僕は6月に北海道に行ったことはなく、咲き乱れたライラックも見たことはありません。ライラックの花は知っているのですが、しょぼしょぼとしたイメージしかなく、ぜひ香り豊かに咲き乱れたライラックを見たい、という気分で充たされています。6月の北海道はよさそうだな・・・。

(中島)

---

社会臨床雑誌 第9巻第1号

◆発行年月日◆

2001年06月03日

◆発行者◆

日本社会臨床学会(代表 篠原睦治)

事務局 ..... 茨城県水戸市文京2-1-1茨城大学教育学部情報教育講座林研究室

電子メール ..... rasen@ipc.ibaraki.ac.jp

WWW ..... <http://www.infocul.edu.ibaraki.ac.jp/syarin/>

電話/FAX ..... 029-228-8314

郵便振替 ..... 00170-9-707357

◆印刷所◆

有限会社ケイエム・プリント

東京都文京区白山3-3-13

電話 : 03-3813-7921

---

PSYCHIATRY  
精神医療 / 22号

特集 ひきこもり

精神医療  
編集委員会  
【編】

日本の些末な社会問題から、世界史的規模の問題まで、何が「ひきこもり」を醸成しているのか？この困難な課題に挑んだ、精神科医のレポート！

◎【座談会】「ひきこもり」からみえてくる医療と社会（芹沢俊介×高岡健×藤沢敏雄×高木俊介）／ひきこもりと小さな思想（塚本千秋）／コミュニケーションからみたひきこもり（高田知二）／「ひきこもり」の支援（幸田有史）／「ひきこもり」と漱石の視点（立花光雄）／他。

21号【特集】現代不況社会とメンタルヘルス  
◎内田江里／墨岡孝／望月清隆／浅野弘毅／佐高信／原敬造／芝伸太郎／他。

20号【特集】学校の崩壊  
◎片桐健司／竹村洋介／藤井誠二／山登敬之／石川憲彦／岡崎勝／高岡健／他。

19号【特集】人間の尊厳と精神医療  
◎生瀬克己／黒川洋治／吉田貞子／藤沢敏雄／三橋良子／駒井洋子／山根寛／他。

18号【特集】精神医療のなかの女性  
◎上野千鶴子／阿保順子／高橋亜由美／生村吾郎／松井律子／中島直／他。

17号【特集】コミュニティーと障害文化  
◎奥村宣久／藤田健三／阿保順子／島田文直／生村吾郎／藤沢敏雄／浜田誠司／他。

16号【特集】痴呆性高齢者のことと暮らし  
◎石橋典子／大熊一夫／小澤勲／浅野弘毅／森山公夫／高橋幸男／竹中星郎／他。

\*B5判／並製／各1,700円



深淵から  
精神科医物語【第一巻】  
蓮澤 一朗 著

「彼らは狂っているのではない、苦しんでいるのだ。その凄まじいエネルギーに満ちた苦悩は至って誠実だ……」  
◎四六判／上製／一八〇〇円

深淵へ  
精神科医物語【第二巻】  
蓮澤 一朗 著

謎多きへ病いへの深淵に挑んだひとりの若き精神科医の、愛と苦悶に満ちた二〇のカルテ。好評第二巻、刊行。  
◎四六判／上製／一八〇〇円

批評社

〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36

Tel.03(3813)6344 Fax.03(3813)8990

http://hiyosya.co.jp

定価税別

● 待望の邦訳・いよいよ四月下旬刊行！

The Hundred Languages of Children  
The Reggio Emilia Approach—Advanced Reflections

C・エドワード&L・ガンディーニ&G・フォアマン編  
(佐藤学+森真理+塚田美紀訳)

子どもたちの百の言葉

— レジジョ・エミリアの幼児教育 —

★佐藤学監修 ベイリーの本Ⅱ幼児教育記録集  
V・ベイリー（下部千恵子訳）  
ウオーリーの物語 幼稚園の会話 2200円

● 佐藤学3部作  
カリキュラムの批評 公共性の再構築へ 4200円  
教師というアポリア 反省的実践へ 4000円

学びの快楽 ダイアログへ 5000円

● 森田伸子  
テキストの子ども ディスクール・レシナーマジユ 3300円

● 齋藤孝  
「ムカツク」構造 変容する現代日本のティーンエイジャー 3000円

● 櫻村愛子  
ラカン派社会学入門 現代社会の危機に おける臨床社会学 2500円

世織書房 〈価格は本体価格です〉  
http://village.infoweb.ne.jp/~fwgi4541/index.html  
横浜市保土ヶ谷区天王町1丁目12番地12(〒240-0003)  
Telephone 045-334-5554 Facsimile 045-334-4332



## 『社会臨床雑誌』・『社会臨床ニュース』への投稿のお願い

日本社会臨床学会編集委員会

- (一) 日本社会臨床学会は、学会機関誌『社会臨床雑誌』を当分の間、年三回発行します。また、学会機関紙『社会臨床ニュース』を必要に応じて随時発行します。
- (二) 学会機関誌・紙への投稿は、いつでも広く募っています。別に、特集等を予告して、それにそった投稿をお願いすることもあります。研究発表、実践報告、エッセイ、問題提起、討論、意見交換などの場として活用していきたいので、どしどしご投稿下さい。
- (三) 原稿枚数は、四百字詰め原稿用紙三十枚程度としますが、それを越える場合には、編集委員会に御相談下さい。また、「この場所」から、「映画と本」で考えるは、原稿用紙五～十枚程度とします。
- (四) 投稿原稿の採否は編集委員会で決定し、その結果をお知らせします。
- (五) 掲載させていただいた方には、掲載誌・紙五部を贈呈します。それを越える部数を希望される場合には、編集委員会に御相談下さい。
- (六) 投稿原稿は原則として返却しませんので、コピー等をお手許に保存して下さい。
- (七) 原稿を、ワープロ、コンピュータ等を使用して執筆されている方は、印字された原稿とともに電子化された原稿データも(フロッピーディスク、電子メール等)お届け下さるようお願いします。御使用の機種、ソフトウェア等により調整が必要ですので、編集委員会にお問い合わせ下さい。
- (八) なお、編集委員会へのお問い合わせは、学会事務局を通してお願いします。

### 会費／購読会費について

日本社会臨床学会の運営は、会員／購読会員の会費／購読会費によって行われています。

会計年度は、四月より翌年三月までを一年とし、年会費は、会員、購読会員とも六〇〇〇円です。翌年度分を、現年度中に納入いただくことになっています。

会員／購読会員の皆様には、『社会臨床雑誌』・『社会臨床ニュース』を郵送でお送りしていますが、その際に、封筒に貼付してある送り先の住所ラベルの右下隅の数字が、現在納入いただいている会費の最終年度を示しています。

例えば、「1-[1998]」となっていた場合、一九九八年度分まで納入済、「1-[2000]」ならば二〇〇〇年度分まで納入済ということになります。もしも「1-□」となっていた場合、「一度も会費を払っていない」ということになります。

ちなみに、年度の数字の前の「1」は「会員、または購読会員」を示しています。

会費は、何年度分の会費かを記入の上、「郵便振替00170-9-707357 日本社会臨床学会」に納入下さい。

# THE SHAKAI RINSHO REVIEW

## The Japan Shakai Rinsho Association

*Editorial and Publication Office:*

*c/o N. Hayashi, Department of Info-Education, Faculty of Education, Ibaraki University,  
2-1-1, Bunkyo, Mito-shi, Ibaraki-Ken, 310, JAPAN*

## CONTENTS

Prologue \_\_\_\_\_ The Editorial Committee, The Association \_\_\_\_ (1)

### 〈Workshop〉

#### How Should We Understand the Recent Juvenile Delinquency in Japan?

The Report Presented by Sasaki, K. and The Discussion Summarized by Hirai, H. \_\_\_\_ (2)

A Consideration on "Mental Education" and "Mental Care" \_\_\_\_\_ Ozawa, M. \_\_\_\_ (7)

Not to Be Misled by "Mental Education" and "Power to Live" \_\_\_\_\_ Harauchi, R. \_\_\_\_ (15)

Subjects of Socio-Clinical Study in Psychology-Oriented Society(1) \_\_\_\_\_ Inoue, Y. \_\_\_\_ (26)

Integrated Education Viewed by the Handicapped \_\_\_\_\_ Takeshima, T. \_\_\_\_ (37)

The Recent Intelligence Studies \_\_\_\_\_ Yamashita, T. \_\_\_\_ (46)

Today's Problems Found at a Child Guidance Clinic \_\_\_\_ Segawa, M. & Tozune, K. \_\_\_\_ (61)

#### Thinking about the Recent Discussion on "Shakai Rinsho" at the Association

\_\_\_\_\_ Matsuda, H. \_\_\_\_ (68)

### Film & Book Reviews

Namikawa, S.(71)

#### “Where We're At”

Ogaki, T.(79)

Announcement: The 9th Convention of the Japan Shakai Rinsho Association \_\_\_\_\_ (0)

The Editors' Comment \_\_\_\_\_ (81)

# The Japanese term *Shakai Rinsho* literally means clinical work on society. However, the meaning is still vaguely defined by our association and we refrain from giving it a precise English equivalent at this time.